

# 天使の誤算

## まっただま

天国に行くはずの男が、天使のミスで生き返ってしまうが、なぜか過去に殺人を犯した男として生き返ってしまった。

殺人犯として生きていくうちに、男は元の人生で、大きな過ちを犯したことに気づく。

男は元の人生に戻って過去の過ちを償うことができるのか……

テーマは  
家族愛！  
これを機に  
家族に感謝！



# 目次

生と死 . . . . .	1
天国と地獄 . . . . .	20
幸と不幸 . . . . .	41
愛と憎 . . . . .	79



## 生と死

「いってきます」

娘の柚菜の声が聞こえた。その声は小さくて低く、鉛を飲み込んだような声だった。

「いってらっしゃい。大丈夫？」

次に妻の沙知絵の心配そうな声をした。

一人で朝食を食べていた私は、食べる手を止め、顔を上げた。玄関に向かう柚菜と目があったが、すぐに私の方から目を逸らし下を向いた。次に顔を上げた時には、柚菜はすでに背中を向けていた。彼女は摺り足気味で歩幅が狭く、足枷でもつけられているような歩き方だった。

沙知絵がキッチンから出てきて、柚菜の後を追いかけていく。柚菜はこれから学校へ行くようだが、明らかにそれが嫌だという態度だった。情けない娘だなと、一人舌打ちをした。

沙知絵のように優しく接する気にはなれなかった。学校で悩みがあるのかもしれないが、高校生が抱える悩みなど軽いもので大したことはない。私なんて職場でもっと重たくさんの悩みを抱えている。今の柚菜が抱える悩みの何十倍も重い悩みをだ。柚菜は何を甘えているんだ。この調子だと将来が思いやられる。

柚菜は自宅からバスで三十分くらいのところにある県立高校に通う高校一年生だ。学校がおもしろくないのかもしれないが、そもそも学校なんておもしろいところではないのだ。それを我慢することもせずに態度に出しすぎだ。柚菜がああいう態度をとるのは沙知絵が甘やかしているせいだ。

「柚菜、無理しなくていいのよ」

沙知絵がまた心配そうに声をかけている。『沙知絵、放っておけ』と怒鳴りたい気分だった。

「うん、でも大丈夫」

柚菜の方は相変わらず元気のない声だ。大丈夫と言うのなら、もう少し元気な声を出して、親を安心させろ。

「本当に？」

沙知絵、しつこいぞ。放っておけ。

「うん、心配しないで」

柚菜よ、心配しないでと言うなら、嘘でも元気なフリをしろ。甘えるな。

「高校は義務教育じゃないんだし、嫌ならやめてもいいのよ。なんなら通信教育だってあるんだし」

母親が娘をここまで甘やかすとあきれしかるしかない。

「でも、お父さんが……」

『お父さんが』という柚菜のか細い声が耳に引っ掛かった。私のせいなのか。私のせいで学校が嫌なのか。いい加減にしろ。言いたいことがあるなら、面と向かって私に言え。

その後の母娘二人の会話のボリュームは明らかに小さくなり、私の耳には届かなくなった。沙知絵が柚菜の耳元でコソコソと話している。きっと私の悪口でも言っているのだろう。

コソコソと二人だけの話が終わると、柚菜が玄関で靴を履いていた。

「じゃあ、お母さん、いってきます。心配しないで、大丈夫だから」

柚菜は沙知絵に笑みを向けていた。

「わかった。でも、無理しないでね」

沙知絵が柚菜の背中をポンポンと軽く撫でるように叩いて送り出した。

沙知絵は柚菜にだけは優しいなと思いながら、私はその様子をボンヤリと眺めた。最近の沙知絵の私に対する態度とは雲泥の差がある。

柚菜は私に対しては目を合わすこともなく、『いってきます』の声もなく出て行ってしまった。

柚菜は中学生になった頃から私を避けるようになっていた。そして最近は沙知絵まで私を避けるようになった。

柚菜は、そういう年頃なんだろうと、なんとか理解し、受け入れたが、沙知絵までが私を避けるようになったことに寂しさを越えて絶望に近いものを感じていた。家族ってこんなに冷めたものなのかと落胆する。

家族になる前の方がよかった。きっと沙知絵もそう思っているはずだ。沙知絵は私と家族になったことを後悔している。

沙知絵と出会った頃のことを思い出した。あの時に沙知絵は私ではなく当時の店長と結婚していたらどうなっていただろう。きっと今ごろ沙知絵の人生は色のついた輝いたものになっていたはずだ。沙知絵は今そう思っている。だから、私に冷たい態度をとるのだ。

あの日、あの事件がなければ、私と沙知絵が結婚することはなかった。まともに話することもなかったかもしれない。沙知絵にとって私の存在など記憶の片隅にも残っていなかっただろう。あの事件さえなければ。

当時、私と沙知絵は、私が今働いている食品スーパーで働いていた。私は今と同じ精肉売場を担当し、沙知絵はレジを担当していた。沙知絵はすらりと背が高く、背筋がピンと伸びてショートカットの髪がよく似合う女性だった。丸みのあるきれいな額とはっきりした目鼻立ちが聡明に見えた。見えただけでなく実際に聡明な女性だった。仕事をテキパキとこなし、アルバイトに的確な指示を出す。他部署とのコミュニケーションもうまくてみんなからの信頼も厚かった。

当時の店長も沙知絵を信頼していた。そして店長と沙知絵は付き合っている、結婚間近じゃないかという噂も飛んでいた。美男美女でお似合いだという人、仕事とのけじめがないと苦言を言う人、本人たちの知らないところで噂は真実のように渦巻いていた。

その店長と私は同期入社だったが、その時点で二人の出世のスピードには大きな差がついていた。

私も沙知絵に秘かに好意を抱いていたが、背が低く小太りの上、若いうちから髪の毛がさびしいヒラ社員の私が店のマドンナのような沙知絵と釣り合うとは到底思わなかった。一方、店長はイケメンで、同期のなかでは出世頭だ。私が勝てる要素など微塵もない。私は沙知絵のことは高嶺の花だと早々に白旗をあげていた。なので、沙知絵とは同じ職場でありながら挨拶程度しか言葉を交わしたことはなかった。

そんな私と沙知絵の距離が近づくことになるのは、ある事件がきっかけだった。その事件は店長が休みの日に起こった。あの日に店長が出勤していたら、私と沙知絵の人生は今とは大きく変わっていただろう。

事件と言っても大したことではない。ちょっとしたお客さんとの揉め事だった。

その日は朝から銀の針のような強い雨が降り、お客さんは少ない日だった。暇だったので長い時間、喫煙所でタバコを吸っていた私は作業場に戻る前に、フラッと店内を覗いた。

「このボケー」

店内に入った時、レジの方から耳を裂くような怒鳴り声が聞こえてきた。お客さんが怒鳴っているのだとすぐにわかった。嫌な予感がしたが、無視することも出来ず、私は怒鳴り声のするレジの方へと向かって歩いた。

見ると、レジに沙知絵が立っていて、男性のお客さんが沙知絵の前に立ち、彼女を睨みつけていた。面倒なことに巻き込まれそうだと思いながらも私は仕方なく沙知絵と男性客の立つレジへと向かっていった。

怒鳴り声の主は、五十歳くらいで背は低く細くて鶏ガラのような男だった。

「謝ってすむもんじゃねえんだよ。だからちょっとわしに付き合えよ」

男はそう言って沙知絵の左手首を掴み引っ張った。沙知絵は抵抗していたが、男は鶏ガラのくせに意外と力が強いようで、沙知絵はずるずると男に引っ張られていた。

「やめてください」

いつも冷静でクールな沙知絵だが、この時はさすがに悲鳴のような声を上げた。

「やかましいわー」

男は沙知絵の頭を張った。

「お、お客様、す、すいません。ど、どうされましたか」

私は慌てて男のところまで行って声をかけた。

男は私の方に振り返りぎょろりとした濁った目で私を睨んだ。男の顔を近くで見ると頬骨が出て顎が張った爬虫類のような顔だった。

「なんだ、てめえ。わしの邪魔する気か」

男は私に顔を近づけ唾を飛ばしながら怒鳴った。男の口から飛ぶ唾液が顔面に当たる。まだ午前中だというのに男の吐く息は酒の臭いがプンプンとした。私は男の唾液で濡れた顔を拭き顔をしかめた。

「なんだ一、そのツラは。わしは客だぞ。それが客に対する態度か」

男は私の胸をドンとついた。

「も、申し訳ありません」

とりあえず頭を下げた。男を冷静にさせて帰ってもらうしかない。

顔を上げてから、沙知絵の方にチラリと視線を向けると、沙知絵は唇を噛みしめて俯き加減でいた。私の視線に気付いたのか顔を上げた時に目が合うと、沙知絵は私に向けて申し訳なさそうに眉をハの字にして小さく頭を下げた。

「何があったの？」沙知絵に近づき声をかけた。

すると、すぐに男が口を挟んできた。

「どうもこうもねえよ。この姉ちゃんがわしから余分に金奪おうとしたんだよ」

男はそう言って沙知絵を睨めるように見た。

「奪おうだなんて、そんな……」

沙知絵が反論しようとしたが、私は手で制した。

「さようでございますか。それは申し訳ございませんでした」

私は男に向かって深々と頭を下げた。沙知絵に非がなさそうだが、ここは謝って終わらせようと思った。

「謝ってすむかよ。ボケ」

男は私に向かって、ペッと唾を吐いた。それが私のズボンにかかった。見るとズボンの裾に黄色い痰のようなものがついていて、腹が立ったが、一応お客さんだし、手を出すわけにはいかない。それに腕力には全く自信がない。反対にボコボコにされるのがオチだ。私はグッと堪えた。

それから男は意味不明な言葉を喚きちらしていたが、それを整理すると、男の買った酒が値札より高くレジで請求されて、その差額を沙知絵がネコババするつもりだったと怒っているようだった。

確かに値段を間違えるのはお客さんに迷惑がかかるからあってはならないことだ。しかし、だからと言って、沙知絵がネコババしようとしたと怒り出し、彼女を外に連れ出そうとするのはおかしい。それに実際は沙知絵がレジで金額を打ち間違えたわけではなく、あらかじめレジに登録されていた値段が間違っていたのだ。お酒の担当者が値段を登録するのを間違えたのだろう。お客さんがそのことがわからないのは仕方がない。

私は沙知絵と男の間に入りお詫びをし、余分に受け取ってしまったお金を返金すると、男に頭を下げて差額の現金を男の前に差し出した。

「金なんて、そんなのどうでもいいんだよ」

男は声を荒げて私が差し出した手を思いっきり払った。そして、私が手に持っていた小銭がチャリチャリリーンと音を立てて床に転がっていった。落ちた小銭を目で追いかけると、十円玉がコロコロと転がりレジ台の下に消えていった。

「そんなはした金は、どうでもいいんだよ。これはわしの気持ちの問題だ。このままだとわしの気持ちが収まらねえんだ。だから、この姉ちゃんをわしの家に連れて行って、土下座させてから酌してもらうんや。なんだかんだ言ってもこの姉ちゃんベッピンやからそれで許したるわ。姉ちゃんにも酒飲ましたるしな。二人で楽しもうや。さあ、行くぞ」



男は卑しい笑みを浮かべ、また沙知絵の左手首を握って連れだそうとした。  
「申し訳ありません。それでしたら彼女の代わりに私がお客様のご自宅まで行かせていただきます」

私はそう言った。私も必死だったのだろう。気の弱い私だが、この時は男に対する恐怖心は消えていた。店長がいない以上、自分が何とかしなければならない、沙知絵を守らなければならないと思った。

私は沙知絵と男を引き離そうと、沙知絵の腕を持つ男の手首を強い力で握った。腕力には自信がないが、毎日のように包丁を握り肉を切っているためか、握力には自信がある。それでも男がなかなか沙知絵の腕を離そうとしないので、つい男の手首を握る手に力が入った。

「いてー」

男が悲鳴をあげ、沙知絵の腕を離したので、私も男の手首を持つ手を緩めた。

その瞬間だった。男の拳が私の顔面に向かって飛んできた。  
『バシッ』という鈍い音がした。顔面に痛みが走り、目の前に赤いものが飛んだ。頭がポーッとして体がふらついた。

ふらついて倒れそうになるのを堪え前屈みになった。今度は目の前に汚れた黒い革靴が見えたと思った瞬間、革靴の先が鳩尾に突き刺さった。目の前が真っ暗になり、続けて鳩尾に鈍い痛みがした。私は尻餅をつくように後ろに倒れた。胃の中から何か酸っぱい固形物が口の上ってきた。気が遠くなり床にうつぶせた。

『キャー』という耳をつんざく悲鳴が遠くの方で聞こえた。

床に倒れたが意識はあった。しかし、起き上がりたくても体に力が入らず起き上がれない。体が言うことをきかない。たくさんの足音が床に響いて聞こえてくる。

「すぐに警察呼んだ方がいいわ」甲高い女性の声をした。

「それより救急車よ。早く救急車、誰か呼んであげてー」悲鳴のような声をした。

次々にあちこちから声が飛んでくる。

倒れたまま首だけを持ち上げると男と視線がぶつかった。男は口を開け、少し青ざめて震えていた。

「お、お前が悪いんやぞ」

男は私に向けて人差し指を向けた。

「お、お前が先に、手を出したんやからな」

男はそこまで言って、すぐに踵を返し、そして「どけ、どけー」と野次馬をかき分け、逃げるように走って店を出て行った。

「大丈夫ですか？」

入社二年目の男子社員の三宅が私の前に屈んで、声を掛けてくれた。

「あ、ああ、だ、大丈夫だ」

「大沢さん、立てますか？ 肩貸しましょうか」

三宅が肩を貸してくれた。三宅は学生時代柔道部でガタイがいい。

「ああ、有難う」

私は鼻をおさえながら三宅の肩に手を置いて立ち上がった。しばらくフラフラしていたので三宅の肩に手を置いたままにした。

立ち上がってから周りを見渡すと従業員やお客さんの視線が私に集中していた。今の騒ぎで、みんな買い物どころではなくなったようだ。

「あらー、大変、鼻から血が出る。救急車呼んだほうがいいわ」

いつも肉を買ってくれる常連の女性のお客様が私の顔を見て、眉をハの字にして言った。

「ありがとうございます。でも、もう大丈夫です。ご心配おかけしました」

私はそう言って三宅の肩から手を離し、ふらつきながらも頭を下げた。

そして、周りを見渡すと「ありゃー」と自然と声が出た。

私の鼻血がレジやレジ台、床に飛び散っていた。自分のお腹に視線を向けると、白衣が赤く染まっていた。鼻を指で触ってみると指にべっとりと赤いものがついた。

「本当に大丈夫ですか」

沙知絵が心配そうな顔をしていた。

「大丈夫だよ。それより、この辺を汚しちゃって申し訳ない」

私は沙知絵に向かって頭を下げ、ズボンのポケットからハンカチを取り出し、血が飛び散っているレジ台を拭いた。しかし、私の色褪せた薄っぺらいハンカチでは焼け石に水だった。ハンカチはすぐに真っ赤に染まり、赤い血をレジ台の上に引き伸ばしているだけで、余計にレジ台は汚れてしまった。

「そんなこといいです。わたしの方こそ、ごめんなさい。大沢さんは悪くないのに」

沙知絵がそう言ってポケットからハンカチを取り出した。そして、私の目の前に立ち、ハンカチを持った手を伸ばし私の鼻にそっと当てた。

ハンカチから花のようないい匂いがした。沙知絵の手の感触がハンカチ越しに鼻に伝わる。私はそのまま気を失いそうになった。

この日まで、私と沙知絵は挨拶程度の言葉しか交わしたことがなかった。沙知絵とともに会話をしたのはこれがはじめてだった。この日の夜は、沙知絵のことで頭がいっぱいで眠れなかった。ギュッと枕を抱きしめて沙知絵のことを思った。

次の日、家を出ると前日とは打って変わって、雲ひとつない真っ青な空が広がっていた。店は前日の大雨の反動で、朝の開店からたくさんのお客さんが買い物に来てくれた。昨日の怪我は大丈夫だったのか、とあたたかい声を掛けてくれるお客様もいて、有り難くて胸が熱くなった。沙知絵のことが気になったが、姿が見えなかった。

作業場で忙しく肉を切っていた。すると、ドアの窓から誰かがこっちを覗いている気配を感じた。肉を切る手を止めて、スイングドアの窓に視線を向けた。小さく四角い窓の向こうに沙知絵の小さな顔が見えた。

窓越しで目が合った瞬間、沙知絵がぺこりと頭を下げた。その時、私の胸は跳ねた。とりあえず私も小さく頭を下げて、慌てて手を洗い作業場から出ていった。

「お、お疲れさま。どうかしましたか？」

私は後頭部を掻きながら挨拶をした。顔が熱くなっていくのがわかった。

「昨日は助けていただいて有難うございました」

沙知絵はいつものように背筋をピンと伸ばしてから腰を折った。

「礼なんていいですよ。それより鼻血でレジの周り汚しちゃったから、反対に迷惑かけちゃったんじゃないかって心配でした。それに助けるどころか、殴られて蹴られてぶっ

倒れて、ほんとみっともなかったです」

沙知絵を前にして体の温度がドンドン上昇していくのがわかった。前日に沙知絵が鼻に当ててくれたハンカチのいい匂いを思い出した。

「いえ、そんな、みっともないことなんて絶対にありません。大沢さん、すごくかっこよかったですし、わたし、すごく感謝しています」

「そ、そう。それなら良かったけど」

「あ、あの、これ、昨日のお礼です」

沙知絵が紙袋を私の前につき出した。

「えっ」

私はつき出された紙袋を見た。近くにある百貨店の紙袋だった。

「これは？」と沙知絵の顔を見て訊いた。

「昨日、大沢さんのハンカチ汚れちゃってたので、これハンカチです」

「あ、有難う。あんなボロボロのハンカチなんてどうでもよかったのに」

私はボリボリと後頭部を掻いた。

「いえ、そういうわけにはいきません。どうぞ、受け取ってください」

沙知絵が紙袋を持った両手を伸ばしてペコリと頭を下げた。

「あ、ありがとう」

私は汗ばんだ両手で紙袋を受け取った。わざわざ百貨店まで、これを買に行ってくれたのかと思うと胸が熱くなった。外見がきれいなことはわかっていたが、心まで、こんなにきれいな女性だとは思わなかった。私は完全に沙知絵に惚れてしまった。

月とスッポン、美女と野獣、周りはバカにするかもしれないが、そんなことはもうどうでもいい。私は彼女に惚れた。この気持ちを彼女に伝えたいと思った。

以来、私は沙知絵とよく言葉を交わすようになった。沙知絵と話してみると、新しい発見がいろいろとあった。彼女はクールでとっつきにくい印象だったが、おちゃめな一面も見せてくれた。本当は優しくておもしろい女性だなと思った。日に日に彼女への気持ちが膨らんでいくのを実感した。

沙知絵は私のことなど、ただの職場の先輩の一人としか思っていないかもしれないが、とりあえずそれでもいい。自分の気持ちを伝えるだけは伝えたい。

それから、一ヶ月が経ったある日、思わぬ形で沙知絵を食事に誘うチャンスがやってきた。休憩中に見ていたテレビ番組でお好み焼の特集をやっていた。それを見ていた沙知絵が久しぶりにカキオコを食べたいなど、一人言のように言った。カキオコとはこの地域で有名な牡蠣を肉の代わりにお好み焼きにトッピングしたご当地グルメである。

私はその声を聞き逃さなかった。食事に誘うチャンスだと思った。カキオコなら行きつけの美味しい店を知っている。

「カキ、カキオコが、す、すきな？」

少し声が震える声で沙知絵に訊いた。

「はい。好きです。久しぶりに食べたいです。大沢さん食べに連れてってくださいよ」

にこやかでハツラツとした沙知絵の声に頭が真っ白になった。もちろんオーケーしたのだが、その時どんな言葉を発したのか記憶が飛んでいる。

三日後の仕事終わりにカキオコを食べに行くことが決まった。それからの私は眠れない夜が続いた。彼女にとっては、今回カキオコを二人で食べに行くことは男女のデートのつもりではなく、たまたま話の流れでカキオコを食べに行くことになっただけかもしれないが、私にとっては一世一代の勝負の時だ。生まれてはじめて女性と二人きりで食事に行く。それも大好きでたまらない女性と行くのだ。ここで告白しなければ一生後悔するだろう。ダメでもいい。ダメで当たり前なんだ。断られることを恐れるな。気持ちを伝えるだけでいい。断られたら、今まで通り職場の仲間として接すればいいんだと、三日間、布団のなかで自分に言い聞かせた。

沙知絵と二人だけでカキオコを食べた。生まれてはじめてカキオコが美味しいと感じなかった。全く味わうことができなかった。飲み過ぎてはいけないと思いつつも、ビールばかりをあおっていた。目の前では美味しそうに沙知絵がカキオコを食べて、そして生ビールを飲んでいて。ゴクゴクと喉を鳴らしてジョッキから口を離れた瞬間に私に向かって嬉しそうな笑みを向ける。その表情に私の胸が跳ねる。

カキオコを食べた帰り道、覚悟を決め沙知絵に交際を申し込んだ。オーケーの返事もらった時は夢のようだった。気は早かったが、私の両親が築いてくれたようなあたたかい家庭を彼女といっしょに築くんだと心に決めた。

なのに、そうはならなかった。沙知絵は変わってしまった。あの頃の聡明で心優しい沙知絵はどこにいったんだろう。

あの日、あの酔っぱらいがクレームをつければ、私と沙知絵は結婚していなかっただろう。あの頃はあの事件のおかげで沙知絵と結婚できたと喜んでいて、最近はその事件のせいで、お互いが不幸になってしまったと思うようになった。

柚菜は学校へ行き、沙知絵はパートに行った。仕事が休みで残された私は一人で朝食を食べていた。朝食といっても、沙知絵が準備していたのはシリアルだけだった。それに自分で牛乳をぶっかけた。牛乳で湿っていくシリアルを見て虚しい気持ちになった。それが朝食だとは認められなかった。不味いとはいわないが、おやつのようにしか思えない。

つい最近までの大沢家の朝食は私の好きな和食だった。それが急にシリアルに変わってしまった。たぶん、和食は作るのが面倒なのと、沙知絵が年頃の柚菜の好みに合わせたのだらうと思った。

確かに朝から和食を作るのは大変だとは思いますが、娘を優先する前に一家の主である私に一言相談があってもいいだろうと思う。私は白いご飯に焼き鮭、それと味噌汁にお新香、そんな和の朝食が大好きだ。それを家族揃って食卓を囲んで食べるのが理想だ。沙知絵もそれを知っているはずなのに、全く相談もなくある日突然変わってしまった。

一ヶ月ほど前、目を覚ますいつもの味噌汁の香りがしなかった。おかしいなど食卓を見ると、シリアルの入った深めの皿がテーブルの上にポンと置いてあるだけだった。

「えっ、なんだこれ？」

私はシリアルの入った深めの皿を見ながら沙知絵に訊いた。

「朝御飯、今日からこれにしました」

沙知絵が平坦で無機質な声で言った。  
「俺に相談も無しにか」と私が言うと、沙知絵は言葉を発することなく、大きくため息を吐いてから私を睨んだ。私は次の言葉を飲み込むしかなかった。

私が子供の頃、母は和の朝食を毎日のように作ってくれた。メニューは焼き鮭やだし巻き卵、明太子、ひじきの煮物、酢の物、納豆、焼き海苔、梅干し、沢庵など、日によっていろいろと変わった。

その頃の朝食はいつも父親の拓三と母親の五月と私の三人で食卓を囲んだ。裕福な食卓ではなかったかもしれないが、贅沢な食卓だった。母親の作る朝食は本当に美味しかったし、両親と過ごす朝のその時間が幸せだった。

その朝食のおかげで、一日を元気にスタートできる気がした。学校で嫌なことがあっても朝食を食べると元気になれた。しかし、そんな幸せだった子供の頃の朝食の時間も突然無くなってしまった。それは私が十二歳の時に父親が重い病に倒れ、そのまま亡くなってしまったからだった。

父親が亡くなってから母親はめっきり元気を無くしてしまい、朝食は食パンを焼いたものと牛乳だけになってしまった。そんな母親も私が二十五歳の時に父親と同じ重い病に倒れた。

それからの私は一人で暮らした。一人で暮らすようになってから私の生活から朝食は無くなった。私にとっての朝食は家族の幸せの象徴みたいなものなのだ。

沙知絵は自宅から自転車で十五分くらいのところにあるショッピングセンターマルナカというスーパーでレジの仕事をしている。週に五日、午前九時から午後五時まで長い時間働いている。こんなに働かなければならないのは、私の給料が安いからだと嘆いているのかもしれない。

それにしても沙知絵はなぜこんなに私に対して冷たくなってしまったんだろうか。いつ頃から私たち夫婦はこんなに冷めてしまったんだろうか。

こうなってしまったのは、ここ最近のはずだ。柚菜が高校に入学するまではこんなことはなかった。これまでもお互いに不平不満をぶつけ合うことはあったが、今のように刺々しく冷めた感じではなかった。喧嘩することはあったが、知らない間に仲直りしていた。今は喧嘩しているわけではないので仲直りのしようもない。強くはないが非常に冷たい風が二人の間に吹いている。沙知絵が私に愛想をつかせ冷めてしまったようだが、なぜ愛想をつかせてしまったのか、その理由が全くわからない。

シリアルを食べ終えて、沙知絵と柚菜が帰宅する前に家を出た。職場の後輩の高山に誘われ、もう一人の後輩の清水と三人で飲みに行く約束をしていた。

私と高山、清水の三人は同じ食品スーパーで働いている。高山は野菜売場を担当し、清水は鮮魚売場を担当している。二人とも歳は私より五つ年下だ。

私は精肉売場を担当し、毎日肉を切りパックをして冷蔵ケースにそれらを並べる。お客さんから昨日買った肉が美味しかったと言われるとすごく嬉しい気持ちになるが、仕事の喜びはその一瞬だけだ。お客さんに喜ばれたからといって給料が上がるわけでもない。

反対にお客さんからクレームが入ると頭を下げ、酷い時は、お客さんが本社に連絡を入れて、同期入社 of イケメンの部長が真っ赤な顔をして店に現れる。部長は言いたいことだけを早口で捲き立て、私の評価を下げて現場を後にする。部長はあの時沙知絵と噂のあった店長だ。この部長と沙知絵が結婚していたら、沙知絵の人生はどうなっていたのだろうか。部長なら沙知絵を幸せにしていたのだろうか。

私と高山と清水は職場からも家族からも見放されて毎日愚痴を言い合う三人組だった。だから私たちはよく三人で飲みに行く。思いっきりビールを飲んで、ゲロといっしょに嫌なことを全て吐き出すのだ。

私は入社して二十八年になるが役職は未だにチーフだ。同期の連中のほとんどが現場から離れ課長や部長になってバリバリと会社のために働いている。私だって会社のために真面目にバリバリと働いてきたつもりだが、上からの評価は同期の中では下の下の下だ。

人事の評価なんて結局は上司の好き嫌いで決まってしまうものだと、出世することを諦めてからどれくらいの年月が経つのだろうか。

入社した日のことを思い出す。あの頃は希望に満ちあふれ、精肉の担当者としてやりがいがあった。しかしそのやりがいは日に日に削ぎ落とされて、今ではほとんどなくなってしまった。

この日は高山と清水と三人で盛り上がった。最後のジョッキを空にしてから居酒屋を後にした。

まだまだ話し足りなかったが、清水がハイペースで飲み過ぎて、体調が悪くなったのでお開きすることにした。居酒屋を出て、駅へと抜けるシャッター街を三人横一列に並んで歩いた。シャッターが風で揺れ、我々の心のような鈍い金属音を響かせていた。

清水がフラフラと鈍い金属音に引っ張られるようにシャッターの前に立つ電柱に体を預けた。三人の中で一番アルコールの弱い清水が今日はハイペースで一番量を飲んでいった。

「清水、大丈夫か？」

私が声をかけたら、清水は電柱に額を当て左手を上げた。

清水は、「だい、……」と言ったところで言葉を切り、「じょうぶです」という言葉の代わりに、「ゲボッ」と喉の奥から音を出して電柱に額を当てたまま思いっきりゲロを吐いた。

私は慌てて清水の元まで行き、清水の背中をさすった。

「おい、大丈夫か」

清水の顔を覗きこんだ。清水の体は痙攣していた。清水の背中を上下にさする度に清水の口からゲロが温泉がわき出るように噴き出していた。清水の口からゲロがボタボタと地面に落ちて足元にゲロの島ができていく。清水の口から次々と吹き出るゲロが島の上に落ちて、島がドンドン大きくなっていく。それを見て私まで気分が悪くなり吐きそうになった。

清水は胃の中が空っぽになってゲロが出なくなっても、まだ「オエー、オエー」と喉の奥から音を出していた。

清水の横顔を覗きこむと、目から涙が溢れ出ていた。涙は清水の目から次々と落ちて、街灯に反射しキラキラ輝きながら、清水の吐いた足元のゲロの島の上にポタポタと落ちていった。

清水は先月離婚した。これまで飲みに行く度に奥さんの愚痴をこぼしていた。さっさと別れて自由になりたいと言っていたはずなのに、離婚してからの清水はめっきり元気を失っていた。

清水から離婚することになったと聞いた時、私は、「自由になれるから良かったな」と言ってしまった。

清水はその時、目尻が上がり、キッと私を睨んだ。

「良いわけないですよ」

大人しい清水がめずらしく声を荒げて唇を尖らせた。

「えっ、そ、そうなのか」

「当たり前です。離婚して良いわけないです」

「す、すまん。お前、奥さんと別れたかったんじゃないのか」

「本気で思ってるわけないでしょ」

「そ、そうだよな。すまん」

私はもう一度、謝って俯いた。

自分も沙知絵のことを愚痴ってはいるが、本当に別れるとなるとこうなってしまうのだろうかと思った。

しかし、沙知絵の方は早く別れたいと思っている。目の前の清水の姿は、近い将来の自分の姿なのかもしれない。清水は、その後、俯いたまま何も言葉を発しなかった。

この飲み会は清水を元気づけようと高山が計画をしたものだった。私もなんとか清水を元気づけたいと、高山の計画にのった。

しかし、清水の背中をさすりながら目から落ちる涙を見ていると、私と高山の計画は効果が無かったように思えた。

清水が少し落ち着いたので、また三人で駅へと向かって歩いた。夜空を見上げると三日月が涙目のように見えた。

駅まで着いて、そこからは三人の帰る方向はバラバラだ。高山は駅からは徒歩で帰る。私と清水は電車に乗って帰るのだが、帰る方向は逆だ。

駅に着いてから高山が清水はタクシーで帰らせた方がいいんじゃないですか、と言ってきた。意識はしっかりしているように見えたが、私もその方が安心だ、と同意した。

清水をタクシーに乗せるために駅のロータリーにあるタクシー乗り場へと三人で向かった。高山が清水を抱え、私は駅前で待つタクシーの運転席側に回りドアの窓を叩いた。

「すみません」

俯いていたタクシーの運転手が気付いて顔を上げ私に視線を向けてから窓を開けた。

「はい」

「彼を自宅までお願いできますか？」

高山が抱える清水に視線を向けて言った。

運転手は後ろのドアの前に立つ二人を見てから眉間に皺を寄せて、「抱えられてる

人？」と私に訊いた。

「はい、そうです」

「大丈夫なの？　中で吐かない？」

運転手が口元を歪めた。

「大丈夫です。胃の中の物は全部出しちゃってるから」

私はそう言って財布から五千円札を抜き取り、運転手の目の前に出して行き先を伝えた。運転手は渋々といった感じで五千円札を受け取り、「フーン」と不満そうな息を吐いてから後ろのドアを開けた。

高山が清水を後ろの座席に押し込んで、運転手に向かって「すみません」と頭を下げた。

私も「すみません、お願いします」と頭を下げた。

「清水、大丈夫だな。気をつけて帰れな」

高山がタクシーを覗きこんで言った。

「有難う。迷惑かけたな。もう大丈夫だ」

清水は右手を上げて高山に言った。

「清水、お疲れ」

私が言うと、清水は、「大沢さん、今日はありがとうございました」と言って鼻をすすりだした。

「いいよ、いいよ」

清水の意識はしっかりしていたようだ。少し安心した。

「じゃあ、運転手さん、お願いします」

運転席を覗きこんで、運転手にもう一度頭を下げた。

運転手は私を一瞥してすぐに車を出した。走り出したタクシーの赤く光るテールランプを見ながら、高山と同時に「フー」と息を吐いた。

「清水、大丈夫ですかね？」

高山が私の横に立って訊いた。

「大丈夫だろ。酔いはさめてたんじゃないかな。電車でも帰れたかもしれない」

「いや、そっちじゃなくて」

「えっ？」

高山に視線を向けた。

「離婚の方ですよ。離婚してあんなに落ち込むとは思ってなかったんですけどね」

高山が両肩を上げ首を傾げた。

「そうだな。清水も奥さんのこと愚痴ってばかりだったからな。早く別れたい、なんて言ってたもんな。離婚が決まってスッキリしたのかと思ってたんだけど、本当に別れるとなるとやっぱり違うんだろな。本心は新婚の頃ような関係に戻れることを期待してたのかもな」

そう言ってから自分はどうなんだろうかと思った。

「大沢さんは、どうなんですか？　大沢さんも別れた方がスッキリするって言ってましたけど、本心は奥さんと新婚の頃のように戻りたいんですか？」



私の心を読んだかのような高山の質問に、私は苦笑いを浮かべるしかなかった。  
「いやー、どうなんだろうな？ わかんねえな。けど、今のままだと別れた方が嫁さんも娘も幸せな気がするけどな。いっそ死んでほしいと思われてるかもな」

今の私は自宅に帰っても寛げる場所はない。沙知絵の私を見る視線は、ここ数ヶ月、日を追うごとに冷たくなっているように感じる。柚菜も年頃になったせいもあるのだろうが、私とは目も合わせようとしない。自宅に私の居場所など全くといっていいほどなくなってしまう。

自宅は三十年の住宅ローンを組んで買った。郊外に買ったばかりに三十分だった通勤時間は二時間近くになってしまった。職場で辛い思いをしても、ローンの支払いのことを考えると、グッと我慢して働かなければならない。そんな思いをして買ったマイホームなのに、寛ぐ場所がないなんて本当にやりきれない。何のために私は生きているのかと思った。死んだ方が幸せなのかもしれない。

高山は私たち三人の中では一番幸せそうに見える。普段奥さんとの会話が無いが、たまに口を開けば愚痴ばかり言われると話していた。

でも、高山には私や清水のような陰鬱な感じがない。高山になぜそんなに元気なのかと訊いたことがあるが、高山は「まっ、お互い様だから」と言って笑っていた。

仕事の愚痴を一緒にこぼしても、高山だけは笑い話のように話す。そして、仕事の評価が低くても、「俺の場合はちゃんと仕事してないから、仕方ないですけどね」と笑う。

私から見れば高山の仕事ぶりはちゃんとしている。いつもお客さんのことを考え、お客さんに愛想よく振る舞っている。私たち三人の中では一番頑張っていると思う。

「大沢さん、今日は有難うございました。清水を元気にできませんでしたが、俺はすごく楽しかったです」

高山が別れ際にそう言って笑みをくれた。

「俺も楽しかった。また清水を元気づけてやろうな」

そうは言ったものの、清水を元気づけるほど、自分自身に元気がない。高山といっしょにいる間はいいが、高山と別れた途端、うつな気分になる。

「そうですね、人生はまだまだこれからですよ。楽しみましょうね」

高山が澁刺とした声で言った。

「そうだな」

私の声は風にかき消されるような小さな声になった。

高山は私に向かって右手を高く上げ大きく振りながら私が駅の改札に向かうのを見送ってくれた。高山はいつも元気で、落ち込まない。あいつは強いなと思った。

高山と別れて駅のホームに上がるとすぐに電車が入ってくるのが見えた。このままホームから飛び込めば楽になるのだろうか、天国に行けば、早くに死別した父親と母親と天国で幸せに暮らせるのかもしれないと、ふと思った。でも、この時は飛び込む勇気はなかった。

自宅の最寄り駅に着いた。ここから二十分かけて急な坂道を上らなければ自宅にはたどり着かない。自宅に着いた時の沙知絵の表情が頭に浮かんだ。また、深くて重いため

息が出た。吐いた息が宙で白く濁って消えていった。

居場所のない自宅へとなかなか足が向かない。このまま帰りたくない気分だ。信号が青に変わったが、進まずタバコに火をつけた。周りは足早に信号を渡って行く。タバコを吸っているうちに信号が赤に変わった。吸殻を地面に捨てて踏みつけた。その時に体が車道側にふらついた。

『キキキキッ』急に耳をつんざくような音が聞こえた。目の前にトラックが向かってくるのが見えた。

『バァーン』と鈍い音がして頭と胸の辺りに強い衝撃を感じた。

目を開けると白い天井が見えた。蛍光灯の白い光が目には刺さり視界が少しぼやけた。瞬きを繰り返し明るさに目が慣れると視界の端に白いものが見えた。視線をゆっくりと天井から移動させると白衣姿の男が立っていた。

男の顔を覗きこむ。年齢は私よりだいぶ若そうだ。三十代くらいだろうか。ボリュームのある黒々とした頭髪の下に小さくて白い細面の顔が覗いていた。細いフレームの眼鏡の奥の切れ長な目がじっと私の顔に向けられている。薄い唇は真一文字のまま平坦な表情をしている。

男は医者のような。その隣に看護師らしき女が立っていた。女の背丈は隣の医者より少し短く、髪は横幅は医者の倍ほどある。亀甲の眼鏡から覗かせるギョロリとした目と気だるそうに首を折る仕草にベテランの貫禄を感じた。

二人の顔を交互に見てから、今の状況を考えてみた。確か高山と清水と三人で飲みに行ったあと、二人と別れて帰路についた。その後、駅に着いてから信号待ちでタバコに火をつけた。その後だ。体がふらついてトラックが向かってきたのだ。

きっとトラックに跳ねられてここにかつぎ込まれたのだ。自分の体はどうなっているのかと、恐る恐る首を左右に動かしてみた。意外とスムーズに動く。首に痛みは全く感じない。起き上がろうと首を少し枕から持ち上げた。スッと持ち上がる。大丈夫そうだ。次に腹筋を使い体をゆっくりと起こしてみた。やはり痛みもなく簡単に体を起こすことができた。

以前より体が軽くなった気がする。これまでなら寝ている体勢から脂肪だらけのブヨブヨとした体を起こすのに腹筋だけでは無理で後ろ手に両手をつかないと起き上がれなかった。今は簡単に、ヒョイッと起き上がることが出来た。自分の体とは思えないくらいに軽い。

一体ここはどこの病院なんだ。このイケメンの医者に訊いてみようとイケメンの涼しそうな目を覗き込んだ。

「あの一、すみません」

イケメンに向かって声を発した。イケメンは私の声が聞こえていないのか全く反応せず平坦な表情のままだった。それに、私はベッドの上で体を起こしているというのに私の方に視線を向けることなく、じっと枕元を見ている。

おかしいかと首を傾げた。普通の医者なら、患者の意識が戻り起き上がったなら、『起き上がらないでもう少し安静にしてください』だとか、『意識が戻りましたか？ それは良かったです』だとか、声を掛けそうなものだ。イケメンは私に顔を向けることなく、

ずっと、平坦な表情で枕元に視線を向けている。

隣のベテランの看護師を見ると、医者と同じく私の存在を無視するかのよう、じつと手元の資料に視線を落としている。

「あの一、ここはどここの病院ですか？」

二人に訊いてみたが、全く反応がない。

背中に人の気配を感じたので、後ろに首を回した。すると沙知絵と柚菜が立っていた。

「沙知絵、柚菜、来てくれてたのか」

沙知絵と柚菜に向かって言ったが医者と同じように私に気付かない様子でずっと俯いていた。

「サチエ」病院の中だが、大きい声で呼んだ。

それでも、沙知絵からは何の反応もなく、下を向いたままだった。柚菜も同じだ。医者も看護師も反応がない。

「死んじゃった？」

沙知絵の隣に立つ柚菜が呟くように言った。

柚菜が『死んじゃった？』と言ったのは、どういう意味だ。私はこうして意識が戻り生きているじゃないか。

「柚菜、お父さんは死んでないぞ。意識を失っていただけだ。今さっき意識も戻ったぞ」

柚菜の顔を覗きこんだ。柚菜は私の言葉は無視して、口を尖らせて気だるそうな表情を浮かべていた。

「おい、柚菜」と呼んでみたが同じく全く反応がない。

「どうなってんだよ」

私は少し苛立ち、枕元に視線を向けた。

そこで、「うげっ」と喉の奥から変な声が勝手に出た。

「どういうことだ」

枕元から視線をそらし、天井を見上げて深呼吸した。

「意味がわからん」

もう一度、枕元に視線を向けた。

ベッドには私自身が横たわっている。頭に包帯が巻かれていて、顔は腫れているが、私に間違いない。今私はこうしてベッドから起き上がり座っているのに、ベッドに横たわり眠っている別の私がいる。

ベッドから出て、立ち上がり、ベッドで横たわる私ををよーく見る。やっぱりベッドで眠っているのは私だ。

沙知絵、柚菜、医者、看護師を順に見た。四人とも、私の存在に気付いていない。四人ともベッドに横たわるもう一人の私を見ていた。

そしてイケメンの医者がベッドに横たわる私に顔を近づけて瞳孔を確認してから腕時計に視線を落とした。

「十一月十一日、午前十一時五十八分、今お亡くなりになりました」

イケメンはそう言って沙知絵と柚菜に向けて頭を下げた。

「あなた」

沙知絵がベッドに近づき横たわる私に声を掛けた。

「お父さん」

柚菜もベッドに横たわる私を覗きこんだ。

沙知絵の顔を見た。口元が綻んでいるように見えた。

悲しんでいるようには見えない。柚菜の顔を見た。気だるそうにして首の後ろを掻いていた。悲しんでいると言うより面倒臭いといった感じだ。

ベッドの上で今息を引き取ったのは私なのか。そうすると今のこの私は一体誰なんだと自分の体に視線を向けた。すると自分の体が透けていることに気がついた。

「サチエー」と叫んでみたが、沙知絵の耳には届かないようだ。ベッドに横たわる私に視線を落としたままだった。

「ユナー」と叫んだが、やはり同じだった。

二人は涙を見せることもなく、表情を変えることもなく、ただ、こけしのように立って、ベッドの上で魂の抜けた私の体を眺めていた。そして、最後にイケメンの医者に向かって頭を下げた。なぜか私も二人に倣って医者に向かって頭を下げていた。

急に激しい風が吹いた。屋内だというのに台風並の強さだ。風速二十メートルくらいの立ってられないほどの風だ。体を低くして辺りを見回すと、病室の窓もドアも閉まっている。どこからこの強い風が吹きこんでいるのか全くわからない。

沙知絵や柚菜は大丈夫なのかと見てみると、不思議なことにさっきまでと変わらず平然と立っている。風を受けている様子はない。医者と看護師も同じだ。病室にある物全て、私以外は整然としている。

風が一段と激しくなった。そして、ついに私の体は宙に浮いた。手足をバタバタとしてベッドの手すりに手を伸ばすが掴めない。浮いた体は、そのまま風に飛ばされ病室の窓に向かって突っ込んでいく。このままだと私は窓に激突して、割れた窓ガラスで全身血まみれになる。恐怖に怯え窓にぶつからないようにと手足のバタバタを繰り返し必死で抵抗した。空中で平泳ぎのようなポーズをとった。しかし無駄な抵抗のようで、体はドンドン窓に向かっていく。必死で平泳ぎを続けるが全く効果がない。グォーと音を立て一段と強い風が吹いた。体がひっくり返り窓ガラスが目の前に迫る。ぶつかる瞬間に両手で頭を抱えて目を閉じた。ガッシャーんと激しく窓ガラスが割れるかと思いきや窓が割れることはなかった。

目を開けると私の体は窓ガラスをすり抜けて病院の外に飛び出していた。

四階の病室から飛び出た私は引力に逆らい、そのまま風の力に押されて風船のように舞い上がっていく。

私は顔面に風を受けながら、また平泳ぎを続け抵抗してみるが、全く効果がなく、体はどんどん空に向かって上昇していく。

さっきまで私のいた病室の窓がみるみる小さくなっていく。病院の屋上が見えた。屋上には数人の人影があった。その人影もあつという間に米粒のようになり病院の駐車場に停まる車も豆粒ほどになった。病院の周りの田畑が碁盤の目のように見える。私の体は止まることなく上昇していく。すでに抵抗する体力は残っていない。体を風に任せると、上昇するスピードがドンドンと増していく。

青く輝く瀬戸内海に小さな島が浮かぶのが見え、瀬戸大橋も見える。瀬戸内海の向こうには四国の山や街並みが広がる。視線を左に向けると淡路島に六甲山も見える。

それでも止まることなくまだまだ上昇していく。淡路島の形がはっきりわかる高さまで上昇した。大阪湾も見える。関空も見える。その向こうが和歌山県だ。まるで飛行機から見る景色だ。

和歌山県の上空に青く輝く強い光を見つけた。UFOだろうか。その光は私と同じくらいの速度で上昇している。しばらくその青い光を目で追った。

突然視界が真っ白になる。雲の中に突入したようだ。風の勢いが増し上昇するスピードが一気に加速する。

雲から抜けたのか、真っ白だった視界が急に藍色に変わった。そこでピタリと風が止まった。青い玉も同じく止まった。辺りを見渡すと足元には白い雲が広がり、それ以外は藍色の世界が広がる。ここは死後の世界なのか。

見渡す限り藍色一色。足元に幅一メートル位の水色の道が出来た。その水色の道は、眼前に広がる藍色の空間へオーロラのように曲線を描きながら伸びていった。青い玉にも同じく水色の道が伸びていた。

足元の水色の道をよく見ると、小さな氷の粒が敷き詰められていた。私の体は自分の意思とは関係なく、水色の道を氷の上を滑るソリのように滑りはじめた。

私は転ばないようにバランスをとり半身に構えた。スケボーを滑るような体制だ。これまでスケボーの経験など全くなかったのに、意外と転ぶことなくスムーズに滑っていった。

滑りながら周りを見ると、藍色の世界に無数の水色の道が走っている。水色の道は次から次へと現れ、藍色の空間に伸びていく。他の水色の道の上には青い玉が勢いよく滑っていた。

水色の道の上を適度なスピードで振動もなく滑っていく。本当にスノーボーを滑っているような感覚で、それもかなりのスノーボー上級者のような感じでなかなか心地がいい。

ただ、この先私は死に向かっているのだと思うと複雑な心境になる。私が病院のベッドで息を引き取った瞬間の沙知絵と柚菜の表情を思い出すと、この先、生きていても仕方ない人生だとは思った。早くに死別した父親と母親のもとに行った方が幸せなのだと思う。

しかし、やはり死にたくはなかった。もう一度、沙知絵と柚菜と家族三人で幸せに暮らしたい。しかし、死んでしまったのもう叶わない。まあ、生きていても叶わないのかもしれないが。

しばらく滑っていくと、先の方に大きな川が見えた。水量は溢れるほど多く流れは早い。ゴォーゴォーと音を立てている。川の水の色は赤錆色に濁っていた。もしかして、あれが三途の川なのか。

前を走るほとんどの青い玉たちは川の手前まで着くと一旦停止したあと、水色の道が一気に川の向う岸まで伸びて、そのまま川を渡っていった。

しかし、なかには川の手前で止まったまま水色の道が伸びないものもあった。それらの青い玉は、しばらく止まった後、そこからバックして戻っていった。バックする青い玉は、死に際で助かり生き返ることができた人たちかもしれない。九死に一生を得た人

たちだ。

私はどうなるのだろうか。三途の川を渡ってしまうのか、それとも引き返すことが出来るのか。三途の川が近づくとつれて心臓の音が激しくなった。

三途の川が目の前に見えた。そこで急ブレーキがかかりピタリと止まった。ここから水色の道が向う岸まで伸びるのか、それとも伸びないのか、私は祈るように両手を合わせた。やはり死にたくはない。右端に三途の川と書いてある立て札が見えた。

私はここから戻って生き返れるだろうか。もし、生き返れるなら、私は生き返りたいのだろうか、それとも、このまま天国に行きたいのか、自分に問いかけてみた。

私は生き返ってやりたいことはあるのか、生き返って喜んでくれる家族はいるのか。答えはノーかもしれないが、やはり生き返りたい。いい人生じゃなかったかもしれないが、生き返ったらやり直すことができるかもしれない。

私は祈り続けた。長い時間が経った気がする。そのまま何も変わらない。じっと止まっている。手に力を込め、目をぎゅっと閉じた。そして生き返らせて下さい、と神様に祈った。

まだ動かない。他の青い玉と明らかに違う。他の青い玉たちが三途の川の手前で止まっていた時間は数秒程度だったはずだ。私は一分くらいそのままだ。後からくる青い玉はドンドンと私を抜かして三途の川を渡っていく。ただもう一つ私と同じく止まったまま動かない青い玉があった。

たくさんの青い玉に抜かされた。このまま生き返られるのではないかと期待した。

しかし、期待した瞬間に、私の前に水色の道が三途の川の向こう岸まで一気に伸びていった。隣で止まっていたもう一つの青い玉も同じように三途の川の向こう岸まで水色の道が伸びていった。そして二つ揃って三途の川を競争するように同時に渡った。これで私の死が確定したのだ。

「沙知絵、柚菜、高山、清水、みんな、ありがとう。さようなら」

三途の川の上を渡りながら後ろを振り返り、手を振った。

三途の川を渡ってから五分程まっすぐに進んでいった。周りの景色がずっと同じで飽きてきた所で、私の前を走る水色の道が右にカーブしてから、滝を昇る龍のように勢いよく上昇して伸びていった。それに乗る青い玉もそのまま水色の道に沿って次から次へと右へとカーブして上昇していった。その先を見上げると、宙に『天国』という文字が浮かんでいる。あの先に天国があるのだ。私もこれから右にカーブして上昇し天国へと向かうのだ。

ところが、これまで水色の道の上をスムーズに滑っていたのが、急に悪路にでも入ったかのように左右に大きく揺れだしてスピードがガタンと落ちた。足元を見ると、氷の粒が溶けて滑らなくなってきた。私だけが今にも止まりそうな徐行運転になってしまった。

足元の氷は完全に溶けてしまい、真っ赤な液体が流れはじめている。足元がドンドン熱くなってきた。そして、水色の道が消えて私は真っ赤な液体とともに宙に放り出されまっ逆さまに落ちていった。

「ウワーッ」と声が出た。その声がこだまする。そして意識が遠のいていった。



## 天国と地獄

どれくらいの時間、意識を失っていたのだろうか、一分だったのか一日だったのか、それとも一年だったのか全く見当がつかない。

真っ赤な液体と共に落ちたこの場所は生暖かい湿った空気が流れていた。立ち上がり辺りを見渡すと赤錆色一色の景色だった。床から赤い水蒸気が立ち上がっている。広い空間で天井が高く学校の体育館を思わせた。床は水蒸気のせいで赤くモヤモヤとして足元がはっきり見えない。首をぐるりと回してみた。何もない、だだっ広い空間だ。サウナにいるような熱気と湿度だ。

「次、来たね」

「そのようですね」

背中から声がしたので振り向いた。だだっ広い部屋の真ん中に事務机が二つ並んでいる。それぞれの机に男が背筋を伸ばして座っていた。さっきの声の主はこの二人のようだ。

二人共私に向かってニコニコと笑みを浮かべている。向かって左側に座る男は丸い顔をして髪の毛が頼りなかった。額には深い皺が入っていて年齢は私より上で、六十代くらいだろうか。その男がすくっと立ち上がり「ようこそ」と言って慇懃に頭を下げた。

右側には色の白い細面の男が座っていた。銀縁の眼鏡をかけ、髪は櫛目がはっきりとわかるくらいの七三に分けていた。銀行員と言われれば信じてしまうだろう。眼鏡の奥に見える目は豆粒のように小さい。真面目で優しそうな中年の男だ。こっちは、私より若く四十代くらいだ。その男も遅れて立ち上がり頭だけをペコリと下げた。

人間の姿を見て、少し気持ちが楽になった。この男たちに助けをもとめようと、二人に近づいて行った。

「すみません、いったい、ここはどこでしょうか？」

丸い顔の男に訊いた。

「ここ、ですか？」

丸い顔の男は人差し指を赤い湯気が上がる地面に向けた。

「は、はい。ここ、です」

私も人差し指を地面に向けた。

「ここは地獄の入口でございます」

答えたのは、右側の細面の男だった。男は白い能面のような表情で言った。

「えっ、じ、地獄の入口？」

驚いて細面の男に顔を向けた。

「さようでございます。ここは地獄の入口でございます」



細面の男は言ってから、右の口角だけを上げ私を見てから、隣の丸い顔の男に視線を移した。丸い顔の男の方は俯いていた。

その後、細面の男が前に出てきて、私の頭のとっぺんから爪の先までを上下に何度も視線を這わせて見ていた。もしかしてこれが地獄行きの審判なのだろうかと思心度が悪くなってきた。

細面の男は長い時間、私を見てから口角を上げ、にこやかな表情に変わった。

もう一人の丸い顔の男は真顔で口を真一文字にしていた。少し申し訳なさそうな表情をしている。こっちの男の表情を見ていると嫌な予感がする。もしかして地獄に落とされるのか。

いや、私は生きている間に地獄に落とされるようなことをした覚えはない。地獄の審判というと閻魔様が審判するのだと想像していたが、前の二人の男を見る限り、どこにでもいそうな中年の普通の男にしか見えない。

「これって地獄行きの審判なんですか？」

思いきって訊いてみた。

「地獄行きの審判ってなんです？」

細面の男が耳に指を突っ込みながら言った。

「ここが地獄の入口だということは、ここで地獄行きと天国行きの審判がくだされるのかと思ひまして」

「ああ、そういうことね」

「そうです。そういうことです」

「地獄行きの審判はすでに終了していますよ」

「えっ、終了してるんですか？ いつの間にですか？」

「結果はこちらです。はい」

細面の男がそう言って机の上に置いてある紙をつまみ上げ、私の前でヒラヒラと揺らした。

私は少し前に出て、その紙に目を近づけた。そこには、『地獄行き確定』と書いてあった。

「えっ、……」

私は言葉を失った。

「この通り、あなたの地獄行き審判は、すでに終了し、確定しております」

細面の男はなぜか笑みを浮かべていた。気のせいかな、こっちをバカにしたような嫌な笑みだった。

「いつの間に決まってたんですか」

喉がカラカラになり、声が掠れていた。

「確定したのは、ついさきほどですね。あなたにとっては、残念な結果かもしれませんが、ご理解ください」

細面の男がそう言って慇懃に頭を下げた。

「じゃあ、私たちは座りましょうかね」

渋い表情のままの丸い顔の男が細面の男に言って、先に椅子に座った。続いて細面の男も「そうですね」と言って座った。

私は裁判所の被告人のように二人の前に立たされたままだった。

「これで、よしと」

細面の男が、座ったと同時にさっきの『地獄行き確定』と書いてあった紙に何やら書き込んでから呟いた。

何を書き込んだのか、私は気になり首を伸ばし、紙を覗きこんでみた。

細面の男が『地獄行き確定』と書いた下の空白部分に、『バレー』と書き込んでいた。

「バレー？」

私が不思議そうに呟くと、細面の男が私を見て言った。

「あー、これですか？　これ、わたしのサインなんですよ」

「サイン？」

「はい。申し遅れました。わたしは、この度、あなたの地獄行きのお手伝いをするバレーと言います。短い時間ですが、よろしく願いいたします」

バレーと名乗る細面の男が座ったままペコリと頭を下げた。

「わたしはサウスです。よろしく願いします」

丸い顔の男が緊張した面持ちで言った。

「一体あなた達は何者なんですか？」

この二人の名前がバレーでもサウスでも、そんなことはどうでもいい。それより二人が何者なのかが知りたい。そしてなぜ、私の地獄行きが確定なのかを訊きたかった。それは絶対に間違いなのだから。

「私たちですか？　まー、天使みたいなものですかね」

バレーが軽い口調で言った。

「て、天使ですか」

私のイメージする天使とは、見た目がかけ離れていたのも、余計にわけがわからなくなった。

「そう。天国からの使者ですね。わたしたちも元はあなたと同じ人間でしてね、死んでしまって、今は天国にいるんです。それで天国から使いとしてここに来ています」

「ここで何をしているんですか？」

「まずはあなたのような天国に行ってはいけない人間をふるいにかけています。そしてその後の地獄行きのサポートをしているんです。まっ、ボランティアですよ」

ふるいにかけるとはどういうことだ。

「お二人が私をふるいにかけて地獄に行かせるようにしたわけですか？」

「地獄に行かせるようにした。うーん、行かせるようにしたわけではないですが、まあ、簡単に言えばそういうことですかね」バレーが言った。

簡単に言えばそういうことってどういうことだ。意味がわからない。なぜ私がふるいにかけて天国に行けず地獄に落ちるのがわからない。それをはっきりさせてもらわないといけない。

「私は生きている間に地獄に落ちるようなことはしていません。何かの間違いです」

少し興奮していたのか、声が大きくなった。

「あまり興奮しないでください。すいませんが、ここは神聖な場所ですから静かにしてください」

バレーが人差し指を口の前に立てた。

「この状況だと興奮もしますよ」

「あなた汗が凄いですよ」

バレーの人を小馬鹿にするような口調に腹が立った。興奮すると言われても、この状況で平然とられる人間なんていない。

「なぜ、私がここに来なければいけなかったんですか？」

バレーがニヤニヤしながら口に人差し指を立てる。

「なぜなんですか？」バレーの態度を無視して声を張り上げた。テーブルを思い切り叩いてやりたい心境だ。

「えーと、それはですね、今からあなたは地獄へ行くわけですが、その前に地獄についての簡単な注意事項をここで聞いてもらわなければなりません。そのためにここにいるんです」

「いえ、そういうことじゃなくて、……」

そういうことじゃなくて、なぜ、私が地獄に落ちなければならないのかを訊きたかったが、バレーがそれを遮って話しはじめた。

「心配しなくて大丈夫ですよ。わたしたちが責任を持ってあなたを地獄へ送りますので、安心してください」

「いやいや、そういうことじゃないんです」

私は右手を激しく横に振った。声が枯れてきた。

「先輩、そろそろはじめていいですかね？」

バレーは私の話を完全に無視してサウスに向かって訊いた。

「そうですね、時間もありませんしそろそろお願いできますか」

「わかりました。では、さっそくはじめさせていただきますね」

バレーが椅子から立ち上がり、机の前に出て私の方へ向かってきた。

「いやいや、ちょっ、ちょっと待ってくださいよ」

私に向かってくるバレーに両手を前に出して制した。

「そんな嫌がらずに、すぐに終わります。ちょっとした地獄行きの準備だけですから」

「いやいや、その準備がいらないとやってるんです」

「いらないとと言われてもねー。ちゃんと準備しておかないと、地獄に行った時に困るのは、あなたですよ」

バレーがそう言いながら私の前まできた。

「私が地獄に落ちるはずがないんです」

「はいはい、わかりました。じゃあ、これね」

バレーが、また私の話を無視して机の横に置いてあった風呂場の脱衣場などで見かけるプラスチックのカゴとブリキのバケツを私の足元に置いた。

「これ、何ですか？」私は足元に視線を落とした。

「今着てる服を全部脱いでそのカゴに入れて下さい。あなたが地獄に行った後でその服は焼却しますのでね。そのバケツについては後で説明します」

「えっ、こ、ここで素っ裸になるんですか？」

私はバレーの顔を見ながら訊いた。

「そうです。今からあなたはあの穴から地獄に行ってもらいますのでね、もう服は必要ないですから」

バレーが左後方を指さした。指さす方向に視線を向けると、そこには床に大きな穴がぽっかりとあいていた。その穴は直径三メートル位あり穴の周りに岩が積んであって、露天風呂のようなものだった。その穴から赤い湯気が激しく立ち上っていた。穴からはお湯が沸騰するようにポコポコと音をたて赤い液体が溢れ床に流れ出していた。

「私があそこに入る？」その大きな穴を指さした。

「そうです。あそこが地獄の入口なんですよ。あそこに入ると、あなたの体は一気に穴の底へと沈んでいきます。あの穴は地獄に繋がってますので、あの穴に入るだけで、あなたはそのまま地獄に行くことができます。簡単です」

バレーが言い終わってから口角を上げた。

「地獄なんて嘘でしょ。冗談はやめてください」

私は訴えたが、バレーは聞く耳を持たず地獄行きの説明を進めた。

「これからあなたが行く地獄は、泥の世界です。あなたはこれから先、その泥の中で毎日生活することになります。そして、そこで生活する上で問題になるのは、その泥が毎日少しずつカサを増していくということです。そのまま放っておくと、泥はドンドンとカサを増してあなたの体は泥の中に沈んでしまいます。そうなってしまうとあなたは、泥に埋もれて身動きがとれなくなってしまいます。そうならないために、あなたはこれから毎日、カサを増す泥を掬い続けなければなりません。そのために必要なのが、このバケツです」

バレーがそう言って私の足元に置いてあるバケツを顎で差した。

「このバケツで泥を掬うんですか？」

「そうです。自分の体が泥に埋もれないようにしないといけませんからね。そのためにこのバケツが必要なんです。それと服を着ていると、泥が服にまとわりついて泥を掬う作業の邪魔になりますので、地獄に行く前にここで服を脱いでもらうのです」

「泥を掬ってからはどうなるんでしょうか」

私は泥を掬いきってしまうと地獄から脱出出来るのではないかと期待し、そう質問した。すると二人は顔を見合わせて首を傾げた。

「どうにもなりません」

バレーが抑揚のない声で言った。

「どうにもならない？」

「はい、泥は毎日ドンドン増えてきますから、掬っても掬ってもキリがないんです。延々と泥を掬う作業を毎日繰り返すだけのことです。だから、どうにもなりません」

「そんなことして何の意味があるんですか？」

「何の意味？ そりゃあ生きている間にやった悪事への罪滅ぼしですよ」

バレーがニヤリと笑った。

「ちょ、ちょっと待って下さい。生きている間の悪事への罪滅ぼしといっても、私はそんな悪事は働いておりません」

声は枯れているが、やはり大きくなった。

「お願いですから、静かにしてください」

サウスの目がつり上がった。

「私は地獄に落とされることなんてしていないんです。それなのに、地獄に落とされるなんて、おかしすぎます。声だって大きくなりますよ」

「ここに来る人は皆さん、そうおっしゃるんですよ。でも残念ですが、決まったことですし、諦めてください」

バレーは眉をハの字にして頭を下げた。

「私が生きている間の何がいけなかったのですか？ それを説明してもらわないと地獄に落ちることに納得がいきません」

「あまり時間がないんですけど仕方ないですね。オザワさん、今からあなたが生きていた時の悪事について説明します。興奮せず落ち着いて聞いてくださいね」

バレーがそう言ってから、椅子に座り直し机の上にある資料をパラパラとめくりはじめた。サウスは隣で顔をしかめていた。

「待っている間、コーヒーでも飲みますか？」

バレーが資料をめくる手を止め、顔を上げ、私に向かってニコニコと笑みを浮かべてきた。

「コーヒーなんて飲む気になれませんよ。それに私はオザワではなくてオオサワです」

私はバレーの呑気な対応にカリカリしてきた。

「じゃあ、私はコーヒーでも飲みましょうかね。先輩はいります？」

バレーがサウスに訊いた。サウスは左手を横に振って「いや、いい」と言った。

バレーは立ち上がり、後ろに置いてあるコーヒーサーバーからコーヒーをいれはじめた。

「お二人とも本当にいらないんですか？」

バレーがコーヒーをカップに注ぎながら言った。

「いません」

私は腹が立った。サウスはバレーを無視していた。

「じゃあ、悪いですがわたしだけいただきますね」

悪いと思うなら、この状況でコーヒーなんて飲むな。私はバレーを睨みつけた。

「早くしまししょうか」サウスも少し苛ついた様子だった。

「はいはい、では、説明しますね」

バレーは椅子の背もたれに体を預け、コーヒーを口にしながら、資料に目を通していった。コーヒーをズルズル啜る音が一段と私を苛つかせる。

バレーが資料から私に顔を向けた。そこでニヤリと笑った。

「それでは、あなたが地獄行きに決まった理由を申し上げますね」

ゴクリと唾を飲み込んでから「お願いします」と頭を下げた。

絶対に地獄に落ちるようなことはしていない。その自信はあるが、生きていた頃の小さな悪事が頭に浮かぶ。中学生の頃、いじめに加担したことがある。高校生の頃、友達が万引きするのを手伝ったことがある。そんな理由で地獄に落ちるはずはない。自分にそう言い聞かせる。不安な時間が続く。バレーの次の言葉を待った。

バレーは咳払いをして、またコーヒーを口にした。

なぜ、こんな時にコーヒーなんて飲んでいられるんだ。怒りをグッと堪え、顎をひい

た。一体何が地獄に落ちる理由なんだ。

「えー、まず、ですね」

バレーがそう言って、唇を舐めてからまた資料に視線を落とした。

「はい」少し前のめりになる。

「うーん、これで決まりですかね」

バレーがニヤリと嫌な笑みを向けた。

「決まりって、何ですか？」

何がこれで決まりなんだよ、早く言え。

「一番の理由は、やはり殺人、これですね。残念ですが、これだけで決まりです」

バレーが表情を消して言った。

「私が殺人？」

私の声が裏返ってしまった。

「はい、殺人です。やはり、人を殺しているなら地獄行きは仕方ないですね」

バレーがコーヒーカップを持ったまま、また嫌な笑みを浮かべた。

「ま、待ってください。殺人なんて、全く記憶にありません」

「殺人だけで充分地獄行きが決まりですが、あなたはそれ以外にも傷害事件も起こしますよね」

バレーは私の抗議に耳を貸すことなく、椅子の背もたれに体を預け、資料を見ながら淡々と話を続ける。

「本当に待ってください。殺人や傷害なんて、私には全く身に覚えがないことです」

「あれー、忘れちゃいましたかねー。たまーにいるんですよ、そういう人。自分に都合の悪いことは記憶にないとか言っちゃう人がね」

バレーがコーヒーカップを手にしたまま笑いながら言った。そしてまたコーヒーを口にした。

こいつを殺してやりたくなった。殺人を犯して忘れる奴なんて、いるわけないだろ。それにコーヒーなんて呑気に飲んでる場合じゃないだろ。バレーの持つコーヒーカップを叩き落としてやりたい。

「次が詰まってますから、さっさと進めましょう。早くそのセンスのない服を脱ぎましょうか」

バレーがコーヒーを飲み干してから腰を上げた。

「何かの間違いです」

私は涙声で訴えた。

「さあ、服を脱ぎましょう」

バレーが私に向かって来た。

「ま、待ってください。本当に殺人なんてしていません。絶対に間違いです。しっかり調べてください」

私は後ずさりしながら、近づいてくるバレーの肩を押した。そんなに力強く押したつもりはなかったが、バレーはその拍子に体制を崩し尻餅をついた。

「イタタタタ」

尻餅をついたバレーが腰をさすりながら顔をしかめて私を睨んできた。

「あなた、やっぱり凶暴ですね。ここで暴れたら、地獄行きよりもっと酷い目に合いますよ」

バレーが眼鏡の奥の小さな豆粒のような目をつり上げた。地獄行きより酷いことなんてあるのか訊いてみたくなかったが、そんなことは、この際どうでもいい。これは完全な冤罪だ。何とか地獄行きを阻止しなければならない。

「私は生きている間、殺人なんてした覚えはありません」

「まだ、認めないの。ハァ、困った人だねー」

立ち上がったバレーが腰をさすりながら、大きくため息を吐いた。

「認めないもなにも殺人なんてしていません。間違いです。信じて下さい」

「あなたが忘れたい気持ちはわかります。その時はあなたもまだ未成年でしたし、あなたに殺された男にも問題がありましたからね。同情の余地は十分あります。でもね、やっぱり殺人はダメなんです」

バレーが声を湿らせて言った。

「だから、知らないって言ってるじゃないですか」

私がそう言うと、バレーはじっと私の目を見つめた。唇を噛みしめ辛そうな表情を浮かべていた。

「本当に覚えてないんですか？」

「覚えてないんじゃないくて、やってないんです。いい加減にしてください。私が一体誰を殺したっていうんですか」

息が荒くなってきた。

「あなたのお父さんですよ」

バレーが唇を噛みしめて目を閉じた。

「あなたのお父さん？」

あなたのお父さんとは私の親父ということなのか。私は首を傾げるしかなかった。親父は私が小学生の頃に亡くなっている。しかし、それは病気で亡くなったはずだ。私は何度も病院へ見舞いに行ったし、亡くなる時も母親といっしょに父親の手を握りながら涙を流したから覚えている。

「あなたは、十五歳の時に実の父親を殺害していますよね」

バレーが神妙な声で資料に視線を落としたまま言った。

「知りません。全く記憶にありません。私の父親は私が小学生の時に病気で亡くなっています。私が十五歳の時に父親を殺害したなんて、全くのデタラメです」

「本当に忘れてしまったんですね」

バレーが顔を上げてため息を吐いた。

「忘れるも何も私は父親を殺していませんから」

「あのね、オザワさん。申し訳ないですけど、あなたがどんな言い訳をしても地獄行きは決まったことです。残念だけど、変わることはありません。諦めて早く先を進めましょう」

「これから閻魔様が出てきて、最後の審判をするんじゃないんですか？」

ここでダメでも閻魔様に話せばわかってもらえると思った。

「それは、昔のことです。今はコンピューターのおかげで、あなたがここ来るまでに判決

は出ちゃってるんですよ。閻魔様の判決が無くなって早くて便利になりました」

バレーが言った。

「それじゃあ、コンピューターに誤作動か何かがあって、この審判に間違いがあったんじゃないですか。コンピューターが間違っただけですよ。すぐに審判をやり直して下さい」

私は必死で訴えた。

「閻魔様が審判していた時代は、閻魔様の気分や体調次第で、いい加減な審判もありましたし、明らかに間違ってることもありましたが、今はコンピューターがやっているわけですから間違えることはないんです。なので、あなたが嘘をついているか、本当に記憶を失っているかのどちらかです。あなたにとっては辛い過去ですので、記憶を失っていてもやむを得ないのかもしれませんがね」

バレーが眉をハの字にして私を見つめた。

「絶対にやっていません」

「閻魔様の時代かー。懐かしいなあ。あの頃は閻魔様の機嫌をとるのが大変でした。閻魔様の機嫌が悪いと、誰でも彼でも地獄行きでしたからね。こうしてのんびりしてられませんでしたよ」

バレーがサウスに向かって笑みを浮かべた。

「今、のんびりしているのは、あなただけです」

サウスがバレーにキツイ視線を向けた。

「今日の先輩は機嫌が悪そうですね。なんかピリピリしてますよ。嫌なことでもありましたか？　奥さんと喧嘩したとか」

「嫌なことなんてありません。わたしはいつもと変わりません。あなたが呑気すぎるから、苛ついてるだけです」

そこはサウスの意見に賛成だ。人ひとりを地獄に落とすかどうかという時にのんびりコーヒーなんて飲みやがって、何が閻魔様の時代が懐かしいなあだ。

「コンピューターが間違えるわけないって言ってますが、現に間違えてるんです。私は父親を殺してなんていません。ちゃんと調べ直して下さい」

バレーはダメだ。サウスに必死で訴えた。悔しいからか、悲しいからかわからないが、ずっと涙が止まらなかった。

サウスは私の目をじっと見ていた。その目は少し潤んでいた。このサウスという男ならわかってくれるかもしれないと思った。

「オザワさん、今さら審判を覆すことは出来ません。早く服を脱いで準備して下さい」

バレーが冷たい口調で言った。なにがオザワさんだ。違うと言っただろ。

「さっきから、オザワさんと言ってますが、私はオザワではなくオオサワです」

腹が立ってつい強い口調になった。

「オオサワさんですか。それはそれは失礼いたしました。この資料の名前は訂正しておきますね。オザワカツキさんではなくて、オオサワカツキさんですね」

「下の名前はカツキではなくてカツオです。私はオオサワカツオです」

「オオサワカツオさん？　あれー、名字も名前もちょっとずつ間違えてましたね。じゃあちゃんと修正しておきます。それからあなたが亡くなった場所はワカヤマ県ですね」

「いえ、ワカヤマ県ではなくてオカヤマ県です」



間違いだらけにため息が出た。そこでふと思った。もしかすると私は今別人と間違えられているのではないか。名字も名前も死んだ場所も少しずつだが違っている。

「なんか少しずつ間違えちゃってますねー。不思議だねー」

バレーが笑いながら言った。

私は頭に血がのぼった。こいつを本気で殺したくなった。

「少しずつ間違えちゃってますねー、じゃないですよ。不思議だねー、じゃないですよ。これって、私の資料と他の誰か別の人の資料と間違ってるんじゃないですか」

体が熱くなっているのがわかった。

「もしかして、この人の言う通り資料を間違ってるんじゃないですか？」

サウスがバレーに言った。

「いやー、そんなはずないと思うんですけどねー」

バレーが首を傾げた。

サウスは眉間に皺を寄せバレーを睨み、睨まれたバレーは「あれー、おかしいな」と言って頭を掻いた。

なにがコンピューターだから間違わないだ。最初から資料が間違ってるんじゃないか。それだとコンピューターの審判以前の問題だ。

一体どこで間違えたんだ。オオサワカツオとオザワカツキ、オカヤマとワカヤマ。

きっと、和歌山県にオザワカツキという男がいたのだろう。その男が殺人を犯したのだ。そしてそいつが地獄に行く予定だったのだ。

ここへ向かう途中で上空で和歌山県の辺りから上がっていく青い光のことを思い出した。きっとあの光が殺人犯のオザワカツキという男の魂だ。

その後、サウスが資料を見ながら、バレーの耳元で何やらコソコソと話していた。何をコソコソと話をしているんだ。早く私を天国に行けるようにしてくれ。イライラして貧乏揺すりをしながら、二人を睨みつけた。

コソコソ話が終わるとサウスが席を立ち、奥に向かって歩きだした。

「ちょっと、どこに行くんですか。逃げないで、ちゃんと説明して下さい」

サウスの背中に向かって怒鳴った。

「逃げるわけじゃないんです。あなたがおっしゃった通り資料が入れ替わっていたようですので、この件について、今からあの人が我々の上司に報告に行くところです。この後、どうするか指示を仰ぎに行くんです。申し訳ないですが、もうしばらくお待ちいただけますか」

バレーが眉をハの字にして言った。

「そうですか。じゃあ、私は地獄に行かなくてすむんですね。天国に行けるんですね」

「それについては、まだわかりません。上司の指示次第ということになりますね」

バレーが申し訳なさそうな表情で言った。

「指示次第？ 馬鹿にしないで下さい。これは完全な冤罪ですよ。あなたたちは私を天国に行かせなきゃダメでしょ」

私はバレーの座る前まで行ってテーブルを叩いた。

「まあまあ、落ち着いて下さい。ゆっくり朗報を待ちましょうよ。それまでどうぞここに座っててください」

さっきまでサウスが座っていた椅子をバレーが私の前に置いたので、とりあえずその椅子に腰を下ろした。腰を下ろした途端に体中の力が抜けた。

まだ、どうなるのかわからない不安はあるが、人違いだとわかってもらえて、少し気持ちは落ち着いた。

「大変な目にありましたね」

バレーが他人事のように言うのでイラっとしたが、「ええ」とだけ返しておいた。

「お疲れでしょうから、コーヒーでもいかがですか？」

コーヒーもいいがタバコが吸いたい気分だ。

「そうですね、コーヒーもいいですが、タバコはないですか？」

「タバコですか、私は吸わないんですが、先輩は吸ってますので、あると思いますよ。ちょっと待って下さい。探してみます」

バレーがそう言って、テーブルの上に置いてある薄汚れた茶色の鞆を開けた。きっとサウスの鞆だろう。自称天使が他人の鞆を探るのはどうなんだと思った。

「ありましたよ、はい、どうぞ」

バレーが鞆から取り出したタバコを箱ごと私の前に差し出した。一本でよかったのと思った。

「そんな、一箱もいいですよ。一本でいいです。他人のタバコを箱ごと勝手に取ったらマズイですよ」

「大丈夫ですよ。この人、ヘビースモーカーでね、この鞆にたくさんタバコが入っているんです。だから一箱くらい無くなっても気づかれません。見てください、ほら」

バレーはそう言って鞆の口を大きく広げて私の方に向けた。鞆の中を覗いてみると、確かに鞆の中にはタバコが十箱以上は入っていた。

「本当ですね。鞆の中はほとんどタバコですね」

「そうでしょ。だから、一箱くらい無くなっても、この人は絶対気付きませんよ。この人はヘビースモーカーでね、きっと今もどこかで一服してると思いますよ」

「えっ。私のことを上司に報告に行ってくれたんじゃないんですか。タバコなんて吸ってる場合じゃないでしょ」

「その前に一服でしょ。上司への報告はその後、ちゃんとしてくれると思いますよ」

「そうですか。それならいいんですがね」

そうは言ったものの納得できない気分だ。バレーも信用できないが、サウスも信用できそうにない。

「ミスを上司に報告に行くわけですからね、あの人も緊張するんだと思いますよ。多分違うとは思いますが、もし私たちのミスだったら、えらい怒られますからね」

あんたらは怒られるだけだろうが、私は地獄に落とされる場所だったんだぞ、と怒りがわいてきた。このタバコ一箱くらいもらう権利は充分にある。そう思ってタバコの封を開け一本抜き取った。

「ライターと灰皿ってありますか？」

タバコを口に咥えたまま訊いた。

「ライターは鞆の中にはありませんでしたね。灰皿もここにはありません。一応ここは禁煙なんでね」

「えっ、ここは禁煙なんですか。じゃあ、吸えないじゃないですか」  
「別にいいですよ。あの人もここでよく吸っていますから。ライターがないなら、あそこについて赤い湯気にタバコの先を近づけるとすぐに火がつきます。それからあの地獄行きの穴を灰皿代わりに使ってくればいいですよ」

バレーは地獄に繋がっているという大きな穴を指差して言った。

「あそこで吸うんですか？」

私は大きな穴を指差した。

「ええ、そうです。落ちないように注意して下さいね。落ちちゃうと、そのまま地獄に行ってしまうからね」

「わ、わかりました」

私は立ち上がり穴の方に向かった。

穴の前に立ち恐る恐る覗きこんだ。ポコポコと泡のたつ音が不気味に響く。熱気がすぐて額から汗がダラダラと吹き出てきた。

「危ないですから、顔は近づけないで、腕だけを伸ばしてタバコの先を湯気に近づけてくださいね。それで充分火がつきますから」

バレーが叫ぶように言った。

タバコを吸う環境ではないと思ったが、とりあえず啜っていたタバコを右手に持ちかえて、右手を伸ばし立ち上がる赤い湯気にタバコの先を近づけた。するとすぐに「ポッ」という音がして、タバコの先に火がついた。

「火がつきましたね。そうしたら、すぐに穴から少し離れて吸ってください。吸い殻は、そのまま穴に捨ててくれればいいですから」

「そんなことしていいんですか。穴の中には地獄に落ちた人がいるんですよ」

「いますけど、地獄に落ちるような人ですから気にすることはありません。それに泥の中に吸い殻が混じるだけのことでですから問題ありません」

「そ、そうですか。じゃあ、そうさせてもらいます」

少し気は引けたが、言われた通りにすることにした。私は思いっきり肺の奥まで煙を吸いこんだ。肺に煙が入り少し気持ちが落ち着いた。久々のタバコに頭がクラクラした。

「コーヒー、ここに置いておきますよ」

バレーがコーヒーカップを机の上に置いてくれた。

「ありがとうございます」

礼を言ってから、タバコを吸い続けた。赤い湯気に混じり紫煙が立ち上っていく。

沙知絵と柚菜の顔が頭に浮かんだ。沙知絵と柚菜は今頃、どんな気持ちでいるのだろうか。私が死ぬ瞬間の病室での二人の表情を思い出した。さほど悲しんでいるようには見えなかった。どちらかと言えばほっとしたような表情に見えた。二人とも私が死んで良かったと思っているのだろう。

この先、私はどうなるのか、まだ不安はあるが、殺人の容疑が晴れて少しだけ光明がさしたことは確かだ。きっと、この後、天国に行けるだろう。

タバコを吸い終わってサウスが帰ってくるのを待つ間、椅子に座りバレーがいれてくれたコーヒーを口にした。意外と本格的で豆の香りがする美味しいコーヒーだった。気持ちが落ち着いて、フーと息を吐いた。目を閉じると眠気が襲ってきた。少しぬるく

なった最後の一口のコーヒーを飲み干して、眠気を吹き飛ばした。

奥の扉が開く音がした。見るとサウスが入ってきた。少し足取りが重そうだった。近づいてきたサウスの顔を見ると、眉間に皺を寄せ唇を尖らせていた。サウスの浮かない表情に嫌な予感がした。

「すみません。待っている間、椅子を借りていました」

私は椅子から立ち上がり、元の場所に戻した。

「ああ」

サウスは、気のない短い返事をして、椅子に腰を下ろした。

「どうでした？」

バレーがサウスに訊いた。

「やっぱり、人違いだった。同時刻に、この方と同じようにトラックに跳ねられて亡くなった男がいた。年齢はこの方と同じ五十歳。名前が小沢勝己、和歌山県に住んでいる男で、その男のデータとこの方のデータがどこかで入れ替わってしまっていたようだ」

「どこで入れ替わったんでしょうか？」

バレーがサウスに訊いた。

「最初の仕分けの時か三途の川を渡る前のどちらかだな」

サウスが顔をしかめたまま言った。

「そうですか。それなら、わたしのミスではありませんから良かったです。最初の仕分けの時と三途の川を渡る前のチェックの時のどちらもわたしは携わっていませんから。最初の仕分けは仕分け担当がやっていましたし、三途の川を渡る前のチェックの時は、先輩が一人でやるからと言って、わたしはやってないですからね。今回の三途の川を渡る前のチェックは、先輩が全てやっていますよね。だから仕分け担当か先輩のどちらかのミスです。わたしの落度は全くありません」

何が、良かったです、だ。こっちの身になってみる。凶悪犯と間違えられて、地獄に落とされそうになったんだぞ。私が何も言わなければ、無実の人間をそのまま地獄に落としてしまっていたんだぞ。少しは反省しろよと思った。

「確かに仕分け担当のミスか私のミスのどちらかだ。しかし、間違いがあったことは君も反省しなければいけない」

サウスはそう言って口元を歪めた。

「まあ、そうですけど。何度も言わせてもらいますけど、今回、三途の川を渡る前のデータを取ったのは私じゃなくて先輩ですからね。先輩が一人でやると言ったんですよ。そのことはちゃんと上に報告してくださいね」

バレーはそう言って唇を尖らせた。

「わかった。そう報告しておく」

「これで、私は天国に行けるわけですか」

この男たちの責任問題なんてどうでもいい。早く私を天国へ連れて行ってくれ。

「まあ、そこなんですけど、実は、困ったことになっています」

「困ったこと？」

私はサウスの表情を見て不安な気持ちが膨らんでいった。

「そうなんです。実はですね、地獄に落ちるはずだった小沢勝己という男は、すでに天国

に行ってしまったみたいなんです」

「えっ！ それまずいでしょ」

バレーがキンキンとうるさい。

「確かにまずいな」

サウスは口元を歪める。

「凶悪犯が天国に行ってしまったなんて、天国の治安が心配ですし、絶対天国からすごいクレームがきますよ。天国の担当者は、ガミガミと口うるさいババアですからね」

「今、そのことで、上は頭を悩ませている」

そんなことより、私はどうなるんだ。私を早く天国に行けるようにしてくれ。

「この方はどうなるんですか？ 今から天国に行かせるんですか？」

バレーがやっと私のことを訊いた。

「うーん、それが問題だ」

サウスが一段と渋い表情をした。

「どうしたんですか？」

私は一気に不安になった。

「あなたを天国に行かせるためには、天国に今回のミスを報告しなければならないのですが、そのことで困っているんです」

サウスは腕を組んで天を見上げた。

「なるほど、天国の担当者は、まだこのことを知らないわけですね。それはそれで厄介だ」

バレーは目を大きく見開いた。厄介だと言いながら嬉しそうに見えた。私はバレーを睨みつけ拳を握りしめた。

「今のところ天国の担当者は今回のミスに気づいていない。だから天国には報告せずこのままにしろというのが上からの指示なんだ」

サウスがバレーに向かって小声で言った。

「てことは、この方は、その凶悪犯の代わりに地獄に行ってもらおうということですか？

それでなにもなかったことにするわけですか。それはこの方が可哀想過ぎますね」

バレーがサウスに訊いてから、私に視線を向けた。私を哀れむような目だった。

「まあ、上の判断はそういうことだ。天国の担当者には今回のミスを知られたくないみたいだからな」

いやいや、ちょっと待ってくれよ。生きている間に理不尽なことがたくさんあったが、それ以上に、今回のこれは理不尽過ぎるだろ。理不尽を通り越して、もうめちゃくちゃだ。

死んでまで何故こんな理不尽な思いをしなければならないのだ。生きている間の理不尽さは諦めて我慢してきたが、こればかりは諦めるわけにはいかない。私は絶対に地獄には行かない。地獄で泥を掬い続けるなんてまっぴらごめんだ。それも赤の他人の身代わりになってなんて許されない。

「じゃあ、どうします？」

バレーがサウスに小声で訊いた。

「うーん」

サウスは腕を組んで唸るだけだった。

「今の私たちの話、あなた聞こえてましたよね？」

バレーが今度は私の顔を覗きこむようにして訊いてきた。

「ええ、もちろん聞こえてますよ。私は絶対に地獄に行かないですからね。すぐにその小沢という男と入れ替えてください。天国に連絡してその小沢勝己という男を地獄に落として下さい。そして私を天国に行かせて下さい」

私は唾を飛ばして訴えた。勝手に声も大きくなる。さすがにバレーも声大きいとは注意しない。注意されたら、もっと大声を出してやる。天国に聞こえるくらい的大声で訴えてやる。

「地獄も行ってみると意外といいところですよ。一度行ってみてはいかがでしょう？」

バレーが笑みを浮かべて言った。

こいつ、いい加減にしろよ。温厚な私でもさすがに腹わたが煮えくり返った。

「絶対にダメです。すぐに小沢勝己という男と入れ替えてください。でないと訴えますよ」

私は立ち上がり無意識にバレーの胸ぐらを掴んでいた。

「訴えるって、どこに訴えるの？ そんな訴えるところなんて、ここにはないよ」

バレーが逆ギレして胸ぐらを握る私の手を叩いた。

「地獄に落ちてからでも、今回のあなたたちのミスを訴えます。あなた方が間違っていたのに、自分たちのミスを隠蔽するために私を地獄に落としたことを大声で訴えます」

「だ、か、ら、地獄ではどんなに大声で訴えても無駄ですよ。一人孤独に泥を掬い続けるだけなんですから、誰かに会うこともないですから話す相手はいません。残念でしたね」

バレーが馬鹿にするように眉をハの字にして言った。

それなら絶対に地獄に落ちるわけにはいかない。こいつらは今回のミスを闇に葬ろうとしている。絶対にここで、食い止めなければならない。

「なんとかしてくださいよ。ミスしたことを天国に報告しにくい気持ちは何となくわかります。けど、あなた方はそのせいで地獄に落ちる私のことを考えたことありますか？

無実の人間を地獄に落としてしまう罪の意識とかないんですか」

サウスは少し俯いて目を閉じて口元を歪めていた。バレーは両手を後頭部に当て宙に視線をやった。沈黙の時間が続いた。しばらく地獄の穴からポコポコという音だけが響いていた。

サウスが顔を上げた。フーと息を吐いた。

「オオサワさんでしたかね」

サウスの低い声が響いた。

「はい、そうです」

「この度はご迷惑をおかけしました」

サウスが立ち上がり深々と頭を下げた。

「なんとかなりそうですか？」

「今、いろいろと良い方法がないかと思案してみました」

「はい」

「天国に今回のミスを報告せずに、あなたが地獄に落ちなくて済む方法が一つだけあります」

サウスが短くて太い人差し指を一本立てた。

「ほ、本当ですか。そ、それはどんな方法ですか」

私はサウスの前まで行って、サウスの両肩を揺らした。

「まあまあ、落ち着いて下さい」

「こんな状況で落ち着けるわけないですよ」

私の息は荒くなっていた。

「そりゃ、そうだよ」

バレーが後頭部に両手を当てたままこっちを見て笑みを浮かべながら言った。バレーの言動の一つ一つが癪に障った。

「で、どんな方法なんですか？」

バレーは無視しておこう。今はサウスの提案する内容が大事だ。

「今から説明します」

サウスが背筋を伸ばして椅子に座り直した。

「は、はい」

「この方に椅子出してあげて」

サウスがバレーに向かって言った。

「椅子ですか？」

バレーがそう言ってキョロキョロと辺りを見渡した。

「あなたのその椅子を貸してあげなさい」

サウスがバレーの座る椅子に顎を向けた。

「ああ、こ、これをね」

「そう、この方、無実なんだから、いつまでも立たせておくわけにいかないでしょ」

「じゃあ、私が立ってるわけですか？」

「そう。しばらくだから、それくらいいいでしょ」

そんなことより、早く説明してくれよと思った。バレーもさっさと椅子をこっちに渡せよ。

「はいはい、わかりましたよ」

バレーが不承不承といった感じで自分の椅子を私の横に持ってきた。

「どうぞ、おかけください」

バレーが椅子の座面をポンポンと叩いた。

「では、失礼します」

私は椅子に腰を下ろした。別に立ったままでもよかった。それより早くサウスの提案が聞きたい。私が地獄に落ちずにすむ方法を。

「では、説明します」

サウスがテーブルに両肘を置いてから唇を噛みしめた。

「お願いします」

私は背筋を伸ばし、サウスの丸い皺まみれの顔をじっと見た。

「まず、今回の件は我々だけの秘密にしておいて下さい」

「わ、わかりました。けど、内容にもよります」

「そうですね。では、説明します」

「はい、お願いします」

「まずですね、天国に今回のミスをお知らせしないと、本来地獄に落ちる予定だった小沢勝己を天国から連れ戻し地獄に落とすことは出来ません」

凶悪犯をそのまま見逃すつもりなのかと腹が立ったが、それよりも自分のことがどうなるかが大事だ。

「アララ、小沢勝己という男はラッキーですね」

バレーが立ったままコーヒーを飲みながら言った。

「仕方ないだろ」

サウスがバレーの顔を睨みつけた。

「そ、そうですね。こうなってしまうと、わたしたちにはどうすることも出来ないですからね」

バレーにいちいち口を挟むなど忠告したい気分だ。早く私がこの後どうなるのか教えてくれ。

「あなた、少し席をはずしてもらえるかな」

サウスがバレーに言った。

「そうだ、こいつは邪魔だ。出て行ってもらうべきだ。」

「わたし？」

バレーが自分の顔に人差し指を向けた。

「そう、休憩してきていいから、少し出ていってくれるかな」

「あ、そうですか。じゃあ、遠慮なく休憩してきますね」

バレーは踵を返し出口へと向かった。

「十分したら戻ってきて下さい。次がありますからね」

サウスがバレーの背中に向かって言った。

「たったの十分ですか？」

バレーが振り返って言った。

「じゃあ、二十分」

サウスが人差し指と中指を二本立てて吐き捨てるように言った。

「わかりました。それでは失礼しまーす。あなた頑張るね」

バレーが私にピースサインを向けて、奥の扉へと向かって行った。

サウスはバレーが扉の向こうに消えるのを確認してから、私に向き直った。

「それでは、説明いたします」

サウスが椅子に座り直し姿勢を正した。

「は、はい」

「まず」

サウスはそう言って、立ち上がり口元を引き締め私の目をじっと見た。そして続けた。

「あなたにお詫びします。私どものミスでご迷惑をおかけし、本当に申し訳ございませんでした」

サウスは深々と頭を下げた。

この人は、バレーと違い、まだまともなんだな、と思った。

「あ、はい。頭を上げて下さい。謝ってもらうより、この先、私がどうなるのかが早く知りたいです」



「そうですね。それがですね」

サウスは立ったまま頭を掻いて少し言いにくそうにしていた。

「とりあえず、座って下さいよ。あなたが立っていると私も落ち着きません」

「そうですか、なら、遠慮なく座らせていただきます」

そう言ってサウスは椅子に腰かけた。その後、フーと太い息を吐いた。その様子を見て嫌な予感しかしない。

「小沢勝己という男が天国に行ってしまったので、彼を天国から引き戻しあなたを天国に行かせるのは至難の技です。その件については本当に申し訳ないです」

サウスは唇を噛みしめた。

至難の技ではなく、天国にミスを報告したくないだけだろうと、また怒りがこみ上げてきた。

「私は天国に行けないんですか？」

「そういうことになります」

「これから、私はどうなるのでしょうか」

「このまま地獄に落ちてもらえば、済む話なんですけど、……」

おいおい、済む話じゃないだろ。私は生きている間に地獄に落ちるような悪事はしていないんだぞ。結局、話が元に戻っているじゃないか。

「それはおかしいでしょ。なんで私が地獄に落ちなきゃいけないんですか」

私は立ち上がってサウスの胸ぐらを掴んだ。こいつもバレーと同じじゃないかと思った。

「ま、待って下さい。落ち着いてください。わかっています。あなたを地獄に落とすことは絶対にいたしません。あなたを地獄に落とすことは、私にとっても辛すぎます」

「じゃあ、どうするおつもりですか？」

サウスの胸ぐらを掴む手を少し緩めた。

「あなたには生き返ってもらおうかと思っています」

「生き返る？」

「そうです」

「私が？」

自分に人差し指を向けた。

「はい」

「そんなこと出来るんですか？」

「ええ、あなたは三途の川を渡ってしまいましたが、まだ天国にも地獄にも行っていません。このまま戻ることは不可能ではありません。生き返ってもう一度人間として、大沢勝男として、人生を続けてみませんか？」

「それがあなたの提案ですか？」

「私の出来ることはそれくらいなんです」

「生き返る、ですか？」

サウスの顔をじっと見た。

「ええ、生き返る、です。あなたにとって悪い話ではないと思います。生きている間に、まだやり残したこともあるでしょうし、家族もあなたが死んでしまい悲しんでいます。

生き返れば、また残りの人生を謳歌できますし、家族も喜んでくれるはずですよ」

私が生き返って沙知絵と柚菜が喜ぶのかは疑問だが、もっと人生を楽しみたいのは確かだ。地獄に落ちるよりは遥かに魅力的な提案だ。

「わ、わかりました。でも、死んでしまった人間が生き返るとなると、いろいろ大変なことになるんじゃないでしょうか。もう、私のお通夜とか告別式とか終わってるかもしれません。もしかしたら、私の体はすでに焼かれているのではないんですか」

「その心配はありません。今のここでの時間は、現世では止まった状態になっています。ですから、今あなたが生き返れば、あなたは病院で息を引き取る寸前のところに戻ることになります。ですから、息を引き取る寸前で生き返ったとお医者様もご家族の方もきっと手を叩いて喜んでくれるはずですよ。ご家族の方はお医者様に感謝し、お医者様は死にかけていた患者の命を救ったと充実感いっぱいになることでしょう」

サウスがおだやかな笑みを浮かべて話した。

息を引き取る寸前の病室の風景が頭に浮かんだ。イケメンの医者、ベテランの看護師、そして沙知絵と柚菜。死ぬ間際の私が目を覚ましたら、四人の表情はどう変わるのだろうか。

なるほど、この提案なら受け入れてもいい。沙知絵と柚菜がどう思うかは気になるが、それは、今、気にしても仕方がない。

「では、生き返るといふことでお願いできますか」

「わかりました。それでは、これからあなたが生き返るための手続きを進めさせていただきます。もう少しだけ時間を下さい」

サウスはそう言って踵を返し、後ろの扉へと歩きだした。ちょうどその時、扉が開いてバレーが戻ってきた。

「あっ、終わりましたか？」

バレーがサウスに向かって言った。

「あなた、戻ってきましたか。ちょうどよかった」

「どうしました？」

「この方を生き返らせることで決まりました」

サウスが私の方に視線を向けた。

「そうですか。生き返るわけですか」

バレーもこっちに視線を向けた。

「そうです。今からその手続きをお願いできますか」

「手続きですか？ いいですけど、わたしは何をすればいいんですかね」

「簡単なことですよ。今から資料室に行って、この方の、大沢勝男さんの資料を取りに行って来てください。そして、代わりに、この小沢勝己の資料を資料室に置いてきてください。それが終わったら、大沢勝男さんの資料を持って、蘇生の受付窓口へ提出してください。蘇生窓口が、大沢勝男さんの資料を受け取り『承認』のスタンプを押したその瞬間に、この方、大沢勝男さんは生き返ります」

「それなら、簡単そうですね。じゃあ、わたし、今からいきますね」

「お願いします。寄り道せずに、すぐに資料室に行って蘇生の受付窓口に向かって下さいよ。資料を無くしたら大変なことになりますからね。それから資料は絶対に間違わない

ようにして下さい」

「わかってますよ。子供の使いじゃあるまいし」

バレエが唇を尖らせた。

バレエが跳ねるようにして奥の扉に向かった。出ていく前に、私の方に振り返り、「よかったですね。ごきげんよう」と右手を上げて笑った。

「ありがとうございました。資料の方よろしくお願いします」

とりあえず、そう言ってバレエを見送った。

「ご迷惑をおかけしました」

サウスがゆっくりとした口調で言った。

「はい、でも、まあ、生き返られるなら、天国へ行くより良かったです」

「今から、彼が蘇生受付にあなたの資料を提出します。受付が『承認』のスタンプを押した瞬間にあなたは生き返ることになります。あの人が寄り道しなければ時間にして、ほんの五分ほどです」

「えっ、そ、そんなすぐに生き返ることができるんですか」

「はい。こういうことは早めに終わらせた方がいいですから」

『早めに終わらせた方がいい』という言葉聞いて、ミスを早く消したいということだろうと、憤りを感じたが、抗議する気にはなれなかった。

そんなことより生き返った時の気持ちの準備をしておかなければならない。これから、私はあの病室に戻るのだ。沙知絵と柚菜がいたあの病室に。

死ぬ間際に見た病室を思い返してみた。イケメンの医者とベテランの看護師、そして沙知絵と柚菜の様子が頭に浮かんだ。私はもう助からないと諦めているような空気が病室には流れていた。私が生き返ったら、みんなどんな表情を浮かべるのだろう。きっと驚くだろう。サウスが言ったように、喜ぶのだろうか、それとも……。いや、やはり今は考えないことにしよう。

「遅いですね」

サウスがそう言って唇を尖らせた。

「そ、そうですね」

今の私には時間の感覚がなかったので、遅いのか早いのかわからなかった。

「あいつ、寄り道してるんじゃないか」

サウスが眉間に皺を寄せて私の顔を見た。

「はあ、そうなんですかね」

「あいつ、また、タバコでも吸ってやがるな」

サウスがひとり言のように呟いた。

「あの人、タバコは吸わないと言ってましたけど」

私は首を傾げながら言った。

「あいつ、そんなこと言ってましたか？」

サウスが口元を歪めた。

「はい、タバコは吸わないと言ってましたけど」

「嘘ばかりつきやがって。あいつは少し時間が空くと、コーヒーを飲んだり、タバコを吸いに行ったりとサボってばかりです。もう困ったもんですよ」

「すごく真面目そうに見えましたが」

「そう。最初はみんなあいつの見た目に騙されるんですよ。パッと見は頭が良くて真面目そうに見えますからね。わたしも最初は騙されましたよ」

バレーがタバコを吸わないと言ったのは嘘だったのか。細面の真面目そうな顔を思い出して閻魔様に舌を抜かれろよと思った。

「ああ、やっと始まりましたね」

サウスが私の方を見て言った。

「はあ？」

意味がわからなかった。サウスの視線が私の足元に向けられているので、私も自分の足元に視線を向けた。すると、私の脛あたりまでが青くなっていた。ビックリして足を上げた。見ると青くなった足が徐々に色を失い消えていった。そしてドンドン上の方まできて、脛の辺りまでが完全に消えた。青色はだんだんと上昇し腰の辺りまできて、そして消えていく。青色は胸の辺りまできた。

「それでは、あなたのこれから先の人生が素晴らしいものになりますことをお祈りいたします」

サウスが立ち上がり両手を合わせ頭を下げた。

私の体は胸から上だけになっていた。サウスの姿が霞のように薄くなり、そして消えた。視界が真っ白になり、そして体がフワフワと浮いたような感覚がした。

## 幸と不幸

目を覚ますと頭が二日酔いのようにズキズキする。

さっきのは夢だったのか、それとも現実なのか。目を閉じたままズキズキする頭の中を整理する。夢でなかったなら、私は死後の世界に一度足を踏み入れたことになる。

自称天使という男たちのミスにより私は地獄に落とされそうになった。寸前のところでミスだとわかり、地獄に落ちることは免れた。しかし、地獄に落ちるはずだった男が天国に行ってしまったため、私は天国に行くことが出来なかった。そこで天使たちは私を生き返らせることを提案した。天使たちは自分たちのミスをなかったことにするための苦肉の策で、怒りを覚えたが、自分が生き返ることは魅力的な提案だったので受け入れることにした。

夢を見ていた気もするが、夢とは思えないほど記憶にはっきりと残っている。地獄に落とされそうになった時は、何がどうなっているのか、わけがわからず、頭がおかしくなりそうだったので、正直、今はホッとしている。今のこの体の痛みさえ、生きていることが実感できて有り難く思う。

布団の中から手だけを出してみた。手にひんやりした空気が触れた。今度はその手を頬にもっていき頬を擦った。頬の肉がげっそり落ちたなと思った。

「せ、せ、先生、先生、ちょ、ちょっと見てください」

女性の声をした。興奮しているようだが、高く澄んだ心地よい声だった。

「う、うん、なんだ」

今度ははしゃがれた男の声をした。

「い、いま、患者さんが動きましたよ。布団から手を出して自分の頬を触ってました。意識が戻ったんじゃないでしょうか」

また女性の澄んだ声だ。あのベテランの看護師だろうか。気のせいか、死ぬ前に聞いた時より声が若々しくハリがある。そしてすごく興奮しているようだ。もう死んだと諦めていた患者の腕が動いたのだから、興奮する気持ちはわからなくはない。

私は意識が戻ったことを医者にアピールするため、しばらく頬のあたりを手のひらで擦っていた。

「お、お、おお、ほ、本当だ。手で顔を擦ると。こ、これは信じられんことだ。この患者はもう助からんと思っとたのに」

男性の声が聞こえた。イケメンの医者の声だろうか。これも死ぬ前に聞いた声とは違い、しゃがれた声になっていた。話し方もあのイケメンの医者にしては年寄り臭い。

医者も看護師も、私が死ぬ前に聞いた時の声と違って聞こえるのは、二人とも私が生き返ったことに興奮しているせいだろうか。それとも私の耳がおかしくなっているのだろうか。

少し息苦しかったので、大きく息を吸った。消毒の臭いが鼻をついた。何度も深く呼吸をして、ゆっくりと目を開けた。天井が見えた。少し黄ばんでいた。死ぬ前に見た天井は真っ白だったように思ったが記憶違いだろうか。それとも病室が変わったのだろうか。

「せ、せ、先生、今、か、患者さんの目が開きました」

また澄んだ女性の声が聞こえた。声が上ずり、興奮度はさっきより増しているようだ。

「あ、あー、ほ、本当だ」

しゃがれた声が裏返った。

私はしゃがれた声の方へゆっくりと視線を動かしてみた。白髪頭の黒縁眼鏡をかけた白衣姿の男が目の前にいた。

「気がつきましたか？」

その白衣姿の男が、分厚い唇を動かして言った。しゃがれた声の正体はこの男のようだ。

「先生、良かったですね」

女性の澄んだ声がまた聞こえた。

澄んだ声の方に視線を向けると若くて愛らしい白衣姿の女性が目を大きく開いて私の方を見ていた。潤んだ瞳のなかの黒目が大きくて吸い込まれそうだった。

おかしい。死ぬ前と生き返った今と、なぜか医者も看護師も変わっている。私があの世界に行っている間に、病室が変わり、医者も看護師も変わったのだろうか。重体の患者なのに、そんな急に変わるものなのかと不思議に思った。

それとも、私はもう助からないと判断して、前のイケメンの医者とベテランの看護師は、助かる可能性の低い私の治療を諦めて他の患者の所に行ってしまったのか。

いや、それもおかしい。やはり変だ。サウスという男は、私があの世界に行っている間、現世では時間が止まっていると言っていたはずだ。そうなるなら医者も看護師が入れ替わる時間があるはずがない。

サウスが適当なことを言った可能性もあるが、やはりおかしい。後ろにいた沙知絵と柚菜はどこにいったのか。二人の姿を探そうと首を持ち上げ体を起こそうとした途端、首と背中に落雷のような激痛が走った。

「イター」と声が出た。出した声が自分の声ではない気がした。低くて渋い野太い声だった。

「ダメですよ。無理しないでください」

若い看護師が、起き上がろうとする私を押さえつけるように私の肩に手を当てた。

「起こしてもらえませんか」

痛みを堪えながら看護師にお願いした。

「ダメです。まだ安静にしておいて下さいね」

若い看護師が整った眉をハの字にして言ってから笑みをくれた。

「あっ、はい。わかりました」

可愛い看護師にどぎまぎし、布団を鼻までかけて、看護師の顔を覗きこんだ。彼女を見て下半身が勝手に反応した。下半身に手をやると自分のものとは思えないくらいに大きいものが手の感触に残った。

何かおかしい。そう思いながら、おとなしくベッドに横になったまま、ゆっくりと深

い呼吸をし心を落ち着かせた。

「意識が戻って良かったですね」

可愛い看護師が布団の上から私の胸に手を置いて笑みを浮かべた。

「は、はい」

私はまた下半身を手で押さえた。やはり感触が以前とは違う。

「このまま回復に向かいそうですが、ただ、全身を強く打っていますのでね、一度、精密検査をしましょうかね。特に頭を強く打っていますからね」

しゃがれた声の医者が出た。

「わ、わかりました」

私は医者の顔を見て返事をした。

「この患者さんの容態は少し落ち着いたようだから、わしは他の患者のところに行ってくる。なにかあったらすぐに呼んでくれるかな」

白髪の医者がそう言って病室を出ていこうとした。

「はい、先生」

看護師が病室を出ていく医者の背中に向かって言った。看護師は病室を出ていく医者をドアまで見送ってから、こちらに体を向けた。後ろ手に手を組みゆっくりと歩いて私が横たわるベッドの前まで来て私を見下ろした。

「気分はどうですか。大丈夫ですか？」

看護師の黒い瞳が私を見つめている。その瞳を覗くと、彼女の瞳の奥に見知らぬ男の顔が映っていた。

「あ、はい。大丈夫です」

「それはよかったです」

「ところで、私の妻と娘はどこにいきましたか？」

沙知絵と柚菜の姿が見えないことが気になって訊いてみた。

「あなたの奥さんと娘さん、ですか？」

看護師がその問いに対して、首を傾げ私の顔を覗きこんだ。

「そうです。さっきまで、そこにいたと思うのですが」

私はそう言って、沙知絵と柚菜が立っていた辺りを指さした。

「やっぱり、頭を強く打ったからですかね」

看護師が眉をハの字にした。

「オザワさん、今はなにも考えずにおとなしく寝ていきましょうね。怪我を治すことに専念しましょうか」

「オザワさん？」どこかで聞いた名前だ。

私は痛みを堪えて起き上がり、後ろを向いた。沙知絵と柚菜が立っていた場所だ。

しかし、そこには、沙知絵と柚菜の姿はなかった。病室の雰囲気も間違いなく変わっている。そして、この看護師は、私のことを今『オオサワさん』ではなく『オザワさん』と呼んだ。

無理して起き上がったので、首と背中に激痛が走った。

「イタタタ」私はそのままベッドにうつぶせた。

「だから、無理しちゃダメっていつてるでしょ。もう」

看護師が少し声を荒げて、うつぶせた私の体に手を当てた。

一体、どういうことだ。私は確かにサウスの言う通りに生き返っている。しかし、変だ。今の自分は自分ではない気がする。私が息を引き取った瞬間の景色と今見ている景色は明らかに違う。真っ白な天井だったはずなのに、今見えている天井は黄ばんでいる。医者も若くてイケメンだったはずなのに、さっきまでいた医者は私より歳上に見える。ベテランの看護師だったはずが若くて愛らしい看護師に変わっている。そして沙知絵と柚菜がいたはずなのに、その姿が今はない。

さっきこの看護師は私のことを『オザワさん』と呼んだ。

おでこに手を当ててみた。包帯が巻かれているようだ。それは息を引き取った時と同じだ。頭を触ってみた。髪の毛がフサフサとしている。私の髪の毛は手が地肌に触れてしまうくらい薄かったはずだ。

鼻をつまんでみた。脂ぎった団子鼻ではなく鼻筋がスーッと通っている。目の辺りや頬に手を当ててみた。腫れぼったかったはずの目元は窪んでいる。肉付きのよかったはずの頬はこけている。触った感じは私のポツペリとした顔ではなく彫りの深い顔だ。

お腹に手を当ててみた。硬くて腹筋が割れている。触り慣れたブヨブヨした贅肉だらけのお腹ではない。

「オザワさん、さっきからなにゴソゴソしてるんですか？　どこか痛いところとか痒いところがありますか？」

看護師が心配そうな顔をして、ベッドで横たわる私の顔を腰を折って覗きこんできた。

「あっ、い、いえ、だ、大丈夫です」

「そうですか。ならよかったです」

看護師は折った腰を伸ばした。

「あの一、私の名前はオザワって言うんですかね？」

恐る恐る看護師に訊いてみた。

「えっ、もしかして、オザワさん、自分の名前を忘れちゃったんですか？」

看護師が右手を口に当てて目を大きく見開いていた。

「いや、ちょっと、どうだったかなと思ひまして」

この看護師にどう説明すればいいのだろうか。

「事故の時に頭を強く打ったみたいですから、少し心配です」

看護師は心配そうな瞳で私を見下ろしている。

「ご心配をおかけして、すみません。ところでここはオカヤマ県ですか？」

「オカヤマ？　いえ、ここはワカヤマですよ。和歌山県有田市です」

「和歌山でしたか」

私は、そう呟いて目を閉じた。「フー」と息を吐いて両手で顔を覆った。やっぱり何かおかしい。

「オザワさん、自分の名前も住んでいる場所も忘れちゃったんですか？」

「いえ、ちょっと記憶が曖昧なだけです」

「本当に大丈夫ですか？　事故の時に頭を打って記憶が飛んでしまってるんじゃないですか？」

看護師が澄んだ黒目がちな瞳で私の顔を覗きこんだ。



「いや、す、すみません。だ、大丈夫です」

「心配です。やっぱりちゃんと検査してもらいましょう」

若い看護師はそう言って、ベッドから出ていた私の右手を優しくさすってくれた。看護師の冷たい手が心地よかった。少し気持ちが落ち着いていくのがわかった。

彼女こそ白衣の天使だ。あの丸い顔のサウスと細面のバレーは自分たちのことを天使だと言っていたが、あの二人が天使なわけがない。あの二人の顔が浮かんだ。そこで、あの時のことを思い出した。最後に私を生き返らせるための手続きの時のことだ。バレーが私の資料を持って、生き返る手続きに行った。サウスはバレーに向かって、絶対に資料を間違えるな、間違えると大変なことになるからと言っていた。大変なこととはどういうことだ。もしかして、今、その大変なことが起こってしまっているのではないか。もしそうなら、あの二人のせいで私の人生はめちゃくちゃになっている。

「これから私はどうになってしまうのですか？」

この白衣の天使に訊いても仕方ないことかもしれない。

「そうですね。そこは先生に訊いてみないと、あたしからはなんとも言えません。オザワさん、自分の住所とか、生年月日は覚えていますか？」

「いえ、全く覚えていません」

ここは記憶を失ったことにしておくしかない。この看護師に、本当のことを話したところで信じてもらえないだろう。きっと、私の頭がおかしくなったと思うだけだ。

「やっぱり記憶を失っているみたいですね。先生にはこの事を伝えておきます。記憶が戻ってくればいいんですけどね」

看護師が淡い色をした小さな唇を尖らせた。

「そ、そうですね」 適当に相づちを打った。

もともと小沢勝己という男のことを何も知らないわけだから、記憶がもどるわけがない。小沢勝己について知っていることと言えば、過去に殺人を犯して、地獄に落ちるような凶悪な男だということだけだ。

私の体、というか小沢勝己の体はその後、順調に回復していった。体だけは退院できるころまで来たんだけど記憶の方がねえ、と医者がしゃがれた声で言った。記憶さえ戻れば退院できるようだが、小沢勝己としての記憶がもどるわけがない。

小沢勝己に知り合いでもいればいいのだが、看護師の話だと、家族や親戚はいないようだ。職場の仲間や友人もいなかったのだろうか。

仕事は日雇いの仕事をしていたようで、他人との付き合いを拒んでいたのかもしれない。寂しい人生だなと他人事のように思ったが、その寂しい人生のバトンを私が受け取ってしまったのだと気づき、ずっしりと重い気持ちになった。

入院中に見舞いに来たのも事故を起こしたトラックの運転手の男と保険会社の人間だけだった。

父親を殺害した男だ。その後も傷害事件を起こしていると聞いた。そんな男が死にかけていても、誰も見舞いになんて来ないだろう。こんな男と関わりたくないと思うのも当然だろう。死んでくれた方がいいと思われていたのかもしれない。

もし、私が小沢勝己と間違われることなく、大沢勝男として生き返っていたら、私の見舞いに誰が来てくれたらだろうか。あれこれと友人や職場の仲間の顔を思い起こしてみた。高山と清水と店長くらいは来てくれたかもしれない。

沙知絵と柚菜は、私が生き返ったら喜んでくれたらだろうか。死ぬ間際の沙知絵と柚菜の顔を思い浮かべると、私が死のうが死ぬまいが興味がないような顔をしていた。考えると辛くなるので考えるのはそこで中断した。

一人で用を足せるようになり、トイレに行って、自分の今の姿を鏡でまじまじと見た。これが今の自分なのかと唾然とした。本当の自分、大沢勝男の姿とは似ても似つかぬ姿だった。本当の私、大沢勝男は背が低くてぼっちゃり。髪の毛は薄く、顔は丸顔。他人からは恵比寿顔で優しそう、癒されると言ってもらった。男前ではないので、そう言って褒めるしかなかったのだろう。

今の小沢勝己の姿は髪の毛はフサフサで黒々としている。鼻が高く頬はこけ落ちている。目は獲物を狙う猛獣のように鋭く光る。

鏡のなかに映るのは今の自分の姿だとわかっていても、目が合っただけで体が震え上がる。左の眉の上に五センチ程のひきつった白く光る傷が恐ろしさをいっそう際立たせている。

身長は本当の私より二十センチは高くて一八〇センチ以上はあるだろう。肉体労働をしていたからなのか筋肉隆々の鍛え上げられた体をしている。

強面で絶対にお友だちにはなりたくないタイプで、反社会的な人間だと言われても誰も疑わないだろう。これから先、この風貌で生きていかなければならないのかと思うと不安しかない。

小沢勝己という男はたくさんの人から恨まれていたのではないだろうか、反社会的な怪しい人間と付き合ってきたのではないだろうか。

私が退院してから小沢勝己を恨んで復讐したいと思っている人間と一緒に悪事を働こうと企てる人間、そんな輩が自分に近づいてきたら、私はどうすればいいのだろうか。

記憶を失ったということでやり過ごすしかないのだが、それが通用する相手ではない気もする。

小沢勝己はどんな所に住んでいて、どんな仕事をしていたのだろう。日雇い労働者というのは隠れ蓑で、違法なことに手を染めていたのかもしれない。

これから先、凶悪犯の男として生きていかなければならないのかと思うと鉛を飲み込んだような気分になった。

サウスとバレーに間違っただけで小沢勝己として生き返ってしまったことを知らせる方法はないだろうか。大沢勝男として生き返るようにやり直しを頼むことは出来ないのだろうか。

その方法をあれこれと考えてみる。もう一度死んでサウスとバレーのいるあの場所まで行くしかないのか。だが、それはリスクが高すぎる。死んで、あの場所まで行ったのはいいが、サウスとバレーに会えずそのまま地獄に落とされてもしたら最悪だ。うーん、どうしたらいいんだ。考えても思い付かない。私はフサフサの髪をかきむしった。

『トントン』

乾いた音が静かな病室に響いた。私はベッドから体を起こしドアに視線を向けた。誰が来たんだ。

『トントン』二回目の音がして、ドアに向かって「はいっ」と声を張った。

小沢勝己の知り合いが来たのか。小沢勝己に恨みを持つ者なのか、それとも一緒に悪事を働いていた者なのか。私は体を硬くして身構えた。

『ギィー』という軋んだ音をたて、ドアがゆっくりと開いた。少しだけ開いたドアの隙間を覗きこんだ。ドアの向こうに男の顔が見えた。チラッと見えただけだが、反社会的な人間には見えなかった。どこにでもいる普通の年配の男だ。男は病室に入ろうとせず、ドアの隙間から顔だけを覗かせていた。

「失礼しますよ」男の声は低く掠れていた。

「は、はい、どうぞ」私はドアの隙間から見える男の顔を覗いた。

男がこっちを見た。私と目が合った瞬間に男は満面の笑みを浮かべ、ドアを大きく開けた。

「小沢くん、大丈夫なのか？」

男はそう言って、私に向かってきた。眉をハの字にして心配そうな表情だ。

「え、ええ、だ、大丈夫です」

男から目を逸らさずに、そう返事してから身構え右拳を強く握った。人の良さそうな男に見えるが油断は出来ない。

男とはじめて会うはずだが、どこかで会ったことのある気がしてならない。どこで会ったのかは思い出せない。

男をよく見ると、男の髪の毛は不自然に浮いて歪んでいた。もみあげの辺りだけに白いものが目立つ。多分安物のかつらでも被っているのだろう。それが気になって、吹き出しそうになり、さっきまでの緊張した気持ちが解けていった。色が入った黒縁の眼鏡もあまり似合っていない。温厚そうな感じで目尻や額に深い皺が刻まれ、白い髭の間から覗く口元は綻んでいた。

「久しぶりだな」

男はそう言ってベッドの前に立ち、私を見下ろした。

「そ、そうですね」

私は適当に答え、握っていた拳を少し緩めた。

「大変な目にあっただけけど、命が助かっただけでもよかったよ」

男を見ると、綻んでいた口元を一字にし唇を噛みしめていた。眼鏡の奥で皺に埋もれる瞳は潤んでいた。涙を堪えているように見えた。

この男とどこかで会ったような気がして気持ちが落ち着かなかったが、どこにでもいる年寄りの顔だから考えるのは止めた。小沢勝己の知り合いだ。小沢勝己とは縁もゆかりもなかった私を知っているはずがない。

「小沢くん、今回は本当に災難だったな」

誰だかわからないが、小沢勝己とどこかで繋がっている人物であることは確かなようだ。

「ご心配をおかけしてすみませんでした」

とりあえず、私はそう言ってベッドから出ようとした。  
「いいよ、いいよ、無理しないで。わしに気をつかわずそのままゆっくりしていてくれればいいよ」

男は両手を前にだし私がベッドから出ようとするのを制した。  
「はい。ありがとうございます」

私はそう言って、立ち上がるのをやめベッドの上に正座した。  
「小沢くん、わしのことはわかるのか？」

男が自分の顔に人差し指を向けた。  
「すみません。それが記憶がどうもあやふやでして」

頭を掻きながら、記憶喪失のフリを続けるしかなかった。  
「そうか、さっき看護師さんから聞いたが、記憶が無くなっているというのは本当なんだな」

男は寂しそうな視線を私に向けた。  
「申し訳ありません」

私はペコリと頭を下げた。  
「小沢くんが謝ることないよ。今回はほんとに災難だったね。けど、命が助かっただけでもよかったよ」

男の瞳がまた潤んだ。  
小沢勝己のような凶悪犯の男でも、心配してくれる人がいるんだと意外に思った。  
一体目の前にいるこの男は何者なんだろう。小沢勝己とはどういう関係なんだろう。一緒に悪事を働いていた相棒だろうか。いや、この男からそういった悪人の臭いは感じない。どちらかと言えば善人の臭いがする。  
「私は父親を殺しているんですから死んで地獄に落ちてでも仕方なかったかもしれませんがね」

私は適当に言ってみた。  
その時、男の眼鏡の奥の瞳が鋭く光った。

「あの事件のことは覚えているのか」

男の声は低く暗い闇に響くような声になった。  
「え、ええ、覚えているというか、ふと、そんなことがあったような気がしています」  
これまで見せなかった威圧感のある男の眼差しに圧倒され、目を合わすことが出来なくなり俯いてしまった。

「そうか。けど、わしのことは覚えていないか？」

「は、はい。すみません」

「記憶が無くなってしまっているのに、あの事件のことだけは覚えているなんて皮肉なものなんだな」

男はそう言って唇を噛みしめた。  
この男は小沢勝己の過去を知っているようだ。この男から小沢勝己のことを聞き出してみよう。

「もし、よろしければ、椅子におかけになって下さい」

私は病室の隅に立てかけてあるパイプ椅子に視線を向けた。

「そうだな、そうさせてもらおうかな」

男はそう言って、立てかけてある椅子を取り、ベッドの近くまで持ってきて椅子を広げた。男は椅子に腰をおろしてからフーッと息を吐いた。短い腕を組んで私に優しい眼差しを向けた。

「私の過去について教えていただけませんか？ 父親を殺した時のことが特に詳しく知りたいんです」

私が言うと男は私の目をじっと見つめてから視線を宙に向けた。口を尖らせて目を閉じた。しばらく沈黙があった。男は話すべきか悩んでいるように見えた。

「あんたにとっては思い出すのは辛いことかもしれんぞ」

宙にやっていた視線を私に向けてじっと見つめた。

「はい、それでも構いません。ぜひ聞いておきたいです。自分の犯した罪を知らないまま、この先、生きていくのは不安でなりません」

辛い過去なのかと思うと少し怖じ気づいたが、小沢勝己は、なぜ父親を殺してしまったのか、その後どんな人生を歩んできたのか。もし、このまま小沢勝己として生きていかなければならないなら絶対に知っておくべきだと思った。

男は組んでいた腕をほどこ両膝に手を置いた。男の目はずっと潤んでいた。

「わしの名前は南蓮司だ。あんたはわしのことをいつも蓮さんと呼んでいたが、この名前にも記憶はないか？」

「すいません、思い出せません」

「そうか。わしとあんたが、初めて出会ったのは、忘れもせん。今から三十五年前のことだ。わしが三十五歳の時であんたは十五歳、まだ中学生だったかな」

その後の南さんの話は私にとって衝撃的なものだった。聞いていて辛くなった。小沢勝己の人生は私の想像を絶するものだった。

三十五年前、交番勤務の警察官だった南蓮司は、その日の夜もいつも通り巡回を終えて、一人日誌にペンを走らせていた。いつもと変わらない平和な一日で日誌に書く内容も平凡なことばかりだった。

田舎町で起こる事件といえば、野生の動物が出て田畑を荒らしたというくらいのもので、この日はそれすらも無かった。町の住人たちは、この平和な町で未成年による殺人事件が起ころうとは、微塵も思っていなかった。

南が日誌を書き終えて一息ついた時、交番のドアが、大きな音をたて勢いよく開いた。南がドアの方に視線を向けると、開いたドアの前に一人の少年が立っていた。

少年の姿を見た瞬間、南は息をつまらせた。ただ事ではない、何か大変なことが起こったと、すぐにわかった。

「ど、どうしたんだ？」

南はビックリして声が裏返った。

少年は肩で息をし、瞬きもせず、南をじっと見つめていた。大きく見開いた少年の目から出る光は、南がこれまでに見たこともない光だった。希望でもなければ絶望でもない。喜びでも悲しみでも怒りでもない。南に助けを求めているようにも見えるが、南を

恐れているようにも見える。それらすべてが混ざった光なのかもしれない。

少年は額を怪我しているようで、額から血が流れ顔を赤く染めていた。

「喧嘩か？ 誰かに襲われたのか？ ちょっ、ちょっと待ってろ」

南が言っても少年は言葉を発することなく、ただ立ち尽くしていた。

南は奥にある畳の部屋に行って、押入れから布団を出してきて敷いた。

「とりあえず、そこに横になれ」

少年は無言のままフラフラしながら畳の部屋に上がり布団の上に崩れるようにして横になった。

「すぐに救急車呼ぶからな」

南は少年が布団の上に横になったのを確認してから、机の上の受話器をとり、電話をした。

救急車を呼んでから、引き出しからタオルを探し出し、給湯器のお湯で濡らして、少年の額の傷口を軽く拭いた。少年は苦しそうに顔をしかめた。額には、細かいガラス片が無数に刺さっていた。ガラスの瓶か何かで額を殴られたのだろうか。刺さっているガラス片を指で丁寧に取り除いた。救急箱から消毒液を出して脱脂綿に湿らせて少年の額に当てた。少年は顔をしかめる。

「何があったんだ？」

横たわる少年に訊いた。

少年は大きなショックを受けているのだろう。口がガクガクと震えるだけで、言葉を発しようとしなかった。誰かに襲われて、ここまで逃げてきたのだろうか。これは傷害事件だ。そうなると、応援をもらわなければならない。

「何があったんだ。おじさんに話せるか？」

少年を落ち着かせようと、南は、激しく上下する少年の胸に手を当て、優しい口調で訊いた。

ハァー、ハァーと、呼吸の音しか返ってこなかった。少年は南の方に顔を向けることなく、天井をじっと見ていた。南はあせる気持ちを抑え、少年が落ち着くまで待つことにした。

しばらくすると、少年の体の震えがおさまり、少年がゴクリと喉を鳴らした。顔を南の方に向けた。

「少しは落ち着いたか」

「……」

少年は声は出さなかったが、ゴクリと頷いた。

「そうか、おじさんに、何があったか話せるか？」

少年に優しく視線を向けた。

「父さんをバ、バットで……」

少年は喉の奥から引きつった声を絞り出した。

「バットでどうしたんだ？」南の声も引きつった。

「お、俺は、父さんをバットで殴り殺したんだー」

少年は雄叫びのような声で叫び、そこから、ウォーッと声を上げて泣き続けた。

救急車とパトカーのサイレンが静かな町に鳴り響いた。

私は南さんの話を聞きながら、話に出てきた少年が小沢勝己だとすぐにわかった。小沢勝己はなぜ自分の父親をバットで殴り殺したのだろうか。それについて南さんは話を続けて教えてくれた。

小沢家は父親の進、母親の佐和、そして長男の勝己の三人家族だった。進は父親らしいことは何もせず、毎日酒と博打と女に明け暮れていた。佐和は生活のために毎日朝早くから夜遅くまで働いた。

事件のあった日、佐和は仕事に出かけていた。夜の仕事といっても水商売ではなく、町にあるホームセンターの閉店業務と清掃の仕事だった。進は佐和が水商売をすることを嫌った。

妻の佐和が一日中仕事をして家を空けていることをいいことに、進はほぼ毎日香水の匂いをプンプンさせる化粧の濃い派手な女を家に連れ込んでいた。

勝己が学校から帰ってくる頃には女は姿を消しているが、たまに勝己が帰った時に、まだ女がいることがあった。勝己が家の引き戸を開けると香水の匂いが鼻をつき、家の中から獣のような女の声がもれてくる。勝己が足元に視線を落とすと、赤いハイヒールが三和土を我が物顔に占拠している。

その時勝己は、家の中には入らず、そのまま静かに引き戸を閉め、踵を返して、夜遅くまで家の近くをブラブラした。このことは絶対に母親には言えないと思いながら、暗い夜道を足が棒になるまで歩いた。

事件の日も勝己はいつも通り学校が終わって女がいないことを祈りながら自宅へと向かった。自宅の前の空地から草野球をする小学生の元気な声と打球音が響いていた。小学生たちが逃げていくボールを全速で追いかけていく。いつも目にする光景だった。

この小学生たちは、これから陽が暮れて辺りが暗くなるまで遊んで、遊び疲れた頃に母親たちが迎えにきて帰っていく。今日一日のことを楽しそうに話しながらあたたかい家庭へと向かい、風呂で汗を流してから家族みんなで食卓を囲むのだろう。勝己の頭にそんな光景が浮かぶ。勝己はそれが特に羨ましいとは思わなかった。自分とは別世界のことだと思っていたからだ。

勝己は、野球少年たちの楽しそうな姿を一瞥して家へと向かった。家の前まで来て、一つ息を吐いてから引き戸に手をかけると、家の中からもいつもとは違う怒鳴り声が聞こえてきた。怒鳴る声の主はすぐに父親だとわかった。いつも聞こえてくる獣のような女の声はしなかった。

慌てて引き戸を開けると赤いハイヒールが倒れていた。その周りに母親の灰色に色褪せたスニーカーがひっくり返っていた。佐和が昼の仕事から帰ってきていたのだ。

普段、佐和は昼の仕事が終わると、家には帰らず、そのまま夜の仕事に向かうのだが、この日は昼の仕事が早く終わり、一旦家に帰ってきたようだった。そこで、進が連れ込んでいた化粧臭いハイヒール女と鉢合わせしてしまったのだ。

勝己が三和土に足を踏み入れると、化粧の臭いが鼻をついた。ちょうどハイヒール女が出てきた。勝己が女の顔を見ると、女は口元を歪め不貞腐れた表情で勝己を一瞥して、三和土に倒れていたハイヒールを立て足を入れた。そして勝己の胸を突き飛ばすように

して、引き戸が壊れてしまうかと思うくらいの激しい勢いで開け、飛び出していった。カツカツとヒールの音が勝己の耳に残った。

勝己は女の後ろ姿を睨みながら、開けっ放しになった引き戸を力いっぱいバーンと閉めた。ここには二度と来るなど心で叫びながら。

家の中からは進の怒鳴り声と激しい物音が響いていた。勝己が家の中に入ると、鍋や食器、置時計やアイロン、掃除機、炊飯器まで、家にある、ありとあらゆる物が部屋中に散乱していた。その部屋の中央で、進が佐和に馬乗りになって、顔を平手で殴っていた。『パン、パン』という鈍い音が部屋に響いた。

「殺されたいんか」と進が叫んでいる。

佐和は声を上げることもなく無防備の状態に殴られ続けていた。

「やめろー」

このままでは佐和が殺されると思った勝己は、急いで進の体を後ろから抱え、投げるようにして佐和の上から引きずり下ろした。そのまま進の体を上から押さえつけようとしたが、進の方が勝己よりはるかに力が強く、勝己は簡単に突き飛ばされ、タンスで後頭部と背中をぶつけた。

進が勝己を睨みつけた。

「なんじゃ、ガキのくせに親に歯向かう気かー」

進は大声で怒鳴り、手元に落ちていた置時計を手にとって、勝己に向かって投げつけてきた。置時計は勝己の頬をかすめ、タンスにぶつかり割れた。

進は立ち上がり勝己の前に立った。

「お前、誰のおかげでここまで大きくなったと思とんじゃ」

進は勝己の胸ぐらを掴み、頬を思いっきり殴った。そして、今度は倒れた勝己の顔を蹴り上げた。

「勝己には手を出さないで」

佐和が進を後ろか押さえようとしたが、佐和は進の右手一本で簡単に殴り倒された。

「こいつは、親に歯向かったんじゃ。ちゃんとしつけせんと、まともな人間にはなれん。お前が甘やかすから、こんなバカ息子になったんじゃ」

進は勝己を指差しながら、倒れる佐和に向かって怒鳴った。進はそれから勝己を殴り蹴り続けた。

勝己は両手で頭をおさえながら体を小さくして抵抗することなく、進の暴力にじっと堪えた。自分が進から暴力を受けている間は、母親は暴力を受けずに済むと思ったからだ。

進も殴り疲れてきたのか、手数が少なくなり、殴る力も弱くなってきた。進は肩で息をしはじめ、そして、ついに殴る手を止めた。

「お前らは、俺のやる事にいちいち文句言うな」

進は息を切らしながら佐和に向かって言って、そのまま奥の部屋へ向かい襖をバンと閉めた。

勝己は肩で息をしながら閉まった襖を睨んだ。佐和は立ち上がり勝己を背中から抱きしめた。

勝己は母親の息遣いを感じながら両拳を強く握りしめた。



その後、佐和はヒビの入った鏡台を覗きこみ、顔に出来た痣を化粧で隠し仕事へ行く準備を始めた。勝己は部屋に散らばった破片を拾い集めた。

襖の向こうからは進のグチグチとわめく声が漏れていた。また酒をあおっているようだった。

「勝己、お母さん、これから仕事に行くけど、一人で大丈夫？」

化粧を終えた佐和は心配そうに勝己の顔を覗きこんだ。顔の痣は淡くなっていたが、顔が腫れているのは隠せない。

「俺は大丈夫だけど、母さんこそ、怪我してるのに仕事行ける？」

「お母さんは大丈夫よ。それより、お母さんが仕事に行ってる間にお父さんが勝己にまた暴力振るわないかが心配だわ」

佐和が整った眉をハの字にした。

「きっと、父さん、このまま酔っぱらってすぐに寝てしまうよ」

「そ、そうよね。勝己、辛い思いさせてごめんね」

佐和が勝己の腕に抱きついた。

「母さん、仕事頑張ってる」

勝己は佐和を安心させようと笑みを貼り付けて、佐和に顔を向けた。

「うん。じゃあ、勝己、いってくるわね」

そう言ってからも、佐和はなかなか勝己の腕から離れようとしなかった。

「母さん、心配しなくても大丈夫だよ」

勝己の方から佐和の手をほどいた。

「本当に大丈夫？」

「俺、しばらく外に出て避難しておくから、心配しないで」

「わかった。じゃあ、本当に行ってくるわね」

佐和は、また勝己に近づき、腕を握って勝己を引き寄せた。

「母さん、早く行かないと遅刻しちゃうよ。母さんが仕事をクビになったら大変だよ。俺は、今から空き地で遊んでる小学生に、野球でも教えてくるから大丈夫だよ」

勝己はそう言って佐和の顔を覗きこみ、もう一度笑みを浮かべた。

「そ、そうね、じゃあ、行ってくるわね」

佐和はやっと勝己の腕から離れた。

佐和は、三和土に散らばったスニーカーを揃えてから足を入れた。

「やっぱり、今日は休もうかな」

佐和は、スニーカーに足を入れてから勝己の方に振り返り、また眉をハの字にして言った。

「俺のことなら大丈夫だよ。俺もう子供じゃないよ」

勝己は口角を上げた。

「そう。じゃあ、いってくるから、何かあったらすぐに電話して」

佐和が左手で、受話器を持つポーズを見せた。

「わかった。そうする」

「大丈夫よね、お母さんの仕事場の電話番号わかるわね」

「大丈夫。前に教えてもらって、ここに書いてるよ」

勝己は生徒手帳をポケットから出して、佐和の方に向けた。

「そうだったわね。うん、そうね。大丈夫よね」

佐和はひとり言のように呟いた。

「母さん、外までいっしょに出ようか」

勝己は三和土に下りて靴を引っかけた。

「見送ってくれるの？」

佐和は笑みを浮かべ、自分より少し背が高くなった勝己の腕に手を回した。

「うん、母さん見送ってから、野球やったり、どこかブラブラ散歩しとく」

「勝己に見送ってもらえるなんて、お母さん幸せだな」

佐和は勝己の二の腕に頬を寄せた。

「そう。よかった」勝己は左手で頭を掻いた。

「勝己、来年は甲子園にプロ野球、観に行こうか」

「急にどうしたの」

「勝己といっしょにどこか楽しいところに行きたいな、と思ってね。勝己、野球好きでしょ」

「うん、楽しみにしてる」

玄関のドアを開け、二人は恋人同士のように腕を組んで外に出た。

ひんやりした外の空気が勝己の頭を冷やし、あたたかい佐和の体温が勝己の心をあたためた。

空地から野球少年の声が冷えた空気にこだました。

「じゃあ、ちょっと空地に行って野球してくるよ」

勝己は空き地の方を顎でさした。

「わかった。お母さんは仕事行ってくるわね」

佐和は勝己の腕から離れた。もう一度勝己の手を握りしめてから、名残惜しそうに踵を返し歩きはじめた。

勝己は空地の前で佐和が歩く後ろ姿を眺めた。佐和は歩きながら、何度も何度も振り返り勝己の方に視線を向けた。角を曲がる手前で立ち止まり、くると勝己の方に体の向きを変えた。そして勝己に向かって大きく手を振った。勝己もそれにこたえ大きく手を振った。

「母さん、頑張ってー」

佐和の姿が見えなくなって、勝己は急に寂しくなった。勝己は空地に行くのをやめて、家に戻ることにした。先に散らかった部屋をもう少し片付けておこうと思った。

家に入ると奥の部屋からテレビの音が漏れていた。そして、テレビの音の間を縫うように、「ヒャヒャヒャ」という甲高い笑い声が聞こえてきた。品のない人をバカにしたような笑い声だ。知らない女を家に連れ込んだり母親や自分に暴力を奮ったことを反省する様子など微塵もない笑い声だった。

進の笑い声を聞いた勝己の胸の奥底にはマグマのような怒りがフツフツとわき上がってきた。勝己の体は怒りで震えた。奥歯を噛みしめ両拳をギュッと握りしめた。

このままだと母さんが可哀想すぎる。いつか母さんはこいつに殺されるかもしれない。こいつは鬼だ。こいつは生きる資格なんてないんだ。

今、この家にいると、自分まで鬼になりそうだと思った。頭を冷やすべきだと、勝己はまた外に出ることにした。

最初の予定通り空地で遊ぶ野球少年に野球を教えることにした。しかし、すでに陽は傾きはじめていた。空地に入ると、野球少年たちは母親たちが迎えにきて、そろそろ解散するところだった。秋も終わりが近づき、風は冷たく陽が落ちるのも早くなった。家族と帰路につく少年たちの幸せそうな背中をぼんやりと眺めた。空地にいるのは自分一人になった。野球は諦め、頭を冷やすためにしばらく町をブラブラすることにした。

人通りのある商店街の方まで歩いた。そこで同級生の男子が家族四人で歩いているのを見かけた。父親がその同級生に向かって笑みを浮かべて話していた。同級生は頭を掻いて笑っていた。それを見てもやはり羨ましいとは思わなかった。その幸せそうな光景が自分には無縁のものだと思っていたからだ。

一時間ほど歩いてから、家の近くまで戻ってきた。完全に陽は沈み、街灯の無い町はひっそりとしていた。鬼の顔が頭に浮かぶ。家の中に入る気にはなれなかった。真っ暗な空地に足を踏み入れた。

野球少年もいなくなり、月灯りだけに照らされた空地は今日の役目を終えて眠っているようだった。勝己は空地の片隅にあるベンチに腰を下ろし、月の灯りで灰色に光る地面を眺めた。

空地の向こう側にある交番の灯りが見えた。痩せ細った犬がひょこひょこ歩いていた。犬に向かって口笛を吹き右手を差し出してみると、犬は勝己の方に体を向け首を傾げた。犬と勝己のちょうど真ん中に金属バットが転がっているのが見えた。さっきの野球少年たちが忘れて帰ったのだろう。犬はしばらく勝己を見ていたが、勝己がベンチから立ち上がると、慌てて逃げて行った。

勝己は踵を返し、灯りもなく闇に沈む自分の家を眺めた。あの家の中には鬼がいる。愛情の欠片もない冷酷な鬼だ。勝己はゆっくりとその鬼のいる家に向かって歩きはじめた。引き戸の前まで来て立ち止まった。昼間に赤いハイヒールの女がここから飛び出していった。ひとつ息を吐いてから、引き戸を開けた。

家の中は灯りが消えてシんと静まりかえっていた。キッチンの窓から漏れる月の明かりをたよりに足を踏み入れた。鬼はいるのだろうか。キッチンの蛍光灯をつけて部屋を見渡した。

襖の向こうから、地響きのような躰が聞こえてきた。鬼は酔っ払って眠っているようだ。

勝己は襖の前に立って取っ手に手をかけて息を飲んだ。音をたてないように、こぶし一つ分だけ襖を開けて部屋の中を覗いた。

万年床に大の字になって横たわっている情けなく口を開いた鬼の姿が見えた。目を覚ましたらまた暴れだすかもしれない。母さんが仕事から帰ってきたらまた暴力をふるい出すかもしれない。暴れだしたら自分の力では母さんを助けることは出来ない。

しかし、今ならと思った。襖をゆっくりと開け、散乱する紙屑や空き缶を避けて部屋の中に足を踏み入れた。物音を立てないように足の裏に神経を集中させる。

眠っている鬼の前に立ち視線を落とした。情けなく口を開け大の字になった鬼は、全く無防備な状態だ。

「フッフッフッフ」

情けない表情から笑みが漏れていた。その卑しい笑い声を聞いて体が熱くなった。

家族で出かけて幸せそうにしていた同級生の顔が頭に浮かんで消えた。野球少年が楽しそうに野球する姿が浮かんで、そして消えた。神様は不公平過ぎる。自分が何をしたというんだ。両拳をぎゅっと握りしめた。

勝己は音をたてないように一度部屋を出た。襖を開けたまま家を出て空き地へと向かった。空地にはさっきの犬の姿はなかった。金属バットだけが残され、月に反射して鈍く光を放っていた。

勝己はその鈍い光に吸い寄せられるように大股でゆっくりと歩いていった。足元に転がる金属バットに視線を落とした。その時のそれは野球のバットには見えなかった。鈍く光を放つ凶器のように見えた。勝己は腰を折り金属バットに左手を伸ばした。ひんやりした冷たい金属の感触が手のひらに伝わった。金属バットを拾いあげ、グリップの部分を左手で強く握り高く持ち上げ月に向けた。月の中に母親の笑顔が見えた。

「母さん」

眩いてから、金属バットを両手で握りなおしその場で何度も振った。金属バットを振りながら、「クソー、クソー、クソー」と何度も繰り返し声を上げた。父親への怒りが収まるまで振り続けるつもりだった。

しかし、それが収まることはなかった。

「クソー」と一段と大きな声を上げた。静まり返る空地に、その声がこだました。こだまする自分の声が悪魔の声に聞こえた。踵を返し金属バットのグリップを右手で握り、金属バットの先を地面に擦らせながら家の方へと夢遊病者のように歩き出した。カラカラと金属バットの先がアスファルトを擦る音だけが不気味に響いた。

家の前に立った。金属バットを強く握る。音をたてないようにそろりとドアを開ける。家に入ると、まだ奥の部屋から鼾が聞こえていた。玄関を上がり右手にバットを握りしめたまま奥の部屋へと向かった。部屋の前で一度呼吸を整えた。情けなく横たわる鬼の姿が見えた。

今ならいける。こいつに勝てる。勝己はそう思った。

進は布団の上で無防備に口を開けて大の字に眠ったままだ。空になった日本酒の一升瓶が大の字になった進の右手の辺りに横たわっていた。

母さんに暴力を振るっていた時の鬼の顔を思い出した。止めようとした自分も殴られた。起きている時の鬼には敵わない。いつも遊び呆けてるくせに、なぜか腕力だけはあつ。でも今ならいける。母さんを助けなければならない。

金属バットを両手で握りしめ頭の上に振り上げた。目を閉じ口を開けている情けない鬼の顔を睨んだ。鼓動が激しくなり胸が苦しくなった。息が荒くなるのをおさえるように息を止めた。

「こいつさえいなければ俺も母さんも幸せになれる」

頭の上に構えていたバットを目を閉じて一気に振り落とした。

『ガシャー』という音が耳に届いた。

勝己は鬼の頭めがけて金属バットを振りおろしたが、戸惑いがあったためか、金属バットは鬼の頭から外れてしまい鬼の枕元にあった一升瓶を砕いた。

一升瓶の割れる音で、さすがに熟睡していた鬼も目を覚ました。鬼が体を起こした。勝己を見てから枕元で割れた一升瓶を見た。そして、また勝己の顔を見た。そこで目が合った。最初鬼は寝ぼけたような顔をしていたが、勝己と目が合った瞬間にその目がカッと見開いた。

「何しとるんじゃー」

鬼の怒鳴り声を聞いて勝己は後ずさりした。

鬼が立膝をついて割れた一升瓶の細い口の部分を握った。勝己はバットを頭上に振り上げた。鬼は割れた一升瓶の先を勝己に向けた。二人はその体勢で睨み合った。勝己の体はブルブルと震えだした。鬼はそれを見てニヤリと笑った。

「勝己、お前、父親に向かってそんなことしていいと思ってんのか」

鬼は勝己を睨み上げた。

「あ、あんたなんて、父親とは思ってない。あんたは鬼だ」

勝己の声は震えた。

鬼は、視線を外さず、勝己の顔に割れた一升瓶を向けたまま腰を上げようとした。そして、勝己に向けて右の口角だけを上げ「フン」とバカにしたように鼻を鳴らした。

勝己は、「ウォー」と声を上げた。立ち上がろうとする鬼の頭めがけて思いっきり金属バットを振り下ろした。

鬼は、同時に勝己の顔面めがけて、一升瓶を突き出した。勝己の額に一升瓶が刺さった。痛みは感じなかったが、目の前は真っ赤になった。

勝己の振り下ろした金属バットは、鬼の額をとらえていた。鬼の喚き声が部屋に響き、鬼はそのまま仰向けに倒れた。鬼の額から血が激しく吹き上がった。鬼の血が床を赤く染めていった。

「クソー」鬼が倒れたまま声を漏らした。ギロリと勝己を睨んだ。

勝己は倒れた鬼の顔面めがけて、もう一度金属バットを振り下ろした。

『グシャ』という音がして、鬼の動きが止まりぐったりとした。

勝己はそれでも手を止めることなく、何度も何度も金属バットを鬼の全身に金属バットを振り下ろした。鬼の頭に、顔に、胸に、腹に、腰に、足に、何度も何度も金属バットを振り下ろした。

「チクショー、チクショー」

勝己の声だけが部屋に響いた。

私は南さんの話を聞いて、鉛を飲み込んだような重い気持ちになった。

『忘れたい気持ちはわかります。その時はあなたも未成年でしたし、あなたに殺された男にも問題はありましたからね』

あの世でそんな話を聞いたことを思い出した。

小沢勝己がこの事件を起こした頃、同い年の私は、ここから遠く離れた岡山県でどんな生活を送っていたのだろうかと思い返してみた。

確か高校受験で悩んでいた頃だ。母親から『勉強しろ、勉強しろ』と何度も言われることがプレッシャーになり、うっとおしくて腹を立てていた。

勉強するのが辛くて苦痛だと感じていた。好きな女の子がいたが、全く相手にされず

に悩んでいた。

今思えば、どれも大した悩みではない、平凡で、幸せな悩みだったんだなとつくづく思った。

父親は亡くなるまで家族のために毎日仕事をし生活費を稼いでくれた。母親はパートで働き、帰ってきてから、食事の支度や掃除や洗濯をしてくれた。

いつも朝食を家族三人で囲んだ時代もあった。父親が亡くなってから母親は女手一つで私を育ててくれた。有難く幸せなことだったと今になって思う。

小沢勝己が父親を殺すと決めて空地で金属バットを手にした同じ頃、私は平凡で幸せな悩みの中で、母親や友人に護られ生きていたのだろう。

もしかしたら小沢勝己が進に金属バットを振り下ろしたその時間、私は母親が忙しいなか作ってくれた夕食に小さなクレームでもつけていたのかもしれない。

「辛いこと思い出させてしまったかな」

南さんが話し終えた後、眉をハの字にした。

「いえ、大丈夫です。教えてもらえてよかったです。ありがとうございました」

私はベッドの上で正座をし、背筋を伸ばして南さんに向かって頭を下げた。

これから先、私は小沢勝己の壮絶な人生を引き継ぐことになったのだ。私はどのように生きていけばいいのだろうか。

その後、南さんは私のことを気にかけて、病院に何度も顔を出してくれた。記憶のないままの私はなかなか退院することができなかったが、南さんが身元引受人になってくれるということで、やっと退院できた。

小沢勝己はこれまで日雇い労働者として働いていたようだが、南さんは、定職に就けるよう、どこか紹介できそうな仕事を探してみると言ってくれた。

私の退院の日には、住んでいた場所すらわからない私のために、病院まで迎えに来てくれ、小沢勝己が住んでいたアパートまで連れて行ってくれた。

病院から電車に乗って十分、駅から歩いて二十分のところに小沢勝己の住んでいたアパートはあった。二階建ての築五十年くらいの色褪せたアパートだった。

「着いたぞ。ここがあんたの住んでいたアパートだ」

南さんがアパートに顎を向けてから私に視線を向けた。

「南さん、どうもありがとうございます」

案内してくれたことに礼を言って深々と頭を下げた。顔を上げると南さんと目が合った。眼鏡の奥の皺まみれの中にある小さな瞳が、今の私にとっては灯台の灯火のように思えた。

「礼なんていいよ。それより、どうだ、ここを見て、なにか思い出せそうか？ 記憶を失うまで、あんたは毎日この景色を見ていたはずだ」

「ハ、ハア」

思い出すもなにも初めてくる場所だ。思い出しようがない。しかし、アパートを眺め

ながら腕を組んで記憶をたどるフリをして見せた。

「どうだ？」南さんが私の顔を覗きこんだ。

「すいません。やっぱり思い出せそうにありません」

私は首を横に振った。

「そうか。まあ、仕方ないな。とりあえず部屋に入ってみるかな。鍵は持ってるな」

「はい」

私は鞆のなかから鍵を取り出した。

「一階の一番奥の部屋だ。行こうか」

南さんはそう言って先に部屋の方へと歩き出した。

「はい」

私は南さんの丸い背中を追いかけた。

「ここだ」南さんはドアの前で立ち止まりドアをトントンと人差し指で叩いてから私に体を向けた。

「はい」私はドアに視線を向けた。

ドアは木目調で下の方は黒ずみ湿気のせいか、少し浮いていた。ドアの横に表札はあるが名前は入っていないかった。この中に入ることに戸惑いキョロキョロと辺りを見渡した。

「鍵を開けてくれるかな」南さんが笑みを浮かべた。

「は、はい」

ドアノブに鍵を差した。恐る恐るゆっくりドアを開けると『ギィー』と軋む音がした。ドアを半分くらい開けて部屋の中を覗きこんだ。

「あんたの部屋だ。遠慮せずに中に入れていい」

南さんが私の背中をポンポンと叩いた。

「あ、はい。失礼します」

ドアをゆっくり開けて、三和土に足を踏み入れた。すぐ右手に台所があり、正面の奥に畳の部屋が見える。

「中で休憩しようか」

南さんが立ちつくしていた私の肩に手を置いた。

「あ、はい」

本当は赤の他人の部屋なので入るのに躊躇してしまう。靴を脱いで部屋に足を踏み入れた。足の裏に床の冷たい感触が伝わった。主を失い、時間が止まったような静かな部屋だ。

冷蔵庫のモーター音が急にガタガタと大きな音をたてた。今入ってきた男は、この部屋の本物の主ではないと抗議しているように聞こえた。

部屋の中は家具や荷物は少なく真ん中にテーブルがあり、その奥の台の上にテレビと置時計、写真立てがあった。乱雑な部屋をイメージしていたのできれいに片付けられているのは意外だった。

万年床で、床に酒の瓶が転がり、吸い殻が一杯になった灰皿と食べ残しのカップ麺、酒の入ったコップがテーブルの上に散乱している部屋をイメージしていた。

すぐに掃除でもしなければならぬと思っていたので、きれいな部屋を見て少しほっとした。片付けなければならぬのはベランダに干されっぱなしになって、風に揺れて

いる洗濯物くらいだった。

本物の小沢勝己はあの洗濯物を干している時、まさかそれを片付けることなく、死んでしまうとは夢にも思わなかっただろう。人生なんて一寸先は闇だ。私もまさかこんなことになるとは思ってもみなかった。高山と清水と飲んで帰る時には、次の日も三人で仕事の休憩時間に喫煙所で飲み会の続きの会話をするのだろうと思っていた。

部屋に入ったが落ち着かない。腰を下ろす気になれず、部屋の中をうろろと歩き、隅々まで見て回った。特に珍しいものはなかったが、テレビの横に置いてある写真立てが目止まった。色白で清楚な女性が笑みを浮かべている。この写真を撮った人物に慈愛に満ちた眼差しを向けている。

「この女性は？」私は写真立てを手にとり南さんに向けて訊いた。

「あー、それが佐和さんだ。あんたのおふくろさんだよ。亡くなる一年くらい前の写真だ。きれいな女性だろ」

南さんが目を細めた。

「佐和さんは何歳で亡くなったんですか」

「うーん、たしか五十歳だったかな。ちょうど今のあんたくらいの歳だったな」

南さんは遠くを見つめるような目をしていた。

「まだ、若いのに」

私は唇を噛みしめた。そう、五十歳は死ぬには早すぎる歳だ。まだまだこれからだった。

「そうだな。若すぎたよ。いろいろと大変だったから、きっと心労が祟ったんだろうな」

「結婚した相手が悪かったですね。これだけ美しい女性なら、もっといい男性と結婚できただろうに」

「まあ、そうだろうけど、そうなってたらあんたはこの世に存在しないことになるけどな」

「まあ、そうですけど」

「佐和さんはあんたを生んだことが一番幸せなことだったはずだ。だから佐和さんは幸せだった」

「それにしても優しくそうな女性ですね」

「ああ、優しい女性だった。あんたは、この写真をいつも眺めながら酒を飲んでたよ。もっと母親孝行がしたかったって言いながらな」

「そうでしたか」

私はじっと写真に映る女性を見つめた。

「昔はよくここでわしと酒を飲んだんだけどな」

そう言いながら南さんは床に腰をおろした。

「南さんと私、二人でですか？」

私もテーブルを挟んで南さんの前に腰をおろした。

「ああ、佐和さんが生きてる時は三人で飲んだこともあるがな。亡くなってからはいつも二人だったな。それも十年くらい前の話だ。懐かしいな」

「十年くらい前ですか？」

私はひとり言のように呟いた。十年くらい前から南さんは小沢勝己と会っていないかったのだろうか。なら、なぜ、今になって急に南さんは、小沢勝己の前に現れたのだろうか。



私が事故にあったので、心配になって会いにきてくれたのか。もし、そうなら事故のことを誰から聞いたのだろうか。

「せっかくだから今日は久しぶりに軽く一杯やるか」

「いいですね」

この際、南さんからいろいろ話を訊いておいた方がいいだろう。もうしばらく一緒にいたい。

「じゃあ、今日はあんたの退院祝いということでわしが奢るわ。これから一緒に買い出しに行こうか。昔二人でよく行ったスーパーがある。今からそこへ行ってみよう」

南さんがしわくちゅの笑みを浮かべた。

「はい」

私も自然と笑顔になった。こんな笑顔になったのはいつ以来だろう。すごく幸せな気分だ。別人として生き返ってしまい、どうしようもなく不安なはずなのに不思議だった。

「当時、あんたがよく利用していたスーパーだ。二十分程歩かなきゃならんが、散歩がてらこの辺りの景色を見ておくのもいいだろう」

確かにその通りだ。私にはこの辺りの土地勘が全くないわけだから、南さんにこの辺りのことをいろいろと教えてもらっておいた方が今後のためになるだろう。

スーパーに向かいながら南さんは小沢勝己が利用していた銭湯や理髪店、ボリュームがあって安く美味しいと評判の定食屋などの場所をいろいろと教えてくれた。

「十年前と変わってないなあ。田舎だが、意外と便利なところなんだよ。あっちの筋には商店街もあるしな。また暇な時にでも覗いてみるといい」

「そうします。これから行くスーパーを私はよく利用していたんですか」

「そうみたいだな。十年前にあんたと会う時はいつもそこで買い出しをして、部屋で飲んだよ。懐かしいな」

「南さんはお酒は好きなんですか」

「酒は好きだけど、弱いからすぐに酔っぱらっちゃってな。あんたの部屋で寝ちまって気づいたら朝だってことがしょっちゅうだったな。あんたは酒が強くて全く酔っぱらわなかったがな」

「私は酒が強かったんですか？」

「ああ、強かったな。あんたはいつも焼酎を飲んでたけど、水でも飲んでるかのようにならぶ飲んでた。今思えば何かを忘れたかったのかもしれない」

南さんが宙に視線を向けた。

「何かを忘れたかった？」

「ああ、あの頃のはあんたは苦しかったんだと思う。そういう意味では記憶が無くなった今の方があんたは幸せなのかもしれん」

「でも、記憶がないままでは不安です。自分の過去のことは知っておきたいです」

「そうだな」南さんは唇を噛みしめて私の目をじっと見て頷いた。

「はい」私は首肯した。

そこから二人は言葉を交わすことなくスーパーへと歩いた。

「今日も焼酎でいいのか？」

スーパーの入口に着いてから南さんが訊いた。

「いえ、今日はビールにします」

本当の私、大沢勝男は普段はビールばかり飲んでた。

「そうか、じゃあ、わしといっしょだな。缶ビールで乾杯でもするかな」

南さんの口元がほころんだ。

「はい、そうしましょう」私も自然と笑みになった。

「わしはビールを買ってくるから、あんたは、つまみになりそうなものを、適当に好きなだけ選んできてくれ」

南さんはそう言って、そそくさと酒売場へと向かって行った。私はスーパーの店内をゆっくりと見て回った。

大沢勝男として、スーパーの肉売場で働いていた頃の事を思い出した。遠い昔のような気がして懐かしく思った。考えてみれば幸せだったと思う。ちゃんと定職があって、少ないとはいえ、毎月決まった収入があった。沙知絵が朝食と夕食の準備をしてくれた。昼食の弁当を作ってくれることもあった。あの頃に戻りたい。そして沙知絵の手料理が食べたい。大沢勝男は恵まれていたんだと今改めて思った。

スーパーの店内にスタッフ募集のポスターが貼ってあるのを見つけた。パート、アルバイト募集とあり、その下に、レジ担当、食品担当、鮮魚担当とあり、そして一番下に精肉担当と書いてあった。ここで働けないだろうかとここで働く自分の姿を勝手に想像した。

「いらっしゃい。今日は牛肉の特売日ですよー」

肉売場の若い男性店員が手を叩きながら大きな声を出していた。店内には活気がみなぎっていた。冷蔵ケースの前でたくさんのお客さんが肉のパックを品定めしている。

「先週買ったすきやき肉、すごくおいしかったわ」

一人のお客さんが嬉しそうに、その男性店員に話しかけていた。

「そうですか。それはよかったです」

男性店員も嬉しそうな表情を浮かべていた。

その表情を見て羨ましいと思った。大沢勝男として働いていたあの頃が懐かしい。私は目を細めてそのままずっと、男性店員の働く姿に見入ってしまった。

「おい、なにしてんだ」

後ろから声が出て振り向くと、南さんが立っていた。

「ああ、すみません」

南さんの持つ買い物カゴを見るとカゴの中一杯に缶ビールが入っていた。

「じっと、あの店員を見てたけど、どうしたんだ？ 知り合いか」

南さんが肉売場の店員に視線を向けた。

「いえ、そんなんじゃないです。すごく楽しそうに仕事してるなと思ひまして羨ましかったですよ」

「そうだな。ここの店員はみんな愛想がよくて楽しそうだな。それよりこれ、適当に選んでおいたぞ」

南さんは買物カゴを持ち上げて私に見せた。

「ありがとうございます。すごい量ですね。重そうですから私が持ちます」

「いいよいいよ。それより、あんた、まだつまみは選んでないのか？」

「すみません、まだなんです」

「そうか、じゃあわしが適当に選んでくるから、ここで待ってろ」

南さんはまた店内の奥へと消えていった。私は肉売場の前で、もうしばらく立っていた。

愛想のよかった肉売場の店員が、私の存在に気づいて顔色が変わった。見た目の怖い中年男が買物もせずにはぼーっと立っているわけだから、顔色が変わっても仕方ないかもしれない。仕事の邪魔をしてはいけないと、その場から離れることにした。南さんを探すと、すでにレジを済ませ袋詰めをしている姿が見えた。

「すみません」

袋詰めしている南さんの横に立って声を掛けた。

「おう、やっと来たか。気が済んだのか」

南さんが袋詰めする手を止めて私に顔を向けた。

「はい、気が済みました」

「嘘つけ。まだ名残惜しそうな顔してるぞ」

南さんはそう言って空になった買物カゴをカゴ置き場に放り込んだ。

「そうですかね」私は首を傾げた。

「ああ、してる。自分もここで働きたいなー、て顔してるよ」

南さんはそう言ってスーパーの出口へと向かった。

南さんに自分の気持ちを見透かされていることに驚きながら、南さんの背中を追いかけた。

帰りは少し寄り道して商店街の中を歩いた。今時珍しいなかなか活気のある商店街だった。威勢のいい鮮魚店や鮮度の良い野菜が並ぶ八百屋を見て高山と清水のことを思い出した。二人は元気になっているのだろうか。

ソースのいい匂いがするなと思ったら、店頭でお好み焼きを焼いている店があった。美味しそうだった。沙知絵と食べたカキオコを思い出した。

「退院おめでとう」

部屋に着いてから、すぐに缶ビールで乾杯した。

「ありがとうございます」

私は南さんの持ち上げた缶ビールに自分の缶ビールを当てて一気に飲んだ。久しぶりに飲んだビールで喉を鳴らす。最高に旨かった。

ビールを飲み干してから南さんを見ると好好爺のような顔で私をじっと見ていた。

「つまみは適当に買っておいたぞ。あんたはキムチが好きだったから、それも買っておいたからな」

「私はキムチが好きだったんですか？」

「まあ、なんでもうまそうに食ってたけどな。特にキムチが好きだったな」

南さんがキムチのパックを開けながら言った。

南さんはキムチを指でつまんで口に放り込んだあとビールをゴクゴクと飲み、「ハァー」と息を吐いた。

南さんは胸ポケットからタバコを取り出しライターで火をつけた。「フュー」と紫煙を天井に向かって吐いた。煙が旨そうだった。

「あんた、タバコ持ってなかったな」

南さんはそう言って私の前にタバコとライターを滑らせた。

「ありがとうございます」

箱からタバコを一本抜きライターで火をつけた。

それから、南さんはいろんなことを話してくれた。内容はほとんどが小沢勝己がどんな人間でどんな生活をしていたかということだった。

南さんの口から小沢勝己のことを悪くいうことはなかった。『本人?』を前にしていることもあるだろうが、南さんの話を聞いていると、小沢勝己は私が思っているような凶悪な男ではなく、本当は母親想いの心の優しい男だったように思えた。

父親を殺害してしまったことは絶対に許されることではないが、同情する余地はある。ただ、父親殺害以外にも小沢勝己は傷害事件を起こしていると訊いている。それについて南さんに詳しく訊いてみたくなった。

「私は父親を殺害した以外にも傷害事件も起こしたようなんですが、南さんはそのことは知っていますか」

「ああ、山崎信男の事件のことだな」

南さんは飲んでいたビールの缶をテーブルにコンと置いて、しわくちゃの目で私を見た。

「山崎信男さん、ですか」

南さんの口から全く知らない名前が出てきた。山崎信男とは一体何者なのだろう。小沢勝己の犯した傷害事件とどんな関わりがある人物なのだろう。

「そうか、山崎信男も覚えてないわけだな」

「え、ええ。初めて聞く名前です」

南さんがタバコを灰皿に押しあてて、ニヤリと笑った。

「そりゃそうだな」

「山崎信男という人のことと私が犯した傷害事件のことを詳しく教えてもらえませんか」

「どうしても知りたいか？」

南さんが次のタバコを箱から抜き取った

「はい、知りたいです」

南さんはしばらく「うーん」と唸っていた。

「お願いします」私は頭を下げた。

「仕方ねえな」

南さんはそう言ってから、持っていたタバコを口に咥えライターで火をつけた。思いっきり煙を肺に吸い込んでから私を見た。

「吸っていいぞ」南さんがタバコの箱を差し出した。

「じゃあ、一本いただきます」

私は南さんが差し出したタバコの箱から一本抜きとった。南さんがライターの火を近づけてくれたので、タバコに火を点けて思いっきり煙を吸い込んだ。

その後、南さんは小沢勝己の起こした傷害事件について話してくれた。

小沢勝己は刑務所を出てから母親の佐和とこのアパートでいっしょに暮らしはじめた。佐和は小柄で色が白く、年齢より若く見えた。そんな佐和に言い寄ってくる男も多かったようだ。

その中に山崎信男という男がいた。山崎は執拗に佐和に付きまとっていた。今でいうストーカーだ。二度と結婚するつもりがなかった佐和は交際を断り続けたが、ある日、山崎は部屋に上がりこみ無理やり佐和を自分のものにしようとした。抵抗する佐和の頬を殴り押し倒した。ちょうどその時に小沢勝己が帰宅した。

南さんはそれを「タイミングがよかったのか悪かったのか」と言っていた。

佐和の体にのしかかる山崎の姿を見た小沢勝己は頭に血がのぼったのだろう。後ろから山崎の首を掴み佐和から引き離した。そのあと山崎に殴る蹴るの暴行を加えた。佐和が必死で勝己を止めたが、勝己の力が強くて止めることができなかった。山崎は命こそとりとめたが、瀕死の状態で救急車で運ばれた。

「小沢勝己という男は母親の佐和さんのことが大好きで、彼女を守りたかったんですね」

話を聞いて胸が熱くなり、あえて『小沢勝己という男』と言った。写真立てに映る佐和の写真に視線を向けた。笑っているが、どこか寂しそうにも見えた。

「そうだな。あんたは佐和さんにはすごく感謝していた。だから佐和さんを守るためならなんでもしようとしたんだろう。ただ、それが……」

南さんはそこで言葉を呑み込んで天井を見上げた。

「それが、なんですか？」

「まあ、あんたには言いにくいですが、やっぱりそういうやり方は間違っていた。それが、逆に佐和さんを苦しめることになった」

その後、南さんは俯いてしまった。暫く沈黙が続いてから南さんが一言「すまん」とだけ言った。

確かに南さんの言う通りだと思った。その状況で小沢勝己も冷静にいることは難しかったのだろうが、小沢勝己のとった行動は母親を苦しめる結果になったのは間違いない。

「いえ、確かに南さんの言う通りだと思います。暴力を振るってしまったことは良くなかったです」

私はそう言って唇を噛みしめた。

それから、私の今後について話し合った。私は、さっきのスーパーで働いてみたいので面接に行ってみると言った。南さんは少し渋い顔をしたが、頑張れ、とだけ言ってくれた。南さんはその日は酔いつぶれることなく帰って行った。

私は次の日の朝、目が覚めてからスーパーにアルバイトの面接がしたいと電話をいれた。二日後に面接に行くことが決まった。南さんに報告しようと思ったが、南さんの連絡先を聞いていなかったことに、その時気づいた。

肉売り場で働きたい。私はそう思っている。しかし肉を切ったことのない小沢勝己になった今の体は、それについてこれるのだろうか。大沢勝男として、頭では覚えている

が体がついてこないかもしれない。そういう不安が少しあった。

柚菜が保育園の時に保護者の徒競走に参加したことがある。学生の頃は足にはそこそこ自信があった。

しかし、保護者の徒競走では、頭は学生の頃のつもりで足を動かしていたが、全く体がついてこなかった。気持ちだけが先走りし上半身だけが前につっこみ、ゴール手前で足が絡まり転んでしまった。

それを見ていた園児や保護者たちに笑われながらも立ち上がり足を引きずりながらゴールしたことを思い出した。

父親がみんなに笑われて、柚菜に恥ずかしい思いをさせたなど心配したが、柚菜は私の転んだ姿を見て一番笑っていたらしい。

「お父さん、ダルマさんみたいだったよ」

その日の夕食の時に柚菜はそう言ってニコニコしていた。あの頃は幸せだったなとつくづく思う。

南さんに面接が決まったことを伝えたかった。南さんに次はいつ会えるのだろうと思っていたら、チャイムが鳴った。玄関のドアを開けると、そこに南さんが立っていた。

「南さん」私の声は弾んだ。

「どうだ、ゆっくり眠れたか」南さんはニヤニヤ笑っていた。

「ええ、最初は不安で眠れなかったんですが、知らない間に眠ってしまいました」

「そうか、ならよかった。どうせ朝から何も食ってねえだろと思ってな。これでも食え」

南さんがコンビニの袋を私の目の前に差し出した。

「すみません、わざわざ買ってきてくれたんですか」

私はコンビニの袋を受け取り頭を下げた。

「たいしたもんじゃねえ。おにぎりとお茶だけだ」

「ありがとうございます。遠慮なくいただきます。どうぞ、上がってください」

私はテーブルの前に置いてある座布団をパンパンとはたいてから置き直した。

「ああ、遠慮なくお邪魔するよ」

南さんが部屋に上がり、座布団に腰を下ろすとすぐにタバコに火を点けて紫煙を吐いた。

「ちょうど南さんに報告したいことがあったんです。南さんに連絡しようと思ったら、南さんの連絡先を訊いてなくてどうしようかと思ってたところなんですよ」

「そうか」

「南さん、今後のために連絡先教えて下さいよ」

南さんの前に座り、紙とボールペンを差し出した。

「わしは携帯電話は持ってないし家に電話はないんだ。わしの方から、あんたにちょくちょく会いにくるから、報告することがあったら、その時に言ってくればいい」

南さんはそう言って紙とボールペンを私の方に押し返した。

「そうですか。でも住所だけでも教えておいて下さいよ」

私はもう一度、紙とボールペンを南さんの方に差し出した。

しかし、南さんは「いや、いい」とだけ言って、タバコを灰皿に押し当てた。

南さんにもいろいろ事情があるのだろう。前科者の私と会っていることは家族に内緒

にしているのかもしれない。そう思うと申し訳ない気持ちになった。

南さんにスーパーの面接が決まったことを伝えた。喜んでくれたが、面接の時に正直に過去の犯罪のことを話すつもりだと言うと、「大丈夫か」と不安そうな表情を浮かべた。

面接は午後二時からと決まっていた。電話に出た店長の声はおだやかで好感が持てた。南さんと買い物に行った時の店の雰囲気も良かったし、きっと働きやすい職場だと期待した。しかし、南さんが心配するように前科のある男をすんなり受け入れてくれるだろうかとも思った。

面接の十分前にスーパーに到着し、店内カゴを片付けていた中年の女性に面接に来たことを告げた。

女性が、「少々お待ちくださいね」と柔らかい口調で言って、カウンターに行き電話をしていた。私が面接に来たことを、店長か誰かに内線で伝えてくれているのだろう。電話が終わり、女性はカウンターから出て、穏やかな笑みのまま私の前まで来た。

「お待たせしました。ご案内しますので、どうぞ」

そう言って右手を差し出して先を歩き出した。私は女性の背中について行った。野菜の売場を通り肉の売場を抜け、奥のドアの前で女性が立ち止まった。

「この奥になります。どうぞ」

女性はそのままスイングドアの奥へと入っていった。私も女性に続いて入った。急に視界が狭くなった。そこから先は店のバックヤードだ。明るい店内とは対照的に薄暗い。そのまま女性について両サイドに段ボール箱が積まれている通路を進んだ。奥に小柄な男性が立っている姿が見えた。男性の左横から灯りが少しもれていた。

「店長、面接の小沢さんを連れてきました」

女性は小柄な男性に向かって声を掛けた。

立っている小柄な男性が店長のようだ。男性の前まで来て、名札をちらっと見たら『店長 小林』と書いてあった。

「はじめまして、店長の小林です」

男性は背は低いが背筋をピンと伸ばし、両手を前に組んで深々と頭を下げた。電話のおだやかな感じそのままの人だ。

「はじめまして、小沢勝己です。今日はお時間をとっていただきありがとうございます。よろしく願いいたします」

私は深々と頭を下げた。

「佐々木さん、ありがとう」

小林は案内してくれた女性に向けて笑みを浮かべて言った。

「はい。では、失礼します」

女性はそう言って踵を返して、その場を後にした。

「どうも、ありがとうございました」

女性に礼を言うタイミングを逃してしまい、女性の背中に向けて頭を下げた。女性は振り返り、ペコリと頭を下げてくれた。

「頑張ってくださいね」

女性はそう言ってから、踵を返し早足で歩いて行った。女性が去ったあと、店長の小林は私に向かってもう一度頭を下げた。

「今日はよろしくお願ひします。では、中へどうぞ」

小林が灯りがもれる部屋のドアを開けた。

私は「失礼します」と言って先に部屋に入った。

「右側の椅子におかけくださいね」

小林が私の後ろから声をかけてきた。

部屋の広さは三畳程度だ。目の前にテーブルを挟んでパイプ椅子が向かいあって置いてあった。私は右側の椅子の前に立った。

「どうぞ、堅苦しくかならずに、遠慮せずおかけになってください」

小林がそう言って、笑みをくれた。

「は、はい」

面接なんて何年ぶり、いや何十年ぶりだろうかと緊張した。

椅子に座ってから部屋を見渡した。奥に事務机があった。机の上はスッキリと片付いていた。パソコンの画面に細かな数字が見えた。

小林はパソコンの画面を消してから私の前に座った。

「狭くて汚いところで申し訳ありませんね」

小林が部屋を見渡しながら苦笑した。

「いえ、そんなことはありません。前に働いていた店に比べれば、本当にきれいです」

「小沢さんは、スーパーでの勤務のご経験はあるんですか」

小林が訊いてきて、「えっ、いえ、ま、間違えました」と慌てて否定した。

大沢勝男の記憶のまま話してしまった。何を間違えたのかと小林は変に思ったかもしれない。首を傾げていた。

「間違えましたか」小林がそう言いながら、背筋を伸ばした。

「こういう仕事ではありませんけど、これまで働いた職場に比べて、すごくきれいで、雰囲気の良い職場だなと思ひまして」

「そうですか。ありがとうございます。お世辞でも嬉しいですよ」

お世辞ではない。本当にきれいに整理されている。狭いのは、どこのスーパーも同じようなものだろう。店内はできるだけ広くて明るくきれいにするためにお金をかけても、バックヤードにはお金をかけない。狭くて薄暗いのが普通だ。

きれいかどうかは、そこで働く人で決まる。整理整頓が出来ているかどうか。そういう意味では、ここのバックヤードは整理整頓されていてきれいだ。この部屋も無駄なものがなく整理整頓されていて好印象を受けた。思っていた通り働きやすい職場だと確信した。

それから、南さんといっしょに書いた履歴書を小林に渡してすぐに面接が始まった。小林からは勤務時間や時給のことなどの説明があった。私は自分のこと、小沢勝己の過去を包み隠さずに正直に話す決めていた。

交通事故に遭って記憶を失っていることや、過去に父親を殺害したこと、傷害事件を犯したことについて包み隠さず話したが、驚いたことに小林は「その件に関しては承知しております」と平然と、そして少し笑みを浮かべながら言った。



どういふことだ。なぜ知っているのかと不思議に思った。そして、知っていて面接してくれたことに感謝した。

「どうして私が記憶を失っていることや殺人事件や傷害事件を犯していることをご存じなんですか」

私が訊くと、小林はにっこりと笑みを浮かべて教えてくれた。

「小沢さん、南さんて方をご存じですよ」

小林は椅子に座り直してから少し前のめりになって言った。

「あっ、はい。南さんにはよくしてもらってます」

「いい方ですよ。元警察官だそうですね」

「はい、そうみたいです」

「昨日、その南さんが私を訪ねてきて、あなたのことをいろいろと教えてくれました。あなたが殺人事件や傷害事件を犯した過去があることや、今記憶を失っていることなどです」

「えっ、そ、そうなんですか」

「小沢さんは昔犯罪を犯してしまってますが、本当はそんな犯罪を犯すような人間ではなくて、心の綺麗な人だと言ってました。自分が責任を持つから採用してやってほしいとのことでした。あまりに熱心をお願いするものですから、とりあえず採用させていただくことに決めてました」

小林はそう言って口元を綻ばせた。

「ありがとうございます」

額がテーブルにぶつかるくらいに頭を下げた。

「いろいろとご苦労されたんですね」

小林の声に顔を上げた。

「いえ、どんな事情があっても犯罪を犯してはいけなかったです」

私が言うと小林は何度も頷いた。

「但し、三ヶ月間は見習い期間ということでお願いします。もしトラブルを起こすことがあれば、その時は即刻辞めていただきます。そういう条件でよろしいですか」

にこやかな表情だった小林の顔が真顔になった。

「はい、雇っていただけるだけで有難いことです。感謝の気持ちしかありません」

心の中は目の前にいる小林に対する感謝の気持ちと南さんに対する感謝の気持ちであふれていた。また目頭が熱くなり涙がこぼれそうになった。小林に気づかれないように目頭を押さえた。

勤務は明日からと決まり、事務所を出る前に小林に向けて深々と頭を下げた。

アパートまで帰ってくると、アパートの前に背が低く丸い人影が見えた。南さんだ。南さんは私の姿を見つけると顔をしわくちやにした。私はその顔を見た瞬間、母親の元に向かう保育園児のように南さんの元へと走って行った。

「南さーん」

「よう」

南さんは相好を崩したまま右手を上げた。その右手にはコンビニの袋がぶら下がって

いた。

「南さん、ありがとうございます」

南さんの前に立ち、深々と頭を下げた。

「その様子だと、面接はうまくいったようだな」

南さんが頭を下げる私の肩をポンポンと叩いた。

「南さんのおかげです」

私は顔を上げて南さんの顔を見てからもう一度頭を下げた。

「就職祝いに一杯やろうかと思ってな」

南さんが踵を返して私のアパートの部屋の方へと歩きだした。

「はい」私は南さんの背中を追った。

部屋に入ってすぐに南さんが買ってきてくれた缶ビールで乾杯した。格別に美味しい。

仕事は明日から行くことになったと言うと、じゃあ、今日は軽めにしておこうと南さんは言っていたが、私の仕事が決まったことを南さんは自分のことのように喜んでくれて、買って来た缶ビールを全て空にしまい、最後には、そのまま横になり眠ってしまった。

鼾をかく南さんに布団を掛け、私も明日のために早めに寝ることにした。電気を消して横になった。流しの前にある窓から月明かりが差し込む。南さんの鼾が一定のリズムを刻む。なかなか眠れそうにない。目を閉じて明日から仕事をする自分の姿を思い浮かべた。大沢勝男として働いていた頃の情景が頭に浮かぶ。高山や清水と売上を競いあって、お互いに意見交換した時のことを思い出した。レジを打つ独身の頃の沙知絵のすらりとした姿が瞼の裏に浮かんだ。何時間、そうしていたのか、気がつくと、窓から射す月明かりが朝日に変わっていた。

首だけを持ち上げて南さんを覗き見た。鼾はしていなかったが、胸が大きく上下している。まだ眠っているようだった。南さんの寝顔に向けて「南さん、ありがとうございます」と呟いた。

「よかったなあ」と聞こえたので、慌てて南さんを見た。南さんは口を開けて気持ち良さそうに眠っていた。寝言のようだった。

南さんには、いつか本当のことを話し、自分が小沢勝己ではないことを告白すべきだと思っている。これまで南さんと楽しく酒を飲んでいても、本当のことを隠していることが心の片隅に引っ掛かって、楽しく会話できなくなる。いつか本当のことを全て話して、南さんと朝まで思う存分飲みあかしたい。

アルバイトの初日、肉売場の責任者石原チーフを店長の小林から紹介してもらった。南さんに連れられてはじめてこのスーパーに買い出しに来た時に肉売場に立っていた男性店員だった。

「小沢さん、今日からよろしくお願ひします」

石原は澆刺とした声で右手を差し出してきた。その時の石原の表情は、はじめて石原を見た時のお客さんと楽しそうに会話していた時の表情と同じだった。石原は若そうだが店長の小林同様、信頼できる人間だと思った。

「こちらこそよろしくお願ひします」

私も出来るだけ声を張り右手を差し出した。

初日の仕事は主に肉のパック詰めと値札をつける作業だった。石原はそれを丁寧に教えてくれた。最初はぎこちなかった私だが、徐々に感覚が戻ってきてすぐに慣れた。久々に肉を触った感触がたまらなく嬉しく、そして仕事していることが楽しかった。

石原からは「小沢さんは経験者？」と驚かれた。

「ええ、まあ。昔に少し」と適当に返事をした。

「小沢さん、あとですね」

石原はそう言いながら、少し悩むような表情をした。

「はい、何でしょう？」

石原の表情を見て、私の仕事ぶりに何かまずいことでもあったのだろうかと不安になった。

「小沢さんにはこれから仕事に慣れたら売場にも立ってほしいですよ」

石原は少し遠慮がちに口を尖らせていたが、私は売場にも立ちたかったので、石原の言葉が素直に嬉しかった。

「はい、喜んで売場に立ちます」

私が声を弾ませると、石原は「あ、そうです」と私の顔に人差し指を向けた。

石原の顔がパッと明るくなった。私はわけがわからず、首を傾げた。

「为什么呢？」

「小沢さん、年上の方にこんなこと言うと失礼かもしれないんですけど、さっきまでパック詰めしている小沢さんの真剣な表情はちょっと怖いんですよ。だから接客はどうかかなと思ってたんですよ。でも、今の笑顔なら大丈夫です。売場では、その笑顔をお願いしますね」

石原がそう言って口角を上げた。

「わかりました。そうですね、気をつけます」

今の私の小沢勝己としての外見は確かに怖い。笑顔を心がけないとお客さんが怖がってしまうだろう。石原の指摘は有り難かった。これから小沢勝己として、ここで働いていくには、心がけておかなければならないことだ。

「じゃあ、いきなりですけどちょっと売場に立ってみましょうか」

石原は少し遠慮がちに言った。

「はい、頑張ります」

私は、取組前の相撲取りのように顔をパンパンと叩いてから笑顔を貼り付け、石原について売場に出た。

「いらっしやいませ。今日は豚肉がお買い得ですよ」

石原が先に元気に声を張り上げた。

「いらっしやいませ。豚肉お安いですよ」

私も石原に続いて少し緊張しながら声を出した。

「小沢さん、緊張せずにもう少し元気に声を出しましょうか」

石原が耳元で優しい口調で言った。

私は「はい」と頷いてから、深呼吸し、腹の底から声を張り上げた。

「いらっしゃいませ。今日は豚肉がお買得ですよ」

スーッと体の力が抜け、清々しく引き締まる思いがした。この感覚は久しぶりだった。

「小沢さん、その調子です」

石原がまた耳元で言った。

「あなた、新しい従業員さんなの？」

年配の女性のお客さんに声をかけられた。

「はい、今日から働いています。よろしく願います」

「頑張ってるね。ここのお肉は安いし美味しいから、いつもここに買い物に来るの。これからよろしくね」

お客さんから声をかけられて嬉しくて涙が出そうになった。

仕事の初日は無我夢中で働いて、あっという間に時間が過ぎていった。すごく楽しかった。仕事がこんなに楽しいと感じたのはいつ以来だろう。

着替えを終えて更衣室から出ると、店長の小林が更衣室の前に立っていた。

「お疲れさまでした。小沢さん初日はどうでしたか？」

「小林店長、お疲れさまです。石原チーフにいろいろと教えてもらいながら、迷惑かけないように必死でした」

「疲れたでしょう」

小柄な小林が目を細めて私を見上げた。

「ええ、でも、楽しかったですし、清々しい気分です。採用してくれたことに感謝しています。本当にありがとうございます」

体が二つに折れるくらい頭を下げた。

「いえ、そんなに感謝されるようなことじゃないです。うちも人手がほしかったので助かります。石原も小沢さんが来てくれて喜んでましたよ」

「そうですか、それならよかったです」

他人から頼りにされ、自分の存在が喜ばれることが、こんなに気持ちのいいものなのかと、改めて感じた。

この先、ここで働きながら、小沢勝己としての人生をなんとかやっていけそうな気がした。

しかし、その考えは甘かったようだ。前科のある人間が普通に生きていくのはそんなに簡単なものではないことを、この後すぐに思い知らされることになった。

働き始めてから二週間が過ぎた頃だった。休み明けでいつも通り従業員入口から更衣室へ向かった。更衣室に向かう通路になぜか従業員が溢れていた。どうしたんだろうと思いつつも、みんなに向かって笑顔で挨拶をしながら、その中を歩いて抜けて行った。しかし誰も挨拶を返してくれない。目を逸らされたり訝しげな視線を向けられたりする。私に前科があることが従業員にバレてしまっていることは知っている。そういった噂はすぐに広まるものだ。

居心地の悪さを感じながら男子更衣室の前まで来たら、その奥にある女子更衣室の前に人だかりができていた。人だかりの一番手前に、小林が眉間に皺を寄せ渋い表情をして立っていた。これまでに見たことのない小林の表情だった。

「おはようございます」

私は取り敢えずその人だけに向かって挨拶をした。小林がちらりと私を見て、無言で小さく頭を下げた。そのまま男子更衣室に入ると、ちょうど石原たちが着替えをしていた。

「物騒だよな」

副店長の山本が私を一瞥してから石原に言った。

「何かあったんですか？」

石原の横に立ちロッカーのドアの取っ手に手をかけながら石原に訊いた。

石原は私の顔を見た後、山本に視線を向けた。私もそれにつられ山本に視線を向けた。

山本は「ふん」と鼻を鳴らした。

「女子更衣室で盗難があったみたいなんです」

石原が私の耳元で囁いた。

「盗難ですか」私はいきなり大きな声を発してしまった。

石原が「しっ」と口の前に人差し指を立てた。

「す、すみません」体を小さくして頭を下げた。

「女子ロッカーが荒らされてたらしくて、今警察が来ています」

爽やかな石原らしくない苦い表情で口元を歪めた。

「そうなんですか」小林の渋い表情の理由がわかった。

「あんたじゃないだろうね」

背中から声がして振り向くと山本が睨めつくような視線を向けてきた。

「違います、違います」

私は顔の前で右手を何度も振った。

「従業員があんたが来てから、怖がってんだよね」

山本が吐き捨てるように言った。

「山本さん、小沢さんは真面目な人ですよ。仕事を覚えるのも早いですし、なんの根拠もなく疑うのは失礼ですよ」

石原が顔を赤くして山本に向かって声を荒げた。石原のこんな姿を見るのは始めてだ。

「けどさ、前科者でしょ。それも殺人と傷害だって噂だし。今は猫被ってるだけじゃないの」

「山本さん、小沢さんはそういう人じゃありません」

石原が山本に詰め寄った。

「そう人じゃないって、ちょっと一緒に仕事しただけのお前がこの人のことどこまでわかってんの」

山本が詰め寄り石原に鼻がぶつかるくらい顔を近づけた。私はどうすることもできず立ち尽くしていた。

「小沢さんといっしょに仕事したら、そういう人じゃないって、誰でもすぐにわかりますよ」

石原も興奮しているようで、山本に顔を近づけたまま喚いた。

「まあ、石原落ち着けや」山本が石原に圧倒されて後ずさりした。

「僕は落ち着いています」顔を赤くした石原の鼻息は荒かった。

「そういう人じゃなかったにしてもさ、みんながそう思ってるのは事実なんだ。この人が

来てから働きにくいと思ってる従業員も多いんだよ。そこは、石原も社員として考えないといけないだろ」

「みんなの誤解を解くのが僕たち社員の仕事じゃないですか」

「はいはい、わかったよ。石原はお利口さんだからな。取り敢えず警察に早く犯人捕まえてもらうしかないわ」

山本はそう言って、両肩を上げ、私を一瞥して更衣室を出ていった。小林と石原、肉担当のスタッフ以外からは、私は受け入れてもらえていないようだ。

小林店長は、私が過去に犯した殺人と傷害事件について副店長の山本と石原にだけには話しておくが、他の従業員に広めないように二人には口止めしておくと言っていたのだが、ほとんどの従業員が知ってしまっているようだった。さっきの山本の歪んだ顔が頭に浮かんだ。

結局、警察が指紋などを調べたようだが、女子更衣室から外部の人間の指紋は見つからなかった。内部犯行でしょう、ということで警察の介入は終わった。

これまでこんなことがなかったのに、私が働き始めた途端にこんな事件が起こったと、山本と同じように私を疑う者は多かったようだ。

「なんの証拠もないのに、小沢さんを疑うなんておかしいです。小沢さん、気にしないでいいですよ」

石原はそう言ってずっと庇ってくれた。小林も同じく、私を庇うその姿勢を崩さなかったが、そうもいってられない事態になってしまった。

肉売場以外の多くのパートやアルバイトが、私が働き続けるなら退職すると小林の元に押しかけてきたのだ。

小林はみんなを必死に説得するが聞く耳をもってくれなかったようだ。小林も石原も、私を庇うせいで苦境に追い込まれているのがわかった。

ここは私が身を引くしかないと思った。年末を迎えたこの時期に大量の退職者が出たら店が回らなくなる。店にとって大切な時期だ。それくらいのことは私でもわかる。

これ以上、小林と石原にいらぬ負担はかけたくない。私が辞めれば丸くおさまるなら辞めるしかないと思った。私の代わりなら、ここならすぐに補充はできるだろう。

アパートに帰ってからテーブルの上を片付け、買って来た便箋を広げた。大沢勝男の頃、仕事が嫌で退職願を何度も書こうとしたことはある。しかし、本当に書くのははじめてだ。暫くボールペンを手にしたまま広げた便箋を眺めた。

南さんは、私が面接に行く前日に私を雇ってほしいと小林に頭を下げてくれた。そのお陰で働けるようになった。小林と石原は私の過去のことを知りながら普通に接してくれた。お陰で短い期間だったが楽しく仕事できた。勝手に涙が出てきた。辞めたくない。しかし、小林や石原にこれ以上迷惑はかけられない。私は辞めるしかない。ボールペンを握りしめて、封筒にまず退職願と書いた。

退職願を書き終えて、ボールペンを便箋の上に置いてそのまま横になった。薄汚れた天井を見ながら、大沢勝男だった頃のことを思い出した。あの頃が幸せだったことを改めて感じた。スーパーの肉売場で出世街道から外れて愚痴をこぼしながら過ごしたこと。

沙知絵と柚菜との会話がほとんどなくなったこと。柚菜が生まれた日のこと。沙知絵と結婚してみんなから羨ましがられたこと。母親が亡くなって、この先どうしていいのかわからなくなった時のこと。父親が亡くなってしまった時の悲しかったこと。過去の記憶をどんどんと遡っていった。

しかし、思い出せたのは父親が亡くなった時までだった。それより昔のことを思い出そうとすると激しい頭痛がして思い出せなかった。

そしてどういうわけか、小沢勝己として過ごしていたことが鮮明に記憶に残っていた。私自身が経験したはずのない、父親を金属バットで殴った時の手の感触や母親の佐和を助けようとして山崎を殴った時の手の痛み。会ったことのないはずの進の鬼のような表情や母親の佐和の優しいような表情が交互に出てきた。反対に私の実の父親の俊夫と母親の五月の顔が記憶から薄れていた。

どういうことだろうかと考えた。

今の肉体は間違いなく小沢勝己のものだ。もちろん脳も小沢勝己のものだ。ということは、今、脳にある記憶は小沢勝己のままということだ。大沢勝男としての記憶があるはずがない。このまま、小沢勝己として生きていくと、大沢勝男としての記憶はどんどん薄れていき、脳にある小沢勝己の記憶が膨らんでいくのではないだろうか。

そうなる、いずれは沙知絵や柚菜の記憶も消えてしまうのではないだろうか。それは絶対にダメだ。そうなる、大沢勝男は完全に死んでしまったことになる。今の自分の存在は無くなってしまうのだ。

二人の記憶が無くなる前にどうしても沙知絵と柚菜に会いたいと思った。二人にとっては迷惑なのかもしれないが、会って話がしたい。大沢勝男は今、小沢勝己として生き返って、和歌山で過ごしていることを伝えておきたい。

仕事を辞めてから一度岡山に行ってみよう。南さんに本当のことを伝えてから、私は岡山へ行く決心をした。そして、大沢勝男として生きてきた人生を今のうちに小沢勝己の脳にしっかりとインプットしておきたい。

次の日の朝、私は小林と店長室で向かい合って座っていた。こうしていると、二週間前の面接の時のことを思い出す。たった二週間だが、ずいぶん昔のような気がする。あの時は小林に履歴書を渡したのだが、今回は退職願を渡した。小林はそれを受け取った時、無念そうに唇を噛みしめたが、止めようとはしなかった。小林の立場を考えるとやむを得ないだろう。

辞める時期は小林に任せたが、早い方がお互いのためだということで、すぐに退職することで決まった。最後に石原にだけは挨拶がしたいと言うと、小林はすぐに石原に内線をしてくれた。内線が繋がると、受話器に向かって私が今日で退職することを伝えていた。

「えーっ」という石原の声が受話器から漏れていた。

小林が受話器を置いて、私の顔を見てから、「石原はショックを受けてるようです」と言って目を伏せた。

すぐに石原が勢いよく事務所のドアを開けて入ってきた。

「店長、それはないですよ」

石原は事務所に入ってくるなりそう言った。

「決まったことなんだ」

小林は無念そうな表情を浮かべた。

「石原さん、いろいろと教えてくださりありがとうございました。せっかく教えていただいたのに、お役に立てず申し訳ありません」

私は立ち上がり石原に向けて頭を下げた。

「小沢さん、これからもいっしょにやりましょうよ。副店長の言うことなんて気にすることないですよ」

「すみません」

私はもう一度石原に頭を下げた。

「石原、新しい人は、また募集するから、小沢さんはあきらめてくれ」

「店長、そんな問題じゃないです。うちの人間関係の問題です」

石原が小林の座るテーブルに両手をついて訴えるように言った。

「石原さん、私が店長に辞めさせてほしいとお願いしたので、店長を責めないで下さい。辞めるのは私の身勝手な理由なんです」

私は石原の肩に手を置いた。石原が私の方を見て「小沢さん」と言って涙を浮かべていた。小林の目も潤んでいるようだった。

私は二人の涙を見て、ありがたい気持ちでいっぱいになった。最後に「ありがとうございました」と思いきり頭を下げた。

仕事を辞めたことを南さんにも報告しなければと思っていると、その日の夕方に南さんが両手に缶ビールとおつまみを持ってアパートに現れた。

南さんは「よお」と言って右手を上げ、自分の家に帰ってきたかのように部屋に上がり缶ビールをテーブルに置いて「どっこいしょ」と言って私の前に腰を下ろした。

南さんは私の方を見てくしゃくしゃの笑みを浮かべていた。

私は仕事を辞めたことを報告しなければならぬかと思うと、いつものような笑みを返せなかった。せっかく南さんが小林に頭を下げて働けることになったのに、たった二週間で辞めてしまったのだ。南さんに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「顔が暗いな。何かあったのか？」

南さんは缶ビールを口にしてから、タバコに火をつけて訊いてきた。

私は、仕事場でロッカー荒しがあったことが原因で仕事を辞めなければならなくなったことを伝えた。

南さんは「うーん」と唸ってから、暫く沈黙した。

「せっかく、南さんが店長の小林さんをお願いしてくれたお陰で働けることになったのに、申し訳ありません」

沈黙の続くなか、私は南さんに土下座をした。

南さんは辞めるべきじゃない。辞めたらロッカー荒しを認めたことになると言ってくれたが、小林や石原に迷惑をかけながら働き続けることはできないと伝えた。

南さんは「わかった」とだけ言って、缶ビールを飲み干した。

南さんからこの先、どうしていくのかと訊かれた。ここで本当のことを話しておくべ



きだと思った。

しかし、私は小沢勝己ではなく大沢勝男という人間で、交通事故にあって天国に向かう途中に二人が入れ替わってしまったことを説明して、南さんはそれを信じてくれるだろうか。

「どうした？ まだ何か言いたそうだな」

南さんが怪訝な表情を浮かべた。

「ええ。実は南さんに隠していることがあります。いつかそれを話さなければならぬと思ってました」

座り直し背筋を伸ばしてから南さんの顔をじっと見つめた。

「大事な話のようだな」

南さんも座り直し背筋を伸ばした。

「はい。今から私が話す内容は、南さんには信じがたいことかもしれませんが、最後まで聞いてください」

「わかった。話してくれ」

私はこれまでのことを包み隠さず話した。その間、南さんは口を挟むことなく、目を閉じたままじっと耳を傾けてくれた。

話し終えてから、南さんを見た。どんな反応をするのか気になった。

南さんが目を開けて私を見た。口角を上げた優しい笑みを浮かべていた。

「ふーん、そんなことがあったのか。不思議な話だなー」

南さんがあまりにもあっさり信用してくれたので、私は拍子抜けした。

「はい、不思議な話です。南さんはこの話を信じてくれるんですか？」

「そうだな。信じがたい話には違いないが、死後の世界なんて、わしらにはわからないことだらけだからな。それにあんたがわしに嘘つく理由もないしな」

南さんはタバコを取り出しライターで火をつけた。

「信じてくれてありがとうございます」

「て、ことは」

南さんが紫煙を吐きながら私の顔をじっと見た。

「は、はい、なんでしょう？」

「いや、いい。やめておく」

南さんはタバコを灰皿に押し付けた。

「なんですか、言ってください」

私は前のめりになって訊いた。

「いや、て、ことはだな」

「はい、何でしょう？」

「小沢勝己はあんたの代わりに天国へ行ったわけだな」

「そういうことのです」

「そうか、天国か」

南さんは少し嬉しそうな表情をして天井に視線を向けた。

「はい、天国です」

「小沢勝己は天国で佐和さんに会えたのかな？」

「多分、会えたんだと思います」

「あいつ、今頃、母親孝行してるかな」

「どうでしょう。天国のことはわかりませんが、きっと母親孝行してるんじゃないですか」

「そうだよな。あいつ、本当は優しい男だからな」

「そうみたいですな」

「進は地獄に落ちてるよな」

南さんは私の顔をじっと見てきた。その目はさっきまでとは違い鋭くつり上がっていた。

「は、はい、そう思います」

私が言うと南さんは何度も首を縦に振った。

「あんたには悪いが、小沢勝己が天国に行けてよかったと思ってる」

「小沢勝己さんのことを、あなたからいろいろと教えてもらって、小沢勝己は天国に行くべき人だったということはわかりました」

複雑な心境だが、そう思ったのも確かだ。地獄行きの審判はコンピューターがやっていると言っていたが、コンピューターではなく、閻魔様がやっていたら、小沢勝己を地獄に行かせなかったのではないだろうか。閻魔様なら、小沢勝己が殺人を犯してしまった事情も汲んでくれたようにも思う。

私がもう一度死ぬ時には、いろいろな事情を汲んで審判してくれるようなコンピューターになっていることを期待したい。でないと、私は殺人犯の小沢勝己として地獄に落とされることになるかもしれないのだ。

## 愛と憎

こんなに短くて緩やかな坂道だったろうか。もっと急で長い坂道だった気がする。道幅はもっと広がったようにも思う。坂道を上がりながら周りの景色を見渡した。その景色は記憶しているより小さく見えた。

小学生の頃に毎日通っていた道を大人になってから久しぶりに通ると、その景色が小さく見えることがあるが、今はそれに似た感覚だ。

小沢勝己として生まれ変わり、大沢勝男の頃より身長が二十センチも高くなったせいだろう。体力も強くなったせいか、この坂道を上るのも苦痛に感じない。

大沢勝男の頃、この坂道を上り切ると、喉の奥からゼゼエと変な音がして、足は棒のようになっていた。家にたどり着いた時には完全に疲れ切っていた。

今は息切れもしていないし足は棒のようになっていない。身長は二十センチ高くなっているが体重はあの頃より軽くなっている。メタボだったお腹は見事に空気が抜けたようにペタンコになっている。ふくらはぎや太ももはゴツゴツした岩のように筋肉がもりあがっている。

私は坂道を上りきり、そのまま立ち止まることなく左に曲がっていった。三本目の角を今度は右に曲がり三軒目の家が、私が大沢勝男として過ごしたマイホームだ。

十八年前に沙知絵と結婚し、それから二年後に柚葉が生まれた。柚葉が小学生になる前にマイホームを手に入れようと十二年前に、思いきってこの地にマイホームを購入した。駅からは歩いて二十分以上はかかる。商店街やスーパーへ買い物に行くには十五分ほど歩かなければならない。

当時の給料でローンを組むには、これくらいの不便さは我慢せざるを得ないだろうと思った。

私の通勤には不便な場所だったが、幼い柚葉にとっては交通量も少なく空気もきれいな土地で公園も所々にあり良い環境だったと思う。

健康のために歩くのもいいのよ、と沙知絵は言った。私も毎日坂道を上り下りするからダイエットになるよと言ったはずだ。お互いにこの不便さをポジティブにとらえることができた。

ただ、私の体重はこの坂道を毎日上り下りしたにも関わらず増加する一方だった。今思えば、ただの幸せ太りだったのだろう。あの頃はその幸せに気づけていなかった。

歩みを止めて辺りを見渡した。引っ越してきた当時ニュータウンで若い家族連れが多く萌えた町も当時の姿が影をひそめ、少し枯れた町並みになっていた。

ゆっくりと歩きだし、一軒一軒の家を眺めた。ここから離れて一ヶ月ほどしか経っていないはずなのに、この地域で暮らしていた頃が遠い昔のように感じた。

『大沢』という表札があがる家の前にたどり着いた。小さな鉄製の扉の奥にプランターが二つ並んでいる。その奥に、いつもは沙知絵の自転車が置いてあるはずだが、今はない。ドアは固く閉まっていた。二階のベランダもひっそりとしている。

表札、鉄製の扉、プランター、ドア、ベランダの順に何度も視線を走らせた。こうして、この家を眺めていると、大沢勝男として過ごした記憶がお湯が沸騰したようにブクブクと湧いてくる。

この家に引っ越してきた日のこと、『大沢』という表札を見て誇らしげに思ったこと、プランターに朝顔やヒマワリの種を油菜といっしょに植えた日のこと、家族三人でベランダから星を眺めた日のこと、どれもいい思い出だ。

今思い出した大沢勝男として生きてきた記憶を小沢勝己の脳にしっかりとインプットし頭の中に塗り固めておかなければならない。私は大沢勝男なんだ。この記憶を絶対に消してはならない。

出来るだけ多くの記憶をインプットしておこうと思ったが、ここであまり長居していると不審者に間違えられる恐れがある。今の私は、知らない人から見たら反社会的な人間にしか見えない。他人の目には注意しないとイケない。特に噂好きでおしゃべりな隣の皆川さんの奥さんには注意が必要だ。

皆川さんに警察に通報でもされたら大変なことになる。そこそこのところで切り上げた方がいい。両隣の家と向かいに建つ家のベランダを見渡した。他人の目がないことを確認してからズボンのポケットからスマホを取り出しカメラモードにしてこの家に向けた。パシャパシャとスマホに映る我が家を数枚写真に収めた。この写真を後でゆっくり眺めよう。

実の父親と母親、二人の顔が記憶から消えて思い出せなくなっていることが心苦しかった。二人の写真を見れば記憶がよみがえるかもしれないが、あいにく二人の写真は手元にはない。この家のなかに入れば父親と母親の写真があるはずだ。この家の鍵の隠し場所は覚えている。しかし、勝手に家に入って不法侵入で警察のお世話になるわけにはいかない。諦めて踵を返した。

小沢勝己になって一ヶ月が経つ。その間に大沢勝男としての記憶は小沢勝己の脳から徐々に消えてしまっている。このペースだと来年を迎える頃には完全に大沢勝男の記憶を失ってしまうのかもしれない。

すべての記憶を失う前に、大沢勝男として生きてきた記憶の全てを上書きをしておかなければならない。私は長い坂道を下りながら次の目的地へと向かった。

鈍色の空が広がる高台から見える景色は霞んでいた。晴れた日には、海に浮かぶ船や釣り人の姿がよく見えるのだが今日は残念ながら見えない。父親の俊夫が海釣りが好きだったので、この地に墓を立てた時の記憶はまだ残っている。

『大沢家之墓』と書いた墓前に立ち、手を合わせた。花も線香もお供えも持ち合わせていないことと二人の顔を思い出せないことに申し訳ないと頭を下げた。

墓石の横には、すでに私の名も刻まれていた。享年五十才。本当の大沢勝男はすでに死んでいるのだと実感した。

それなのに天国にも地獄にも行けず、こうして小沢勝己の姿となって生きている。天国では、今頃どうなっているのだろうか。南さんは小沢勝己が天国で母親の佐和に会えただろうかと気にかけていた。

私の父親と母親は、私が天国に来ていないことで、慌てているのではないだろうか。今、墓石の前に立つ、この男が何者なのか訝しげに思っているのかもしれない。

大沢俊夫と大沢五月、私の本当の父親と母親の名前はまだ記憶に残っている。墓石の前で手を合わせながら二人の名前を何度も何度も繰り返し呟いた。大沢勝男としての記憶が完全に消えてしまう前に、俊夫と五月、二人の名前を新しい記憶として刷り込ませておく。

二人の顔を思い出そうと試みると、頭が刺すように痛み出した。あまりにも激しい痛みなので、墓前に手を合わせるのを中断し、両手の人差し指で左右のこめかみを思いきり強く抑えた。しばらくそのままでは痛みがスーッと消えていった。痛みが消えるのと同時に男の顔が頭に浮かんだ。

それは会ったこともないはずの小沢勝己の父親の進の顔だった。じっと睨みつける進の表情から私に対する憎悪と侮蔑を感じた。何度も首を振って鬼の形相を追い出そうとした。

この男が小沢勝己と小沢佐和の人生を滅茶苦茶にしたのだ。この男の記憶を消し去りたい。しかし、消し去りたい記憶ほど頭にしっかりと刻みこまれ離れないものだ。

次に浮かんできたのは、これも会ったことのないはずの小沢勝己の母親の佐和の顔だった。切れ長な一重瞼の瞳から放つ光は柔らかく私を包んでくれた。しかし、それはすぐに消えてしまった。

享年五十才。死ぬにはまだまだ早すぎる年齢だ。人生はこれから先が楽しいのだ。やりたいこともたくさんあった。

大沢勝男として生きてきた人生でやりたかったことは何だったのかと自分に問いかけてみた。しかし何も出てこない。これまでの人生で私は夢や希望を持っていなかった。ダラダラと無駄に寿命をすり減らしていたんだと、今になってつくづく思う。限りある貴重な寿命を、あたかも無限にあるかのように勘違いして過ごしてしまっていた。

私は十一月十一日に亡くなっている。その前日十一月十日にトラックに跳ねられたのだ。

あの日、私は仕事が休みだった。柚菜が学校へ行き、沙知絵がパートに出掛けたあと、高山と清水と居酒屋へ飲みに行った。清水が離婚してから元気がないので、三人で飲みに行って、清水を元気づけようと高山が計画してくれた。私も清水のことが心配だったし、高山と清水と過ごす時間があの頃は一番楽しい時間だったので、二つ返事でオーケーした。

今ごろ高山と清水はどうしているのだろうか。清水は少しは元気になったのだろうか。あの二人にも会いたくなった。そこで次の目的地が決まった。

二階建ての建物を二車線の道路を挟んだ向かいの歩道から眺めた。建物の前にある駐車場にとまっている車はまばらだった。年々お客さんの数は減っていった。クリーム色

だったはずの建物の壁は色を失っていた。所々、雨のしずくのような後が、灰色になっていて、この建物が涙を流しているように見えた。道路を横切りもう一度建物を見上げた。出入口の上に掲げてある看板の文字もくたびれ消えかかっている。こんなに傷んでいたのか。

考えてみれば、毎日のようにこの建物の中で働いていたにも関わらず、この位置からゆっくりとこの建物を見上げることなど、今までになかった。

いつもため息を吐きながら、背中を丸め俯いたまま建物の裏口から入り、帰る時も裏口から出て建物に振り向くこともなく、そそくさと帰っていた。

たまには、こうして遠くから眺めて、この建物に感謝の気持ちを伝えるべきだったなと思った。

出入口から店内へ入った。高山や清水の顔を忘れてしまう前に、新しい記憶として焼き付けておこう。

店内に入ると、大根が山積みされているのが、目に飛び込んできた。その横に小柄な男が立っていた。小さい目に大きな口。そしてやたらと声大きい。

「今日は大根が安いよー」

高山が手を叩きながら声を張り上げていた。たくさんのお客さんが大根を手に取り買い物カゴに入れている。

その度に高山が「ありがとうございます」と笑顔で声を張り上げている。

出せ街道から取り残されたと三人で愚痴をこぼしながらも、こうしてみんな一生懸命に働いた。特に高山はいつも楽しそうにハツラツと仕事をしていた。

大根の売場を眺めていると、高山と目が合った。高山が少し怪訝そうな目で私を見た。今の私の姿を見たら、やむを得ないかもしれない。食品スーパーの野菜売場には似つかわしくない顔だ。普通の買い物客には見えないだろう。クレームをつけにきたチンピラと思ったかもしれない。

「今日は大根が安い」

笑みを貼り付けてから、思い切って高山に声をかけてみた。

「は、はい、今日は大根がお買い得ですし、他に白菜や椎茸もお買い得ですよ」

高山は、そう言って白菜や椎茸の並ぶ売場を手で指した。

買ってあげたいが、荷物になるので買ってやれない。何気なく大根を手にとってみた。立派な大根だ。右手に力を入れて大根を握った。

私に異変が起きたのは、そのすぐ後だった。大根を握った瞬間に大根を持つ手がキリキリと痛みだした。続いて頭の中に鉛でもぶちこまれたのかと思うほど、頭がズシリと重くなった。視界が霞み、目の前に積まれた大根の山や高山の姿が歪んで見えてきた。船酔いでもしたように気分が悪くなった。

大根を持つつりとした冷たい手の感触が、少しずつ変わり、ざらりとした細いものに変わっていった。

それは、小沢勝己が空き地で金属バットを拾いあげた時のあの手の感触だった。そして、小沢勝己が金属バットを拾った空き地の風景が目の前に広がった。私が経験したことのないはずの小沢勝己のドス黒い過去の記憶が、私の頭の中でどんどん広がっていく。鼓動が激しくなり体が熱くなった。呼吸を整えようと大きく息を吸うが全く効果が

ない。その場に立っているのさえ苦しくなった。そのまま目を閉じてじっと堪えた。

気分の悪さはおさまらない。無意識に「ウォー」と大きな声を張り上げ、持っていた大根を思いっきり床に叩きつけていた。

そこで体がフッと楽になった。足元を見ると、叩きつけた大根が割れて、ハの字になって左右に転がっている。顔を上げると多くの視線が私に集中していた。

高山を見ると、あぐりと口を開けていた。「あ、あ、あ、あ」と喉の奥の方から音を発していたが、言葉にはなっていない。

熱くなっていた私の体が一気に体温を失いガクガクと震え始めた。  
「す、すみません。こ、これ、弁償します」

床に落ちて二つに割れた大根を左右の手で一本ずつ拾い上げて、高山に向かって頭を下げた。

高山は言葉を発することなく、歯をガタガタと鳴らし震えていた。  
「お、お客様、お、お買い求めいただかなくても、け、結構です。そ、それより、お、お怪我はございませんか」

高山の口からやっと出た声は震えていた。私への配慮をみせるところは、やはり優しくて思いやりのある高山だと思った。

「私は大丈夫です。それより、これ、申し訳ないことをしました」  
割れた大根を左右の手に持ったまま、もう一度、詫びた。

「ほ、本当に大丈夫ですので、お客様、お気になさらずお買い物をお続けください」

高山がそう言いながら、恐る恐るといった感じで私から大根を受け取ろうと両手を差し出した。

「本当に申し訳ないことをしました」  
私は高山に割れた大根を手渡した。

大根を渡す時に高山の顔をじっと見た。高山の方は、私と目を合わそうとせずに割れた大根に視線を落としていた。

「高山、これまでいろいろとありがとう。お前のおかげで楽しかったよ。これから元気で頑張れよ」

大根を渡しながら心の中で、そう呟いた。  
高山は割れた大根を持って、私に一礼しバックへと消えて行った。  
高山の背中に向かって「ごめん」と手を合わせ、野菜売場から離れた。

店内を歩いていると、私が大根を投げつけた騒動のせいで、買い物客が私から距離を置いた。災いに巻き込まれたくないといった感じで、遠くからチラチラと冷たい視線を向けている。その視線が私の体に次々と突き刺さっていく。すぐにでもこの場から離れたい心境だが、どうしても清水の顔を見ておきたかった。

冷たい視線を向ける人の中には常連の買い物客で、私がこれまでに何度も接客し、見知った顔もあるが、向こうからすれば、今の私は不審人物にしか見えないのだろう。

とりあえずメイン通路からお客さんの少ない中の通路へと避難した。醤油やソースなどが並ぶ売場に挟まれた通路で一度深呼吸した。さっき私に起こった異変は何だったのか。大根を握った瞬間に意識が朦朧となり、小沢勝己のドス黒い過去の記憶が、まるで私が経験した記憶のようによみがえってきた。

小沢勝己は生きている間、ずっとこんなドス黒い記憶と闘い続けてきたのだろうか。これからは、私とそのドス黒くて耐えがたい記憶と闘っていかなければならないのだろうか。

そう思うと「ハァ」と重い息が出た。

お客さんの少ない通路を歩きながら気持ちを落ち着かせた。ふと、先を見ると通路を抜けた先に豚肉のトレイが並んでいるのが見えた。

私が一ヶ月前まで働いていた肉売り場だ。私がいなくなってからはどうなっているのかと思い、ゆっくりと豚肉売場に吸い寄せられるように足を向けた。

通路を抜けると肉の売場が目の前にパッと広がった。冷蔵ケースの棚に豚肉が並ぶ。右に視線を向けると鶏肉が並び左に向けると合挽肉、牛肉が並ぶ。眺めているだけで目頭が熱くなった。しばらくその場から離れられなくなり、目の前に広がる肉売場を眺めた。

白衣を着た女性が、「いらっしゃいませ」とお客さんに声をかけながら豚肉のトレイを並べていた。パート従業員のリーダー的存在の西崎さんだ。まさか後ろに立っている怪しげな男が、一ヶ月前まで一緒に働いていた大沢勝男だとは夢にも思わないだろう。

相変わらずお客さんの視線が私を突き刺してくるが、ここからすぐには離れたくなかった。じっと見ていたい。

作業場から背の高い若い男が出てきた。私の部下として働いてくれていた遠山だ。几帳面で真面目な男、白衣姿よりスーツ姿の方が似合う風貌だ。遠山は売場に並ぶ商品を順に指差しながら西崎さんに笑みを浮かべ話していた。

「わかりました。チーフ」

遠山が話し終わると、西崎さんは口元を綻ばせながら言った。

その後、遠山は「お願いします」と言って笑顔でペコリと頭を下げた。楽しそうだった。私がいなくなったことなんて、すでに遠い過去のことになってしまったのかもしれない。

私の後継として、この若い遠山がチーフに昇格したようだ。私の部下として働いていた頃より、遠山の目は生き生きしている。頼りない部下だと勝手に思っていたのに、こうして見ると仕事の出来る切れ者の男に見える。

遠山にとっては私がいなくなってよかったのかもしれない。ここには私のいる場所はない。名残惜しいが、私は肉売り場を後にした。

清水は出勤しているのだろうか、そのまま隣の鮮魚売場へと足を向けた。出来るだけお客さんや店員に視線を向けず、商品の並ぶ冷蔵ケースを見ながら歩いた。

今日はブリがお買い得のようだ。正月用の数の子やごまめも並んでいる。これからが一年で一番忙しい時期になる。みんながピリピリと神経を尖らせる季節だ。あの頃はそれが嫌で嫌でしかたなかったが、今思えば懐かしい。

鮮魚売場を見ながら清水の姿を探した。売場に清水の姿は見えなかった。清水は人見知りで職人気質な性格だ。高山とは違い、あまり売場に出て、お客さんに声をかけて売り込むことはしなかった。店長に売場に立って売り込めとよく注意されていたのを思い出す。今日もこの奥で黙々と魚を捌いているのかもしれない。しばらくここで待つことにした。

「いらっしゃいませ」と弱々しい声が背中から聞こえた。



聞き覚えのあるその声は清水の声だとすぐにわかった。慌てて振り向くと、そこには清水がぼんやりした表情で立っていた。

「清水」一瞬声が出そうになった。清水の肩に手を置きそうになった。上げた手をすぐに引っ込めた。

清水は鮮魚担当のなかではめずらしくおとなしい性格だ。鮮魚の担当者は比較的気性が荒くて、声が大いのだが、清水の声は冷蔵ケースのモーター音にかき消されそうなくらいに小さい。

清水が若い頃、当時のチーフから『鮮魚は威勢が大事だ。もっと元気な声を出さねえと、魚の鮮度まで悪く感じるじゃねえか』と怒られていたのを思い出した。

怒られている時の清水は肩をすぼめて小さくなり、『はい』と、これまた小さな声で返事をしていた。その小さな返事を聞いたチーフは顔を赤くして怒っていた。

結局清水は変わることなく、今でも鮮魚売場に立っている。清水はブリの切り身の補充をはじめた。

私は清水の横に立ちブリの並ぶケースを覗きこんだ。

「いらっしゃいませ」

清水は相変わらずの声で、私の方に顔を向けることなく声を出した。

「今日はブリが安いね」

ブリの切り身を手に取って声をかけた。

「ええ、お買い得ですよ」

清水は一瞬こっちを見たがすぐに目を逸らした。

「でも、今日はブリはやめておくわ。申し訳ない」

「いえ」

清水は私に目を合わすことなく短く答えた。

「じゃあ、清水、元気でな」

つい、『清水』と口に出してしまった。

さすがの清水も驚いて私に顔を向けた。

「はい？」と言った清水の顔は怪訝そうだった。目の前にいる不気味な男がなぜ自分の名前を知っているのかと思ったのだろう。

私は苦笑いを浮かべ清水の肩を叩いて、その場から立ち去った。

とりあえず、高山と清水二人の元気そうな姿が見れてよかった。二人の姿を今の私の記憶にしっかりと刷り込んだ。

あとは柚菜と沙知絵に会いたい。二人は私が死んでから、どんな生活を送っているのだろうか。一家の主を失い途方に暮れているのか、それともこれまでと変わらず過ごしているのだろうか。まずは柚菜に会いに行ってみよう。

バスを降りてから辺りを見渡した。まっすぐ伸びる長い坂道の向こうに緑に埋もれた薄茶色の建物が見えた。

「あれか」

私は白い息と共にそう呟いて坂道の方へと向かった。今年の春から柚菜はこの高校に通い始めたが、私がここに来るのは今日が初めてだ。結局大沢勝男としては一度も来ることがなかったわけだ。入学式に柚菜は父親の私に来てほしかったのだろうか。

柚菜がここを受験したいと言った時のことを思い出した。

夕食の片付けを済ませてリビングに腰を下ろした沙知絵の横に正座した柚菜は学校案内の資料を沙知絵の前に広げた。

「ここの制服はかわいいし、ここを受験しようと思ってるの。お母さん、どう思う？」

柚菜はそう言って沙知絵の顔を覗きこんだ。

沙知絵の前に座っていた私は沙知絵の様子を伺った。沙知絵は柚菜が広げた学校案内の資料に視線を落としていた。

「ふーん」と言いながら沙知絵は何度も首を縦に振り資料を見続けていた。

「学校は制服で選ぶもんじゃない、もっと将来のことを考えて選ぶべきだろ」

私が沙知絵より先に口を開いた。

沙知絵が資料から私に視線を向けた。そして私の目をじっと見た。目が合うと、沙知絵は口元に笑みを浮かべた。そして言葉を発することなく、視線を資料に戻した。

柚菜に視線を向けると口を尖らせて、私の視線を避けるように遠くを見ていた。そこで家族の会話は途絶えた。

結局、私の意見は、その後遠くに追いやられたようだ。沙知絵と柚菜でこの高校を受験することに決めていた。

長い坂道を登りきると、左手にテニスコートが見えた。右側に視線を向けると、広いグラウンドが広がっている。テニスコートとグラウンドの真ん中に一本道が走り、その向こうには薄茶色の校舎がそびえ立つ。近くで見ると重量感のある壮大な建物だ。

柚菜はここでどんな高校生活を送っているのだろうか。楽しめているのだろうか。今もこの建物のどこかにいるのかと校舎を見上げながら一本道を歩いた。傾きかけた太陽の光が校舎の窓ガラスに反射し目に刺さった。

眩しくて視線を下げると、校門の前に体格のいい男が立っていた。短髪で黒っぽいジャージを着たその男はこちらを睨むように見ていた。右手には竹刀が握られている。パンパンと威嚇するように地面を叩いていた。

男の醸し出す雰囲気からして、この学校の厳しい体育教師か生活指導の教師といったところだろう。きっと私のことを不審者だと思って睨みつけているのだろう。

私は教師と目を合わさないようにして、校門の前を抜け、そのまま体を左に向けて歩いていった。右後方から教師の視線を感じる。しばらく歩いて教師の視線が届かないところで立ち止まった。この位置なら教師から私の姿は見えないが、校門から出てきた柚菜を見つけることができない。

そこでチャイムが鳴った。授業が終わったようだ。しばらくすると、さっきまでシンとしていた校舎からザワザワとした声が漏れはじめた。時おり張りのある甲高い声がこだまする。

教師に見つからないように校門に近づき、学生が出てくるのを待った。すぐに学生たちがゾロゾロと校門から吐き出されてくる。教師は学生たちの群れに気を取られて私に気づいていない様子だ。この隙に柚菜を見つけ出さなければならない。教師の目に注意

を払いながら学生の流れる群れに慌ただしく視線を巡らせ柚菜の姿を探した。

出てくる女子生徒全員が柚菜が可愛いと言っていた制服を着ている。その上柚菜は背が低いので見つけるのは大変だ。私は学生の流れる群れに必死で視線を走らせた。

柚菜の身長は私に似て低めだが、やせ形で整った顔立ちは沙知絵に似てくれて良かったと思う。

学生の群れは途切れ途切れになる。ずっと目を凝らしていたが、ついに、群れはぱたりと途切れた。さっきまでのザワザワした慌ただしさが嘘のようにひっそりとしてしまった。

私は顔を上げ天を見上げた。せっかくここまで来たのに柚菜を見つけられなかった。

さっきの教師が校門の外に姿を見せた。鋭い視線であたりを見渡している。そこで目が合った。こっちにギロリと睨みをきかせている。ヤバイなど視線を外し体を小さくして、そそくさとその場から離れた。

テニスコートとグラウンドを両サイドに見ながら歩いた。名残惜しくて歩くスピードは遅くなった。

テニスコートから元気な声が激しく飛び交う。柚菜と同世代の女の子たちのハツラツとした表情が見える。それを横目に歩いた。この中に柚菜がいないかと思渡したが居そうにない。柚菜がテニス部に入ったとは聞いていないから当たり前だ。しかし、私の知らないところで部活に入ってるかもしれない。

もう少し待ってみようかと、足を止め校門の方へ振り向いた。すると、あの教師が竹刀を肩に担いでこっちをじっと見ていた。彼は私の姿が見えなくなるまでそこに居座るつもりだろう。仕方なく踵を返しバス停へと向かうことにした。重い足取りのまま来た坂道を下っていった。

「キャッハハハハ」

後方から耳をつんざくような高い笑い声が聞こえた。振り向くと、学生数人のグループが歩いてきた。私は端に寄り足を止めて学生たちの姿に目を凝らした。この中に柚菜がいるかもしれない。こっちへ向かってくるグループは三つある。先頭のグループは男ばかりだ。彼らは早足でプロ野球の話題で盛り上がりながら、私の前を通り過ぎて行った。すぐに二つ目のグループが近づいてくる。女子が三人いる。この中に柚菜がいるかと一人一人順に目で追いかけたが残念ながら柚菜の姿はない。彼女らはお互いのスマホの画面を見せあいながらキャッキャッ、キャッキャッと高い声を発しながら私の存在を気にすることもなく過ぎて行った。

三つ目のグループが近づいてきた。男子学生が一人先を歩いて、そのすぐ後ろに女子が二人並んでついている。男子学生の影になっている女子学生に視線を向けた。左側の女子の姿が見えたが、髪の毛の色で柚菜でないことはわかった。右側の女子は男子の陰になってみえない。

男女の三人組と私の距離が近づいたところで男子の後ろに柚菜の姿を見つけた。

「柚菜」と声が出そうになったが、グッと堪えた。今の私は大沢勝男ではない。

三人が私の横を抜けていく。柚菜の姿を目で追って、私は三人のすぐ後ろについて歩き出した。柚菜の隣を歩く女子学生は柚菜の肩に手を回している。

二人の前を歩く男子学生は柚菜のところまで行き、柚菜の頭に手を置いて、柚菜の耳

元で何やら言葉をかけていた。そして空に向かって笑っていた。女子学生の方は柚菜に顔を近づけニタニタと嫌な笑みを浮かべていた。

この男女二人と柚菜とは、見た目も雰囲気もだいぶ違う。柚菜は黒くて長い髪の毛を後ろで一つに結びポニーテールにしている。髪を短くすれば若い頃の沙知絵にそっくりだ。高校生なので、もちろん化粧品もしていないし髪の毛も染めていない。親の私が言うのもなんだが、清楚で可愛い女子高生だ。私は柚菜が幼い頃から他のどの子供よりかわいいと思っていた。

今、柚菜と一緒に歩いている女子高生は紅い唇をして化粧をしている。髪の毛も赤く染めている。女子学生は相変わらず柚菜にもたれかかるように肩に手を回している。ずっと耳元で柚菜に話しかけながらニヤニヤと笑っている。柚菜は俯き加減で目を伏せ唇を噛みしめていた。友達と一緒にいて楽しそうにしているようには見えない。

男子高生の方は金色の髪をしてだらしなくズボンを下着を低くずらしている。柚菜と女子学生が歩く少し前をフラフラと蛇行するように歩いた。時々振り返り、二人に向かって何か言葉を発していた。はっきりとは聞き取れないが、嫌な予感しかしない。私は三人の後をそのままついていった。

三人はダラダラと蛇行しながら坂道を下っていった。あまりにも歩くスピードが遅いので、それに合わせて歩くのに苦労した。たまに立ち止まり、三人との距離を空けてからまた後ろをついていった。

やっとバス停のところまで来た。柚菜と女子高生がベンチに腰を下ろした。男子学生は柚菜の座る前に腕を組んで仁王立ちした。柚菜に向かって何やら声を発してから柚菜の頭をくしゃくしゃと撫でていた。その姿に優しさは感じない。

私はバスを待つふりをして、柚菜の座るベンチの横に立って、三人の話し声に耳を傾けた。三人は私の存在を気にする様子もなく話を続けていた。

柚菜がチラッと私の方を見た。柚菜と目が合った。私にSOSを送っているように見えた。

「大沢さー、これからもあたし達が、西原のバカから守ってあげるからねー」

女子学生が柚菜に向かって言った。

「さ、沢原さん、きょ、今日はどうも有難うございました」

柚菜は俯いたまま、前を走る車の音にかき消されそうな声で言った。

「任せといて、真也さんが味方についたら、この学校で怖いもんなしだかんね」

女子高生は前に立つ男子学生に向けて笑みを浮かべ親指を立てた。男子学生も笑みを浮かべて親指を立てた。

「まっ、俺に任せとけ」

男子学生が柚菜の頭をポンポンと叩いた。

「あたしと真也さんは大沢のボディガードだかんね。安心して。西原がまた苛めてきたらいつでも言ってねー」

女子学生が紅い唇の両端をキュッと上げた。

「今日は本当に助かりました」

柚菜がペコリと頭を下げた。

柚菜は西原というやつに苛められているのか。この二人が柚菜をその苛めから助けて

くれたのだろうか。

「でね、そのかわりに大沢にお願いがあるんだけど」

女子高生が柚菜の肩に手を回して顔を近づけた。

「な、何ですか？」

柚菜は相変わらず俯いたままだ。

「あたし、どうしても欲しいものがあるの。それをね、マルナカからもらってきてくれない？」

「マルナカからもらってくるんですか？」

柚菜が初めて女子高生の方に顔を向けた。怯えているように見えた。

「そう。マルナカからもらってくるの」

「もらってくるって、どういうことですか？」

「もう一、とぼけないでよ。わかってんでしょ。これ以上言わせないでよ」

そう言って人差し指を曲げて見せた。そして柚菜の耳に口を近づけて何かを言った。それを聞いた柚菜の背筋がピンと伸びて、少し震えはじめた。柚菜は何度も首を横に振った。

何を言われたのだろうか？

「えー、嫌なの？」

女子学生が紅い唇を尖らせた。

「そんなの無理です。許して下さい」

柚菜は訴えるように言った。

「チェッ、使えねえなー」

男子学生が椅子を蹴った。

「すいません」

柚菜が男子学生に頭を下げた。

「じゃあ、これから西原に苛められても助けてあげないよ。反対に西原以上に、あたしと真也さんが大沢を苛めちゃうかもしれないよ。あたしたちの方が西原より危険だからね。それくらい、大沢もわかってんでしょ。それでもいい？ 真也さんを怒らせること思ったら万引きなんてチョロいもんだよ」

「でも、万引きは嫌です」

柚菜がまた俯いて何度も首を横に振った。

「それは虫がよすぎるんじゃない？ あたしたちだって、あんたを助けたから西原と揉めちゃうはめになってるのにさー。大沢だけがリスク無しなのは不公平だと思うけどなー」

「お母さんがマルナカで働いてるから、見つかるとお母さんに迷惑かかるから」

「そうなんだ、おふくろさんが働いてんのか。じゃあさー。おふくろさんにも協力してもらえば」

男子学生が柚菜に顔を近づけて言った。

「ムリです」

柚菜の声はさっきまでとは違い、悲鳴のような大きな声を出した。

「まあいいわ。大沢万引きはやらなくていい」

男子学生が柚菜と女子学生の間をねじ込むようにして座った。

「すみません」柚菜が頭を下げた。

「うそー」女子学生が不服そうな声を上げた。

「大沢、そのかわりさー、俺にやらせてくれよ」

男子学生が柚菜の肩に手を回して体を引き寄せた。右手が柚菜の太ももを撫でている。

「イヤーン」女子学生が嬉しそうに両頬に手を当てる。

聞いていられない。私の体が熱くなった。柚菜は苛めにあっている。さっき校門に立っていた教師は何のためにあそこに立っているのだ。生徒が苛めにあっているのを見抜けないのか。怒りが一気に込み上げてきた。一度目を閉じて深呼吸し、冷たい空気を吸い込んだ。少し自分の感情を落ち着かせてから柚菜の方に体を向けた。

「大沢柚菜さんだよな？」柚菜に声を掛けた。

三人が同時に私の方に視線を向けた。

「は、はい」柚菜が不安そうな目で私を見上げた。

男子学生と女子学生も私の方を見てから柚菜に視線をやった。

「お、大沢さんの知り合い？」

女子学生が柚菜に訊いた。そして柚菜に回していた手をほどいて姿勢を正した。

「え、えーと」

柚菜が私の顔をじっと見ている。私が誰なのか記憶を辿っているようだが、柚菜が今の私を見て誰だかわかるはずがない。

男子学生と女子学生を見ると彼らの表情から笑みが消えていた。私を見る目は怯えているようだった。

「柚菜さんは知らないでしょうけど、私は柚菜さんのお父さんの知り合いです」

「は、はあ」女子学生が頼りない声を出した。

「だから、ちょっとだけいいかい？」

低くドスのきいた声を出し、男子学生と女子学生の二人を睨みつけた。

男子高生は直立不動になり、女子高生も慌てて立ち上がり赤い髪の毛を手で整えた。柚菜は座ったままぐったりとしていた。

「な、なんでしょうか」女子学生が訊いてきた。

「今、話していた、柚菜さんが苛められているのは本当なのかな？」

「え、ええ、は、はい。そ、それで今日は、あたしたちが大沢さんが苛められているのを、見るに見かねて助けたんです。か、彼が、大沢さんを苛めていた子に、弱い者苛めはダメだと注意してやめさせてくれたんです」

女子学生が男子学生の肘を握りながら答えた。

「そうなんだ。君が助けてくれたの」

私は男子学生に笑みを貼りつけながら訊いた。

「は、はい」男子学生の喉仏が上下する。

「そう、柚菜さんを助けてくれてありがとう」

私は男子学生に向けて頭を下げた。

「そ、そんな、お、お礼なんていいです。当たり前のことをしてだけです。あたしたちは大沢さんの、し、親友ですから。ねっ、ねえ、大沢さん」

女子学生はそう言って、同意を求めるよう柚菜に顔を向けた。

「そうか。君たちは柚菜さんの親友なんだ」男子学生女子学生二人の顔を交互に見た。

「はい、あたしたちは親友です」女子学生が頼りない笑みを浮かべた。

「さっき、親友の柚菜さんに、何をさせようとしてたのかな」

女子学生にきつい視線を向けて訊いた。

「えっ、べ、別になにも」

女子学生はとぼけるように口を尖らせながら首を傾げてみせた。

「まさか柚菜さんに万引きをさせようとしたわけじゃないよね。さっき、万引きしなければ、もっと危険な目に合わすみたいなこと言ってなかったかな？」

「ま、まさか。俺たち、そんなバカなこと言ってません」

男子高生の方が慌てて右手を何度も横に振り否定した。

「そう。それならいいんだけど。私は柚菜さんのお父さんにお世話になってたんでね。お父さんから柚菜さんのことをよろしく頼むとお願いされているから、柚菜さんに何かあったら、亡くなったお父さんに申し訳ないんだ」

そう言ってから、目を見開いて男子学生をぎゅっと睨みつけた。男子学生の顔色が白くなっていくのがわかった。さすがに小沢勝己の外見は、いきがっただけの男子学生には迫力があり恐ろしいのだろう。

「だ、大丈夫です。僕たちはいつも大沢さんと仲良くしています」

「そう。それなら良かった。これからも仲良くしてやってくれ」

私はそう言って右手を出した。

男子学生が、「あ、はい」と言って青白くて細い右手を出した。

「絶対に頼むよ」

男子学生の目をじっと見て、男子学生の右手を握った。

「いて」

少し右手に力を入れると男子学生は痛がった。面白くなって、もう少し力を入れると、「いたーい」と言って顔を歪めていた。小沢勝己の握力は思った以上にすごいようだ。

「もし、柚菜さんに何かあったら、私もカッとなって頭に血が上ってしまいそうなんだ。昔の血が騒ぎだしたら、自分でも止められなくなって、何するかわからない。また刑務所に戻ることになるのも嫌だから、柚菜さんを苛めてる友達にも、そのことを伝えておいてくれるかな」

私は指をボキボキと鳴らした。

男子学生と女子学生の体が震えているのがわかった。柚菜に対していきがっていたさきほどまでの姿とは別人だ。視界の片隅でバスが向かってくるのを確認した。私がバスに視線を向けると男子学生と女子学生もバスの方に振り向いた。

「は、はい、わ、わかりました。ぼ、ぼ、僕たちは、も、もう帰っていいですか？」

男子高生の方が胸の前で両手を合わせた。

「ああ、いいよ。お疲れさま。今日は柚菜さんを助けてくれてありがとう」

私は男子学生の肩に手を置いた。

「じゃ、じゃあ、僕たち、あ、あのバスで帰ります」

「じゃあ、気をつけてな」

男子学生の細い肩を強く握った。男子学生がビクッと震えた。

「大沢さん、あたしたち先に帰るわね」

女子学生が柚菜に向かって手を振って笑みを浮かべた。バスが停留所にとまった。

男子学生と女子学生はお互い顔を合わせてから私に向かって、「で、では、失礼します」と同時に言って深々と頭を下げた。

そして踵を返しそのままバスに飛び乗った。バスのドアが閉まる。バスのドアの窓に二人の背中が見えた。こっちに振り向く気はなさそうだ。二人の肩がガクンと下がるのが見えた。

やはり小沢勝己の外見はいきがるだけの高校生を威圧するには充分すぎるようだ。私が大沢勝男の姿のままなら、あの男子学生は、「うるせえんだよ。このおっさん」とか言って、食って掛かってきただろう。

しばらく走り去るバスを眺めた。バスが小さくなっていき、カーブを曲がったところで柚菜に視線を向けた。柚菜はベンチに座ったまま俯いていた。

私は柚菜の前に立った。柚菜は顔を上げようとはしなかった。

「大丈夫？」

力なく垂れ下がるポニーテールに向かって声をかけた。柚菜は俯いたままだった。

「おじさん、おせっかいだったかな」

私がそう言うと、柚菜はゆっくりと顔を上げた。柚菜の黒い瞳が微かに揺らいでいた。

「助けていただいて、有難うございました」

柚菜は蚊の鳴くような声を出し、小さく頭を下げた。体は震えていた。私の知っている元気な柚菜の姿ではなかった。

「学校で苛められてるの？」

柚菜の横に腰を下ろして訊いた。

柚菜は俯いたまま、小さな声で「はい」と言った。それを聞いて胸が締めつけられる思いがした。

「いつから？」

「えっと、半年くらい前からです」

「そ、そう」

半年前ということは、高校に入学してすぐではないか。柚菜が苛められているなんて全く知らなかった。私と沙知絵に相談できないで苦しんでいたのだろうか。それとも沙知絵には相談していたのだろうか。

「誰かに相談とかしなかったの？」

「母親に相談したことがあります」

「そう、お母さんに」

沙知絵は知っていたのだ。なぜ私に相談してくれなかったのか。それほど私は頼りにされていなかったのか。そう思うと鉛を飲み込んだようなずっしりと重い気持ちになった。

「お母さんはなんて？」

「義務教育じゃないんだし、嫌なら学校を休めばいいって言ってくれました。学校を辞めてもいいとも言ってくれました」

「けど、学校は続けてたんだ。辛かったね」



「ええ、まあ」

「お父さんには相談しなかったの」

私には相談してくれなかったことはわかっているがとりあえず、話の流れで訊いてみた。

「はい、相談したことはあるんですが……」

柚菜がそこで言葉を詰まらせた。

今、柚菜は私に相談したことがあると言った。私は相談された記憶はない。どうということだ。

「本当にお父さんにも相談したの？」

もう一度訊いてみた。

「はい、相談しました。でも父は仕事のことで頭がいっぱいそうで、とりあえず頑張れとだけ言ってそれっきりでした。たぶんですけど……」

柚菜はそこで言葉を詰まらせた。

「たぶん、どうしたの？」私は俯き加減の柚菜の顔を覗きこんだ。

「たぶん、父はあたしが苛めにあおうがどうでもよかったんじゃないかなと思います。相談したこともすぐに忘れちゃったみたいですし。母にそのことを話したらすごく怒ってました。あなたのことは、わたしが何とかするって言ったので、それからは私も母も父に相談しなくなりました」

「そ、そう」

頭を鈍器で殴られた気分だ。苛めにあって悩んでいると柚菜から相談された記憶が全くない。なんと情けない頼りにならない父親だろう。

「父は、私がこの高校に行くことをよく思っていなかったみたいだったから、もしかしたら、ざまあみろ、とでも思っていたのかもしれない」

柚菜が唇を噛みしめている。

柚菜、それは誤解だ。苛めの相談を聞き流してしまったことは申し訳なく思う。しかし、娘が苛められて、ざまあみろ、と思う父親がいるわけないだろ。その時、ふと、小沢勝己の父親の顔が浮かんだ。あいつならそう思うのかもしれない。小沢勝己はそんな父親と中学生までいっしょに暮らしていたんだ。

柚菜が苛めにあってSOSを出しているのに完全に無視した私と母親の佐和を助けるために二度も罪を犯してしまった小沢勝己。本当はどっちが地獄に落ちるべき人間なのだろうか。私は気分が悪くなり、頭を抱えた。

「だ、大丈夫ですか？」柚菜が私の顔を覗きこんできた。

「あ、ああ、だ、大丈夫だ」

柚菜が私の落ち込む様子を見て心配して声をかけてくれた。柚菜から見れば、今の私は赤の他人のはずなのに、なんと優しい娘なんだろう。

「父のお知り合いの方でしたよね。父のことを悪く言っちゃってごめんなさい」

柚菜が前を向いたままペコリと頭を下げた。

「いや、それはお父さんが悪いと思う。父親なら娘をしっかりと守ってやるべきだと思うよ」

「でも、死んじゃったから、もう守ってもらえない」

柚菜の声が震えた。柚菜を見ると、目から涙が溢れ頬を伝っていた。柚菜は私が死んでしまったことで泣いている。私まで目頭が熱くなってきた。

「そ、そうだね、急だったしね」

「ほんとに、急すぎるよ」

柚菜が私に顔を向けた。顔をくしゃくしゃにして泣いている。こんなに泣いている柚菜の顔を見るのはいつ以来だろう。柚菜の幼い頃の泣き顔を思い出した。

「でも、苛めから守ってもくれないような父親だったから、死んでもそんなに悲しくなかったんじゃないかい？」

私がそう言うと、柚菜の泣き顔がスーッと消えて能面のようなになった。

柚菜が能面のような表情を私に向ける。整った眉尻がきゅっと吊り上がる。黒目の大きい瞳から放たれた光は冷たく私を突き刺した。

「実の父親が死んで、悲しくないわけじゃないですよ」

声は凶器のように尖っていた。

「そ、そうだね、おじさん、失礼なことを言っちゃったね」

今の私は柚菜からすると、全くの赤の他人なんだ。そんな男から、実の父親が死んでも悲しくないでしょ、なんて言われたら腹が立つのは当然だ。完全な私の失言だ。

柚菜の幼い頃、休日でもほとんど遊びに連れていけなかった。学校の行事にも参加出来なかった。そして、苛めの相談も無視した。そんなどうしようもない父親でも、柚菜は私が死んだことを悲しんでくれていた。

「おじさん酷いこと言ったね。申し訳ない」

私は椅子から立ち上がり柚菜に向かって頭を下げた。

「いえ、こちらこそ、すいません。ちょっと感情的になってしまいました」

柚菜が顔を上げて小さく首を横に振った。

「お父さんが亡くなって辛かったんだね」

「はい、もう一日中泣きました。悲しくて、寂しくて、辛くて、今も父のことを思い出すと涙がでます」

柚菜の目からまた涙が溢れ頬を伝った。

「そ、そう」

意外な答えに私は慌てた。私は胸がつまり次の言葉が出なかった。柚菜の顔を見て黙って何度も頷いた。

「でも、あたしより、母の方が辛かったと思います。母は、今でも毎日父の写真を見て泣いています。だから、今は苛めのことを母にも相談出来なくなっちゃいました」

沙知絵は、私が死んだことで泣いているのか。私がいなくなって、せいせいしていると思っていたのに。そして、柚菜は学校での苛めにあい一人で苦しんでいる。助けてあげたい。今、目の前にいる我が娘を幼い頃のように力一杯ぎゅっと抱きしめてやりたいと思った。

しかし、今そんなことすれば痴漢だと勘違いされるだろう。今の私は父親の大沢勝男ではないんだ。グッと堪えてから、柚菜に向かって頑張れ、と視線を送った。

こうして柚菜と話していると、沙知絵にも会いたくなった。沙知絵には、姿は変わってしまったが、大沢勝男はまだ生きているんだと伝えたい。そして、少しでも沙知絵の

力になりたい。

「お母さんは今もパートに行ってるの？」

「はい、毎日暗くなるまで働いています。おじさんは母を知っているんですか」

「いや、会ったことはないんだけど、沙知絵さんとあなたのことはお父さんからよく聞かされていたから」

「そうなんですか。父が母やわたしのことを他の人に話してたなんて意外です」

柚菜に笑顔が戻った。

「そうかい。自分にはもったいない、すごくいい妻と娘だと言ってたよ」

「おじさんとお父さんとはどういう知り合いなんですか？」

「えっ、ああ」

返答に詰まってしまった。こんな展開になるとは考えてもいなかったから答えは準備していなかった。

「そ、そうだね」そこまで言ってから頭の中を整理しようと思ったが、なかなかまとまらない。

「お父さんには、仕事のことですごくお世話になったんだよ」とだけ言ってごまかした。

「おじさんは、お父さんと同じ会社で働いていたわけですか？」

柚菜がどんどん質問をぶつけてくる。頭を整理する余裕がない。

「いや、お父さんとは昔の知り合いでね」

「学生の頃とかですか？」

「う、うん、まあそうだね」

「おじさんも岡山の人ですか」

「そ、そうだね。む、むかしは岡山に住んでただけど、えっと、今はね、あれだ、わ、和歌山に住んでいるんだ」

「へえー、和歌山ですか。今日はわざわざ和歌山から来てくれたわけですか？」

柚菜の表情が怪訝そうになった。私の話しぶりから私が嘘をついてると感じとったのかもしれない。

「そ、そう。今日はお父さんのお墓参りをするために来たんだよ。そ、それでお父さんから柚菜さんのことをよろしく頼むって言われてたの思い出したから、一度会ってみようかなと思って、ここまで来てみたんだ」

「おじさんは、さっき、わたしが大沢柚菜だって、すぐにわかったんですか？ わたしの顔を知っていたんですか」

柚菜が警戒心を強めている。警戒心が強いことはいいことだ。けど、ここは柚菜の警戒心をとらなければならない。

「え、ま、まあ、写真をね、お父さんから見せてもらったことがあるから、それで校門のところであなたの姿を見つけて、似てるなど思ったからついてきたんだ。それで、さっきの二人が大沢さんって言ってたから、間違いはないと思って声をかけてみたんだ」

柚菜の疑いの視線が突き刺さる。汗がどっと吹き出てきた。

「へえー、そうなんだ」

柚菜は口を尖らせた。完全に疑っている。

「ほ、ほんと、ほんと、ほんとに、そ、そうなんだ」

「あたしと母のことをお願いしますって、お父さんがおじさんに言ったわけですか」

「ま、まあ、そうだね。そんな感じのことをね」

「もしかして、お父さんは、自分が死ぬことがわかっていて、おじさんにわたしたちのことをお願いしたんでしょうか？　もしかしてお父さんは自殺だったとか？」

柚菜の話が飛躍していく。まずい展開だ。

「いやいや、違うよ。実は、お父さんは、沙知絵さんとあなたをおじさんに紹介したいと言ってくれてたんだよ。だけど、その前にあんな事故にあってしまったから、私が勝手にあなたたちのことを心配してるだけなんだ」

「ふーん、そうですか」

柚菜はどこまで信用してくれているのだろうか。柚菜は沙知絵に似て勘がいい。私を怪しい人物だと思っているのかもしれない。

「そう、あなたのお父さんは、あなたや沙知絵さんのことをすごく愛してたから、きっと今ごろ天国で心配してるんじゃないかとおじさんが勝手に思って、あなたに会いにきたんだよ。お節介でごめんね」

「お父さん、あたしのこと愛してくれてたのかな」

柚菜が宙に視線をやった。

「うん、それは間違いない。すごく愛してたよ。それはおじさんが保証する」

「それならよかったです」

柚菜が私に視線を向けて小さく微笑んだ。

次のバスが向かってくるのが見えた。すると、柚菜が立ち上がった。

「おじさん、今日はありがとうございました。父のことがいろいろ聞けて、あたし少し元気になりました」

「そう。それならよかったです。おじさんもあなたに会えてよかったですよ。これから嫌なことがあっても一人で抱えこまないようにね」

「わかりました。あたし、あのバスで帰ります。おじさんは？」

柚菜が向かってくるバスに視線を向けた。

「おじさんは、もう少しここにいるよ」

もっといっしょにいたい。いっしょにバスに乗りたかったが、そこは我慢した。

「そうですか。今日は本当にありがとうございました」

柚菜がペコリと頭を下げた。

バスが入ってきて、柚菜は私に背を向けてバスに乗り込んだ。

「柚菜、元気でな」

バスに乗り込む柚菜の背中を見ながら心の中で呟いた。柚菜がバスに乗り込んでから、私にふり返り手を振ってくれた。柚菜が幼い頃に公園の滑り台を滑りながら、私に向かって手を振ってくれた時の姿を思い出した。

バスのドアが閉まり発車した。バスの中にいる柚菜に視線を向ける。柚菜もこっちを見ている。柚菜に向かって頭を下げた。柚菜もペコリと頭を下げた。バスが走り出した。バスの中に見える柚菜の姿を目で追いかけたが、ドンドン小さくなっていきバスがカーブを曲がり完全に見えなくなった。

これで、もう二度と柚菜に会えないのだろうか。いや、また会える。どうしても会い

たい。今別れたばかりなのに、今すぐ柚菜に会いたい。

柚菜がいなくなった途端、気温が一気に下がった気がした。体をブルブル震わせて、一人、バス停のベンチに腰を下ろした。肩を竦めてこの先どうするかを考えた。

振り返ると柚菜の通う高校の薄茶色の校舎が見えた。窓ガラスが赤く反射している。野球部員が私の前を白い息を吐きながら走り過ぎていく。

柚菜と久しぶりに話が出来た。話が出来て嬉しかった反面、ショックも大きかった。柚菜は高校に入学してから苛めにあい苦しんでいた。沙知絵もそのことで苦しんでいた。私は何も知らなかった。いや、仕事が忙しいとかまけて知ろうとしなかったのだ。私はそんなどうしようもない父親だったのだ。

暖簾をくぐり右手で引戸を開けると中の暖かい空気が顔に当たる。同時にソースの焼けたいい匂いが鼻に届いた。一気に食欲がわく。

一歩足を踏み入れると「いらっしゃい」と掠れた大将の声がした。

店内を見渡すとテーブル席に若いカップルが一組、サラリーマン風の男が二人座っている。鉄板の前に座る中年の男は一人ビールを注いでいる。鉄板の上にはジュージュウと音をたてるカキオコが並んでいた。牡蠣の磯の香りと香ばしいソースの匂いのせいで、私の口の中は唾液で溢れた。

カキオコは大沢家の思い出の食べ物だ。沙知絵とはじめてデートして食べたのがカキオコだった。沙知絵と付き合うようになってからも月一回のペースでここに食べにきた。柚菜が生まれてから家族三人ではじめて来たのは柚菜が幼稚園の頃だった。小さかった柚菜は牡蠣が苦手だったのでエビ入りのお好み焼きのエビオコを食べさせた。小学校の高学年になると柚菜も牡蠣が食べられるようになった。中学生の頃にはカキオコは柚菜の好物になっていた。

今日は一人でテーブル席につき、生ビールとカキオコを注文した。大将が私を見て少し怯えるような表情を浮かべた。以前は大沢勝男が来ると、すぐに生ビールを準備してくれていたが、大将にとって今の私は一見の強面の客だ。

まずは生ビールのジョッキがテーブルに運ばれてきた。今日は忙しく充実した一日だったなどジョッキを持ち上げた。

まず大沢勝男として住み慣れた自宅に行って、それから父親と母親、そして大沢勝男が眠っていることになっている墓に行った。墓石に自分の名前が刻まれているのを見て、なんとも言えない気持ちになった。

高山と清水にも会いに行った。高山を驚かせてしまって申し訳ないことをした。

柚菜の通う学校にはじめて行った。柚菜が苛めを受けていると聞いてショックを受けた。しかしそれ以上に、生前の私が沙知絵と柚菜からその事について相談をうけていたのに、無視してしまっていたことの方がショックが大きかった。

それが原因で、私に対する沙知絵の態度が冷たくなっていたのだと今頃になって知った。バカな夫でまぬけな父親だ。

柚菜も沙知絵も私が死んだことで悲しんでいると柚菜が言っていた。それが本当なら嬉しい気もするが、悲しむ二人を残して死んでしまったことに辛い気持ちにもなった。

複雑な心境だ。ビールを飲み干して二杯目を注文した。

「おまたせしました」という声とともに焼きあがったカキオコが私の目の前の鉄板に置かれた。

上に乗っている牡蠣の表面が黄金色に香ばしく焼けていて食欲をそそられる。ゴクリと唾を飲み込んでから、テーブルの隅に置いてある銀色の容器をとり、刷毛で牡蠣の上からソースをべったりと塗った。ソースが鉄板にこぼれ、ジューと音を立て湯気が立ち上がる。ソースの匂いが鼻を刺し、また生唾が口の中に溢れた。この匂いだけでビールがすすむ。まず生唾といっしょにビールを胃に流し込む。黄金色に焼けたプリプリの牡蠣を一粒だけ箸でつまみ口に放り込んだ。咀嚼すると口の中に牡蠣のミルクィさと焼けた香ばしさが口に広がり、後でソースのスパイシーさが押し寄せてくる。やはりこの地域の牡蠣は、粒が大きくミルクィで最高に旨い。咀嚼を続ける。飲み込むのがもったいない。

しっかり味わった後、口の中に残る微かな牡蠣の旨味をビールで流し込んだ。カキオコにビール、最高に贅沢で幸せな組合せだとあらためて思った。

沙知絵と柚菜と私、家族三人でカキオコを食べに来た頃のことを思い出した。あの頃は本当に幸せだった。また家族三人でカキオコを食べに来たいと思う。

しかし、沙知絵の夫、柚菜の父親としての大沢勝男は、もうこの世にはいないのだ。三人でカキオコを食べに来たいという私の願いは絶対に叶わない。

最後の一切れを口に放り込んだ。沙知絵と柚菜のことを思い出しながら何度も何度も咀嚼した。次はいつ食べられるだろうか。カキオコが口の中から消えてビールを飲み干した。ぼんやりと宙に視線をやった。目から涙が溢れてくるのがわかった。気付かれないうように人差し指と中指で目頭をおさえた。

目を覚ましてベッドから立ち上がる。窓の前に立ちカーテンを開けると曇った窓ガラスから朝日が差し込んだ。窓ガラスに人差し指で『サチエ』『ユナ』と書いてみた。書いた文字から水滴が涙のように垂れていった。

昨日柚菜に会った後、すぐにでも沙知絵に会いたくなった。和歌山には戻らず、近くの安いホテルを探しこのビジネスホテルに一泊することにした。

沙知絵がパートで働くショッピングセンターマルナカは自宅から自転車で十五分くらいのところにある。ここのホテルからだ電車でも三十分くらいで行けるだろう。

これまで一度も沙知絵の仕事場に顔を出すことはなかった。柚菜が小学生になって、少し時間に余裕ができたのでパートを始めたいと沙知絵から言ってきたのは十年も前のことだ。

将来のことを考えると少しでも貯金があった方がいいし、将来何が起こるかわからないので反対する理由などなかった。将来何が起こるかわからない、まさか自分が死んでしまい、こんなことになるなんて、あの時は思ってもみなかった。せいぜい、私が職を失うか柚菜の学費などで思った以上に出費がかさむかもしれないというくらいのものであった。

「いいんじゃないか」

あの時、私は即座に沙知絵にそう言った。

「ほんと、じゃあ、ここで働こうかなと思ってる」

沙知絵はすぐにアルバイトの情報紙をテーブルの上に置いた。私に向けてニコリと笑みを浮かべてから付箋が挟んであるページを開いて私の方に向けた。

沙知絵が開いたページを覗きこむと、そこにはもうすぐオープンするショッピングセンターのスーパーのレジの募集が載っていた。

あれから十年が経つ。沙知絵はずっと働き続けている。働きはじめた頃は、午前中だけで、週三、四日ほどの勤務だったが、柚菜が中学生になってからは朝から夕方まで週五日働くようになった。時給はドンドン上がっていった。職場では重宝されているようだった。独身の頃の沙知絵の仕事ぶりを思えば、それも頷ける。

ベージュ色の外壁には看板が競うように縦横に並んでいる。食品スーパー、ホームセンター、ドラッグストア、百円均一ショップ、衣料品店、家電ショップ、ペットショップ、ファーストフード、ラーメン屋、うどん屋にコーヒーショップ、どの店も誰もが知っている有名なチェーン店ばかりだ。

平日にも関わらず屋外の駐車場はすでに満車状態だった。それでもゲートが開く度に次から次へと車が入ってくる。入って来た車をガードマンたちが忙しく奥に建つ四階建ての立体駐車場へと誘導していた。

このショッピングセンターがオープンしてから、私が働いていたスーパーシヨウの売上は大きく下がった。売上が落ちただけ人件費は削られた。

「売上が下がってる分経費が減らされるのは当たり前だろ」店長や本社の人間は冷たく突き放す。

パートやアルバイトの人数を減らされた皺寄せは私たち社員にきた。休みがとれなくなり残業も増えた。だからといって給料が上がるわけではない。沙知絵は私の給料が上がらないので、ここでの勤務時間を増やさざるをえなくなった。

駐車場を横切って建物の中に入る。入ってすぐが沙知絵の働く食品スーパーだ。入口には今日のお買い得商品や店長おすすめの商品が載った広告が貼ってある。広告の見出しを見ると、おかげさまで十周年と書いてあった。

店内に足を入れる。白菜や白ネギが山積みになってある売り場が目飛び込んだ。売り出しだけあって、どれも安くて鮮度がいい。白菜も白ネギも艶々と輝いている。それらを品定めしながら買い物カゴに放り込んでいるお客さんの後ろを抜けて奥へ向かう。ミカンが山盛りに陳列してあった。これが今日の店長おすすめ商品のようだ。ミカンの産地は小沢勝己の生まれ故郷の和歌山県有田市だった。そのミカンを一袋手に取った。そのまま買い物カゴに放り込んで、肉のコーナーへと向かった。

肉の売場を見ていると、つい肉の品定めをしてしまう。いい肉が破格値で販売していることに驚いた。この店が十年間ずっと繁盛していたのも頷ける。鮮魚コーナーを抜ける。産地直送の魚が氷の上に並んでいる。その横で魚屋の威勢のいい声が飛び交う。そこから惣菜コーナーへと向かう。海老フライやトンカツなどの揚げ物がズラリと並んでいる。そのとなりに、たこ焼き、焼そば、お好み焼が並んでいる。どれも旨そうだ。通路の真ん中にある売場にはお弁当が山盛りに積んであった。その中から一番たくさん並ん

であった二百八十円の海苔弁当を手にとり、買い物カゴに入れた。

さて、これで買い物は終わりだ。これからが本番だ。私は「フー」と息を吐いてからレジの方に視線を向けた。沙知絵はいるだろうか。

十台以上あるレジはどれもたくさんのお客さんが並んでいる。手前のレジから順番にレジ打ちする人を確かめていった。

五番目のレジにスラリと背の高い姿を見つけた。あの姿は間違いなく沙知絵だ。

「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」と柔らかくて明るい声が耳に届いた。

沙知絵は手際よく商品をレジに通している。その姿は二十年前と変わらない。お客さんへの挨拶や声かけも完璧だ。沙知絵の自然な笑顔につられお客さんも笑顔になっている。

独身だったあの頃、店長をはじめ誰もが沙知絵の仕事ぶりを認めていた。沙知絵は将来を嘱望された若手社員だった。当時の上司たちは、彼女が、まさかうだつの上がない肉を切ることにしか能がない男と結婚して、退職するとは思ってもみなかっただろう。

久しぶりに沙知絵が働いている姿を見た。イキイキして、若々しい。笑顔もいい。二十年前のあの時の姿と全く変わらない。

心臓をバクバクさせながら、五番レジの列に並んだ。レジに並んでからも沙知絵の姿を覗き見た。

今日は十周年セールのポイント3倍ディで、レジに並ぶお客さんのカゴは商品がこぼれ落ちそうなくらい満杯だ。そのためレジも時間がかかっているようだった。

私のすぐ前に並ぶ男は、待ち時間が長いのが気に入らないようで、何度も首を伸ばし、レジの方を覗きこんでは舌打ちをしていた。

男の持つ買い物カゴの中に視線を落とすと、中にはカップ入りのお酒が数本とスルメとピーナツが入っていた。これから一杯やるつもりなのだろうか。男はそれからもずっと舌打ちを繰り返しイライラした様子だった。

「おい、まだかよ、早くしろよ」

男がついに切れてレジの方に向かって怒鳴った。他のお客さんの視線がこっちに集まった。怒鳴った声の主を確認しようとしている。なかには私が声の主だと思っている者もいるようで、私に訝しげな視線を向けてくる人もいた。私は知らぬ顔をして下を向いた。

この男のせいで、沙知絵の姿を見てワクワクドキドキした気持ちは、泡のようにスーッと消えてしまった。

沙知絵は手早くレジをして丁寧に接客を続けている。

「いらっしゃいませ。大変お待たせいたしました」

沙知絵が私の二人前に並ぶ年配の小柄な女性に笑みを浮かべ頭を下げる。あと二人で私の番だ。

年配の女性の買い物カゴの中を覗きこむと、白菜や醤油などが満杯に入っていて重たそうだった。年配の女性は買い物カゴをカートから持ち上げられない様子だった。手を貸そうかと思ったが、その前に沙知絵がスッと女性の方に回り、カートからカゴを持ち上げレジの台に置いた。

私の前に並ぶ男は、それが気に入らないようで、「チェッ」と舌打ちをし急かすようにコソコソと足で床を鳴らしはじめた。



沙知絵は男に向かって「もうしばらくお待ち下さい」と会釈してから、レジにもどり年配の女性のレジをはじめた。相変わらず手早く、そして商品を一つ一つ丁寧に扱っている。

「高岡さん、四千八百三十三円です」

沙知絵が年配の女性に笑みを浮かべて言った。

年配の女性が財布から千円札四枚を取り出し「これ、四千円」と言って沙知絵に渡した後、財布の中に入っている小銭を全てバサッとレジ台の上に吐き出した。

沙知絵は千円札四枚を受け取ってから、レジ台に吐き出された小銭を丁寧に分けながら残りの八百三十三円を取り分けていた。

その様子を後ろで見ていた男は一段と大きく舌打ちし、「うあー」と雄叫びを上げながら、買い物カゴをドーンと大きな音をたてレジの台に置いた。そして、「早くしろよー」と沙知絵に向かって怒鳴った。

「お待たせして、申し訳ございません。お客様、もうしばらくお待ちくださいませ」

沙知絵が男に向けて頭を下げた。

「クソババア、チンタラすんな」

男は年配の女性客を睨みつけた。

「お兄さん、ごめんなさいね。この歳になると目が見えにくくてね。いつもこのレジのお姉ちゃんに助けてもらってるのよ」

女性は申し訳なさそうに眉をハの字にした。

「自分で金も出せないのに買い物なんか来るな。周りが迷惑なんだよ」

男が年配の女性に顔を近づけて怒鳴った。

「ごめんなさいね」

年配の女性が男に向けて深々と頭を下げた。

「さっさとしろよ」

男は吐き捨てるように言ってレジの台を思いっきり蹴った。

私の体が熱くなり震えてきた。ギュッと両拳を握りしめた。せっかく沙知絵に会えたのに、なんという気分になってしまったのだろう。

「お客様、もうしばらくお待ちくださいませ」

そう言う沙知絵の表情を見ると、緊張して顔を強ばらせながらも、必死で笑みを貼り付けていた。女性客の体は小さく震えていた。

年配の女性の精算が終わり、男の番になった。この男の精算が終わるまで、私は落ち着かなかった。嫌な予感がした。何も無く無事に終わってくれと祈った。

沙知絵が男のカゴの中のお酒とスルメ、ピーナツをレジに通して、男に代金を告げた。

「お客様、千八百五十二円でございます」

沙知絵が男に告げる。

男は尻ポケットから財布を出し千円札二枚を抜き出した。

沙知絵が千円札を受け取りレジに入れる。レジから出てきた釣銭とレシートを男に手渡した。男は不機嫌そうな表情のまま釣銭とレシートを沙知絵の手から奪い取るように取り、そのままズボンのポケットに突っ込んだ。

なんとか男のレジが終わって私の番になった。フーッと息を吐いてから、買い物カゴ

を台に置いて沙知絵の顔に視線を向けた。沙知絵と目が合った。笑みを浮かべている。心臓が破裂しそうになった。

「いらっしゃいませ。大変お待たせいたしました」

沙知絵が私に向かって頭を下げた。澄んだ声を聞いて破裂しそうな心臓が口から飛び出しそうになった。荒くなった呼吸をおさえるために思いっきり息を吸い込んだ。

「おい」

そこで低くドスのきいた声が出た。吸った息を吐き出して、声のする方に視線を向けた。沙知絵も同時に声の方に顔を向けた。すると、さっきまで私の前に並んでいた男が戻ってきて立っていた。

男は眉間に深いシワを寄せて顎を突き出して沙知絵を睨んでいる。

「お客様、もうしばらくお待ち下さいませ」

沙知絵が私の方に顔を戻して申し訳なさそうな表情を浮かべた。

私は笑みを浮かべて首肯した。

「申し訳ございません」

沙知絵は私に頭を下げてから、男の方に体の向きを変えた。

「はい、どうされましたでしょうか？」

「どうされましたでしょうか、じゃねえわ。これ、おかしいやろ」

男はレシートを勢いよく沙知絵の顔の前に突きだした。

沙知絵が目の前でヒラヒラと揺れるレシートに目を凝らした。少し困った表情を浮かべて首を傾げた。

「わかんねえのか。よう見ろや」

男はレシートを沙知絵の顔に付くくらい前に突き出した。

「は、はい」

沙知絵が顔を背ける。

「おい見ろや、ここ。ピーナツの値段や。これ、なんぼやねん」

男がレシートを指さしながら言った。

沙知絵が男が指さすところを見る。

「ご、五百円ですが……」

沙知絵が少し戸惑い気味に言った。

「なんで、そんな高いんや。お前、ぼったくる気か」

男は台に両手を置き、沙知絵を下から睨め上げるように見た。

これまで笑みを絶やさなかった沙知絵の表情も完全に強張ってしまった。

「何黙ってんねん。ピーナツの値段が違うやろ。三百九十八円違うんか。そう書いとったぞ。そやから買うたんや。なんでそれが五百円になってんや」

「も、申し訳ございません。すぐにお調べしますので、しばらくお待ちいただけますか」

沙知絵が深々と頭を下げた。

「調べるって、お前は客の言うこと信じてないわけか」

「いえ、そういうわけではございません。申し訳ございません」

沙知絵がもう一度深々と頭を下げた。

「ほんならどういわけやねん」

「申し訳ございません」

「謝ってすむか。お前は、もういらん。すぐ責任者を出せや。お前みたいに客をバカにするやつは辞めさせたる」

沙知絵は、レジの台の下にある受話器をとった。内線で店長を呼んでいるのだろう。

それから、レジに並んでいる私たちに向けて、「申し訳ございません」と言って、台の上に、『レジ休止中』の札を置いた。

私の後ろに並んでいた人たちは、「えー」と不平の声を漏らしながら列から離れ、他のレジの列へと並びに行った。私はここから離れる気にはなれない。

あの事件のことを思い出した。そう、沙知絵と親しくなるきっかけになったあの事件だ。

しばらくすると黒縁メガネをかけた気の弱そうな華奢な男がやってきた。

「お客様、お待たせして申し訳ございません」

華奢な男は、揉み手をしながら男の前に立った。

「あんた、責任者？」

客の男は華奢な男の胸に人差し指を向けた。

「は、はい、店長の深山と申します」

「これ」

客の男が深山の目の前でレシートをヒラヒラさせた。

「はい？」

深山がそのレシートを手に取った。

「ピーナツの値段、この女がわざと間違えたんや。レジはトロいくせに値段まで間違えやがって。お前、どんな教育しとるんや」

男は沙知絵を睨みながら言った。

「さようでございますか。それはそれは申し訳ございませんでした」

深山は七三に分けた頭を深々と下げた。

「この女、客から余分に金取って懐に入れてんちがうか。こんな女が働く店やと安心して買い物も出来んわ」

「いえ、それは違い……」

沙知絵が言葉を挟もうとしたが、深山が右手を出して遮った。

「価格を間違えて、お客様から余分に代金をいただくことは、大変申し訳なく思っております」

「この女がわざと間違えたんやろ」

「わざとかどうかにつきましてはこれから調査いたします。しかし、理由はどうあれお客様にご迷惑をおかけしたのは事実でございますので、今後、このようなことのないようにしっかり教育させていただきます」

「ふーん、なんか腑に落ちへんな。お前、このままごまかして終わらすつもりやろ」

「いえ、そんなことはございません。しかし、今回はご返金ということでお許しだけませんでしょうか」

「お前なー、今の話やと、この女は辞めさせないってことか。俺に金だけ返して、なかったことにしようとしてるわけか」

「いえ、そういうわけではございません。しっかり調査して、彼女がわざと現金を着服しようとしたのがわかりましたら、それ相応の処分はいたします」

「そしたら、その処分が決まったら、俺に連絡してくれるか」

「連絡、ですか？」深山が渋い表情を浮かべた。

「そう。俺被害者やし、それくらい聞く権利あるよな」

「わ、わかりました。そうさせていただきます」

私は沙知絵の顔を見た。俯いている。唇を噛みしめている。きっとこれは沙知絵のミスではない。ピーナツのバーコードに値段を登録する時に間違えたのだ。だから、沙知絵が間違ったのではなく、ピーナツの値段を登録した人間の間違いなのだ。もちろん沙知絵が自分の懐に現金を入れるつもりなど絶対にない。深山もそのことをちゃんと説明しろよ、とマグマのような感情がフツフツとわき上がってきた。私は我慢の限界だった。黙って聞いていられなくなった。

「まだ、終わらないの？」

私は出来るだけドスをきかせ低い声で言った。

三人が一斉に私の方を見た。目が合った瞬間、深山の顔がひきつるのがわかった。また、厄介な客が現れたとでも思ったのだろう。

「お客様、大変申し訳ございません。このレジはただいま休止しておりますので、他のレジへおまわりいただけますか」

深山が揉み手をしながら私に言った。

「いや、このまま、ここで待つ。待たされるのはどうでもいいんだ。それより……」

深山と男を順に睨みつけた。出来るだけ怖い表情を作った。

「は、はい？」深山の背筋が伸びるのがわかった。

「こういう風にイチャモンつける男が許せないだけだ。この男はいつまでこのレジの人にわけのわからないイチャモンつけるんだ。それがいつ終わるのかを訊いてるんだ」

私は男を顎で指しながら言ってやった。

「わ、わたしのこと、ですか？」

男の声は裏返っていた。ポケットに手を突っ込み顎を上げ気だるそうにしていた男だったが、慌ててポケットから手を出し背筋を伸ばし顎を引いて私に体を向けた。

「そう、値段間違ってるのは、このレジの人だけのせいじゃないでしょ。それにこの人が懐に入れるなんて、そんなのイチャモンもいいとこだ」

「お客様、あちらのレジが空いてきましたので、あちらのレジへどうぞ」

深山は私をこの場から遠ざけようとする。

「いや、いい。レジはここで待つ。だから、お前が早く終わらせろ」

男を睨みつけた。

「す、すいません。シャ、シャチャョー」

男が私に深々と頭を下げた。

「店長、これは、レジのこの人の間違いじゃなくて、値段を登録した人の間違いですよ」

私は深山に向かってそう言った。

「あ、は、はい。その可能性が高いかと」

深山はポケットからハンカチを取り出して、何度も額に当てている。

「だから、この人ばかりを責めるのはおかしいでしょ」

私は沙知絵に視線を向けた。沙知絵は俯いていた。

「はい、さようでございます」

「それをちゃんと説明しなさいよ。それとあんたも、さっさとお金だけ受け取って帰りなさいよ」

「は、はい。シャチャョー、す、すいませんでした」

男はペコペコと頭を下げて、沙知絵から差額分のお金を受け取りこの場を去った。

私は、男の後ろ姿に向かってフンと鼻を鳴らした。

「お待たせして、申し訳ございませんでした」

深山が私に向けて深々と頭を下げた。私は口を歪め違う方向に視線をやった。

「お待たせして申し訳ございませんでした」

沙知絵が私のレジを始める前に私に向かって頭を下げた。

「大変なお仕事ですね。けど頑張ってください」

私は沙知絵に笑みを向けた。

「ありがとうございます」

沙知絵の目が潤んでいるのがわかった。

ありがとうというセリフはこっちのセリフだ。これまで本当にありがとう。甲斐性のないダメな夫をずっと支えてくれてありがとう。こんな私と結婚してくれてありがとう。柚菜を生んでくれてありがとう。

「こっちこそありがとう」

つい、言葉が漏れてしまった。

沙知絵は「えっ?」と言って首を傾げていた。

「いや、なんでもないです。一人言です。すいません」

私は苦笑いを浮かべた。もう少し沙知絵と話したいと思ったが、買い物を済ませ、そのままそそくさとその場を後にした。

「そうか、奥さんと娘さんの顔を見るだけとか言ってたけど、話も出来たんだな。そりゃーよかったな」

そう言って、南さんは二缶目の缶ビールのプルトップを開けた。

沙知絵の働くスーパーを出たあと、そのまま和歌山まで帰ってきた。アパートに着くと、アパートの前に立つ南さんの姿を見つけた。南さんは私と目が合うとコンビニの袋を持ち上げ笑みを浮かべていた。

岡山での二日間を南さんに報告したいと思っていたので、ちょうどよかった。南さんの連絡先は知らないが、いつも報告したいことがあると、どういうわけか南さんは私の前に姿を現す。不思議な人だ。

「けど、二人ともいろいろと大変そうでした」

「そりゃあ、一家の主を失ったわけだからな。本当に辛いと思うよ。本当に可哀想なことをした」

南さんが私の目をじっと見ていた。その目が潤んでいた。別に南さんのせいではない

のに、可哀想なことをしたと言うのは違うだろ。

「でも、もし私が生きていたら、本当のところどうだったんでしょうかね」

「本当のところってどういうことだ？」

「もし今、私が大沢勝男として生きていたら、私は柚菜が苛められていることに、今でも気づいていなかったでしょうし、沙知絵とも必要最小限の会話しかしてなかったんじゃないですかね。家族を顧みないダメな夫でしたから。あのまま生きていても、いずれ沙知絵から離婚届を突きつけられたかもしれません」

私はタバコに火をつけながら言った。

「あんたら夫婦は二十年寄り添ってきたんだろ。そんな簡単に夫婦の関係が崩れるわけないよ。そりゃあ、あんたが娘さんの相談を軽く聞き逃したことについては、奥さんも娘さんも腹が立って愛想をつかしたのかもしれない。しかし、あんたがいなくなって喜んでるはずはない。今はすごく辛くて悲しんでるんだと、わしは思う。きっと娘さんの言うてた通りだと思うぞ」

「そうですかね」

私はタバコの煙を吐いて紫煙を目で追いながら沙知絵と柚菜の顔を思い浮かべた。

南さんも箱からタバコを一本抜き取った。

「家族ってそんなもんだよ」

そう言って、タバコの先を私の方に向けてから、タバコに火をつけた。

南さんはタバコの煙を味わうように深く吸って、胸を大きく膨らませた。その後、宙に視線をやってから天井に向けて勢いよく紫煙を吐いた。

「そんなもん、ですかね？」

私は南さんが吐き出した紫煙が消えていくのをぼんやりと眺めながら言った。

「奥さんに本当のことを話してみたらどうだ」

南さんが宙に視線を向けたまま言った。

「本当のこと？」

「そう。わしに打ち明けたように、本当は自分が大沢勝男だと告白してみるんだ」

南さんが私の目をじっと見た。

「信じてもらえますかね」

「わからん。けど、このままにしておくより、価値はあると思うがな」

「そうですかね」私は首を傾げた。

「それとも、黙ってこのまま二人の前から姿を消しちまう気なのか、二人とは一生会わないつもりでいるのか」

「いや、それは辛いです」

「だろ」

南さんは紫煙を吐きながら言って、タバコを灰皿に押し付けた。

「びっくりするでしょうね」

「そりゃあ、びっくりするよ。けど、奥さんは喜ぶと思うよ。きっと喜ぶ。あんたも、そこから先に新しい道が開けるかもしれないし絶対に告白した方がいい」

南さんが熱心にすすめてくるのでその気になってきた。南さんのおかげで覚悟ができた。

「じゃあ、もう一度岡山まで妻に会いに行って、本当のことを告白してみます」

南さんの目をじっと見て言った。

「ああ、それがいい。そうと決まったら今日は思いっきり飲もうか」

「そうですね」

それから二人で飲み続け、家にあるビールをすべて飲み干してしまった。

「ビールが足らん。わし、コンビニで買ってくるわ」

南さんが立ち上がろうと膝を立てた。

「いえ、私が買ってきます。南さんはゆっくりしてください」

南さんを制して私が先に立ち上がった。

「じゃあ、いっしょに行こうか」

南さんが私を見上げニコッと優しい笑みを浮かべた。

南さんと並んでコンビニまでの夜道を歩いた。アルコールで熱くなった体が冷やされて気持ちよかった。

「南さん、本当にいろいろとありがとうございます」

空に浮かぶ三日月を見上げながら南さんに礼を言った。

「礼なんていいよ。わしは、あんたとこうして酒が飲めて楽しかったからな。昔、小沢勝己と過ごした頃のことを思い出したよ」

「南さんは本当の小沢勝己に会いたかったんですね」

「うーん、会いたかったのかな。自分でもよくわからんなー」

「でも、私を本当の小沢勝己だと思ってわざわざ病院まで会いにきたわけでしょ」

私は南さんの顔を覗きこんだ。

「まあ、そうだな」南さんは私から目をそらし空を見上げた。

「ところで、南さんは誰から聞いたんですか？」

「何をだ？」

「小沢勝己が交通事故に遭って入院していることです。小沢勝己は家族はいないですし、生前付き合いの深い人間もいなかったようです。誰が南さんに連絡したのかなと思わせてね」

私は前から疑問に思っていたことをぶつけてみた。

「ああ、昔の警察仲間が教えてくれたよ」

「昔の警察仲間ですか。その方は今どうしてる方なんですか」

「まあ、いいじゃねえか。そんなこと聞いても仕方ないだろ」

「まあ、そうですけど」

「きれいな三日月だな」

南さんが空を見上げた。

「私が本物の小沢勝己じゃないと聞いてショックだったんじゃないですか」

南さんは「フン」と鼻を鳴らした。

「なぜ、小沢勝己に会おうと思ったんですか」

「……」

「なぜですか」

「うるせえな。そんなこといいじゃねえか」

「いいことないです。気になりますから、教えてください」

「まあ、そうだな、わしの生きている間にあいつに何もしてやれなかったことを後悔しているからかな」

「生きている間、ですか？」私は不思議に思い南さんの顔を見た。

「あ、ああ。いやいや、あいつとは長く会えなかったからな。そういう意味だ」

「長く会えなかったって、どれくらいですか？」

「もう、いいだろ。刑事の尋問みたいに訊くなよ。さっさと酒買って飲み直そう」

南さんは足早にコンビニの中に消えて行った。私は南さんの背中を追いかけた。

その日、南さんは酔いつぶれて、私の部屋で眠ってしまった。南さんの寝顔を見た。かけていた色つきの眼鏡が右耳からはずれて床に落ちそうになっていた。壊れるといけないので、南さんを起こさないように、顔から眼鏡をそっと外した。眼鏡をテーブルに置く前に覗いてみた。度が入ってないことに気がついた。南さんは近視でも老眼でもないようだ。南さんの寝顔を見る。変装する必要などないのに、変なかつらを被り、度のない眼鏡をかけているのは何故だろう。変装しなければならない理由でもあるのだろうか。小沢勝己と会っている姿を誰かに見られたくないからなのか。南さんの寝顔をもう一度見る。どこかで見たことある気がしてきた。

今の季節は午後五時を過ぎると陽が落ちてあたりが一気に暗くなる。ショッピングセンターマルナカのクリスマスを飾るきらびやかなイルミネーションが華やかな光を放ち浮かび上がっている。このイルミネーションがなければこの辺りは真っ暗だろう。マルナカができるまではこの場所は誰も足を踏み入れない山の中だった。

派手なイルミネーションを横目に、建物の横を通り抜け裏口へと回った。イルミネーションの明かりが無くなり急に薄暗くなる。表とは違い建物の裏は殺風景なものだ。右の端に白く小さな灯りが見える。灯りの下には鉄製のベージュ色のドアがある。そこが従業員の出入口だ。腕時計で時間を確認する。あと五分もすれば、あのドアから沙知絵が出てくるはずだ。一時間くらい前にレジに立つ沙知絵の姿を確認した。今見に行った時にはレジに沙知絵の姿はなかった。仕事は五時までのはずだから、今ごろは着替えているころだろう。

もうすぐあのドアから沙知絵は出てくるはずだ。緊張する。タバコを吸いたくなかったが、この場所で吸うわけにいかない。我慢してタバコの煙の代わりに思いっきり冷たい空気を吸い込んだ。

従業員用の出入口のドアが頻繁に開くようになった。沙知絵と同じように五時で仕事が終わる従業員が多いのだろう。ドアが開く度に黒い人影に目を凝らし続けたが、シルエットをただ目で沙知絵でないことがわかる。

腕時計に視線を落とすと長針が下を向いている。待ち続けて二十分が過ぎた。腕時計から視線を上げた時、背が高く細身な人影が見えた。緊張が高まり鼓動が早まった。私は従業員用出入口へと近づいて行った。地に足がつかず体がフワフワと浮いた感じがした。

近くまで来て、その人影が沙知絵であることを確認した。足を止めてゴクリと生唾を



飲み込んだ。激しくなった鼓動を押さえるために胸に手を当て深呼吸した。

沙知絵は私の存在に気づくことなく歩いて行った。沙知絵の後ろに続いて歩いた。沙知絵はコンクリートがむき出しの従業員用駐輪場に入って行った。私は駐輪場の出入口の前で足を止めた。なんと声をかければいいのだろう。昨日いろいろと考えていた言葉は、頭が真っ白になり頭から全て消えてしまっていた。

駐輪場の入口から顔を覗かせると、沙知絵が荷物を自転車の前カゴに入れポケットから自転車の鍵を取り出しているところだった。自転車の後輪の鍵穴に鍵を差し込むとカチャンという音が駐輪場内に響いた。沙知絵が自転車を押して駐輪場から出てくる。私は首を引っ込め、駐輪場の外で待った。

沙知絵が駐輪場から出てきた。自転車に跨がりペダルに足をかけた。早く声をかけないとこのまま帰ってしまう。なんと声をかけるべきなのか、言葉が出ない。

「あ、あのー」 やっと白い息といっしょに言葉が出た。

そこで沙知絵が振り向いた。

「は、はい」 沙知絵は私を見て怪訝な表情を浮かべた。

「すみません」 頭を下げてから沙知絵の方へ一歩足を踏み出した。

「あ、ああ、あなたは」

そこで沙知絵が目を見開いた。跨いでいた自転車から降りて、少し柔らかい表情を浮かべた。

「先日は助けていただいてありがとうございました」

この間のレジでのトラブルのことを覚えていたようだ。しかし、沙知絵の表情には警戒の色がまだ残っている。

「いえ」と言っ、沙知絵にもう一歩近づいた。

「で、なにか？」 沙知絵が自転車のハンドルを強く握り首を傾げた。

「あなたにお話があります。少しお時間よろしいですか」

いきなり私は大沢勝男だ。君の夫なんだと言っても信じてもらえないだろう。しっかりとこれまでに私に起こった不思議な出来事を伝えるだけの長い時間がほしい。

「娘が待ってますので、すみません」

沙知絵は私を一瞥して、自転車に跨がろうとした。

「すぐに終わらせます。話を聞いてください。お願いします」

私の声がこだました。

「遅くなると娘が心配しますので、すみません」

沙知絵が私に背を向け自転車のペダルに足をかけた。

「娘さんは大沢柚菜さんですよ」

そこで沙知絵の背中が固まった。沙知絵がゆっくりと首だけを私の方に向けた。そこで目が合った。その目は今まで以上に警戒の色が強くなっていた。そこから沙知絵は自転車から降りて私に体を向けた。

「なぜ、娘の名前を知ってるんですか？」

私を尋問するような強い口調だった。

柚菜の名前を出したのは逆効果だったかもしれない。しかし、沙知絵を止めるには柚菜の名前を出すくらいしか思い浮かばなかった。

「柚菜さんは学校で苛められてませんか。元気にしていますか」

沙知絵は「えっ」と、口に手を当ててから続けた。

「も、もしかして、先日、学校に来て、柚菜を助けてくれたという男性はあなたですか？」

「あ、あ、そ、そうです。助けたわけではありませんが、柚菜さんにも先日会わせていただきました」

「柚菜から、聞きました。その節はありがとうございました」

本当にありがたいとは思っていない様子に見えた。どちらかという警戒心の方が強い。

「い、いえ」

「柚菜から聞いた話では、亡くなった主人の知り合いで、和歌山に住んでいると聞いておりますが」

「え、ええ、まあ、そうです。柚菜さんには、そう伝えました」

「主人からは、和歌山に知り合いがいるという話を聞いたことがないんですが、あなたのお名前をおうかがいしてよろしいですか？」

沙知絵は完全に警戒している。

「私は、小沢勝己と言います。私と亡くなったあなたのご主人との関係については、すごく複雑な話になります。すぐに理解してもらえるかわかりませんが、あなたにはどうしても話しておかなければなりません。だからあなたとゆっくりお話がしたいんです。どうかお時間をとっていただけないでしょうか。お願いします」

私は深々と頭を下げた。自分の足元を見つめながら沙知絵の返事を待った。

しばらく沈黙が続いた。ずっと頭を下げて沙知絵の返事を待った。顔を上げたら沙知絵はその場からいなくなっているのではないかと思うくらい長い時間だった。少し視線を上げた。沙知絵の足元が見えた。

「お願いします」もう一段深く頭を下げた。

沙知絵は「うーん」と唸った後、「わかりました」と仕方ないなといった感じで返事した。

「本当ですか」

私は顔を上げて沙知絵を見た。眉を八の字にしている。

「あまり長い時間は困ります。三十分でいいですか」

沙知絵が腕時計に視線を落として言った。

「ありがとうございます」

私はもう一度頭を下げた。

「では、ここではなんですので、二階にコーヒーショップがあります。そこでいいですか」

「はい。ありがとうございます」

沙知絵は自転車を駐輪場にとめなおした。

「それじゃあ行きましょう」

沙知絵はそう言って先を歩きだした。私は沙知絵の背中を追いかけた。沙知絵の後ろ姿は肩をいからせ、緊張している様子だった。

エスカレーターは使わず、階段で上がった。コツコツという沙知絵の足音を聞きながらついて行った。階段を上がってすぐ右手にコーヒーショップがあった。チェーン展開

している有名なセルフサービスの店だ。このチェーン店は自宅近くにもあり沙知絵とは何度か行ったことがある。沙知絵が注文するのはいつもブレンドコーヒーだった。

「ブレンドコーヒーでよかったですね。私が注文しておきますので、座って待っていて下さい」

奥の席に視線を向けて言った。

沙知絵は「は、はい」と言って奥の席に向かった。

私はブレンドコーヒーを二つ注文して、支払いを済ませコーヒーができるのを待ちながら、席に座る沙知絵に視線を向けた。沙知絵は落ち着かない様子で、視線を宙にさまよわせていた。それから鞆からスマホを取り出して、何やら操作を始めていた。柚菜に遅くなるとでもメールを送っているのかもしれない。

「お待たせしました」

その声に振り向くと、柚菜と同世代の女の子がにこやかな表情を浮かべていた。目の前にブレンドコーヒーが二つトレイに置いてあった。

沙知絵はいつもコーヒーをブラックで飲んでいて、私用の砂糖とミルクをひとつずつ取りトレイの上ののせて沙知絵の座る席へと向かった。

席に向かいながら沙知絵を見ると前をじっと見つめ口を真一文字にしていた。沙知絵も緊張しているのだろう。

「お忙しいのに、お時間をとっていただきありがとうございます」

席についてすぐに、テーブルに額が当たるくらい頭を下げた。

「で、あなたと主人との関係を教えていただけますか？」

沙知絵は、私の目をじっと見つめた。その瞳は、私が何者なのかを見極めようとしているように鋭く光っていた。

私は緊張をほぐすためにコーヒーにミルクと砂糖を入れてコーヒーを口に含んだ。沙知絵もコーヒーを口にした。

「まずは、大沢勝男さんについてです」

私はコーヒーカップを置いて背筋をピンの伸ばした。

「主人について、ですか？」

「ええ、今から私が話す内容は、普通では信じられないような話です。が、最後まで是非聞いてください。お願いします」

「はい、わかりました」

それから、自分があなたの夫の大沢勝男であることを伝え、これまでに起こった不思議な出来事を全て話した。

交通事故で死んだ後、三途の川を渡りそこから小沢勝己と間違われて地獄に落とされそうになったこと。地獄に落とされる寸前で人違いだとわかり、生き返ることになったこと。生き返ったのはいいが、そこでも小沢勝己と間違われたこと。それからしばらくは小沢勝己として生きてきたこと。

自分で話しながら、不思議な出来事だと改めて思った。沙知絵は私が話している間、口を挟むことなく、じっと私の目を見つめ、一語一句聞き逃さないように頷きながら唇を噛みしめて聞いてくれた。

私の話が終わってから、しばらく沈黙が続いた。沙知絵は頭が混乱して、どう返して

いいのかわからなかったのだろう。私は沈黙に耐えられなくなり、先に口を開いた。

「以上が今日あなたに伝えたかったことです」

そう言ってから沙知絵の言葉を待った。沙知絵は目を閉じ唇を噛みしめていた。

「そんな作り話、信用できません」

沙知絵は目を開けてゆっくりと首を横に振った。沙知絵のキリッとした目は私を睨めるように見ていた。

「本当です」私は体を前のめりにして訴えるように言った。

沙知絵は私を無視して壁にかかる時計に視線をやった。鞆から財布を出し、そこから五百円玉を取り出しテーブルにカチッと置いた。

「自分のコーヒー代はお支払いします」

沙知絵はバッグを持ち立ち上がった。すぐにでも帰るつもりだ。バカバカしい話には付き合いきれないと思ったのかもしれない。確かに信じられない話だろう。こんな話を簡単に信じる方がどうかしている。しかし、それを信じてもらうしかないのだ。

「ま、待ってください。確かに信じられない話です。私も不思議でしかたありません。でも、本当なんです。私は本当に大沢勝男なんです。あなたの夫なんです。柚菜の父親なんです。トラックに跳ねられて天国に行く予定だったんですが、天国に行く寸前で間違えられて、全く違う人間、今のこの小沢勝己として生き返ってしまったんです。本当です。信じてください」

私はテーブルに両手をつき、頭を下げた。

「そう、言われましても……」

沙知絵は首を傾げて、眉をハの字にし少しあきれた表情を浮かべて私を見下ろした。

ここで沙知絵に帰られてしまうと、二度と沙知絵にも柚菜にも会えなくなる。

「どうか信じてください」

椅子から立ち上がり頭を下げた。大男が勢いよく立ち上がったことと興奮した私の大声のせいで、コーヒーショップにいた他のお客さんたちが不審な表情で私たちのテーブルの方に顔を向けた。

「あの、少し冷静になってもらえませんか。他のお客さんが驚いています」

沙知絵がこちらに視線を向けるお客さんに向けて小さく頭を下げた。

「すいません。興奮してしまいました」

「あなたがそこまで、言うのでしたら、あなたにいくつか質問させてもらってよろしいでしょうか？」

沙知絵はそう言いながら椅子に腰を下ろした。

「はい」

私も椅子に腰を下ろした。今度は注意して声のトーンをおさえて返事した。そこで沙知絵がはじめて私に向けてクスクスと笑った。

「なにか、可笑しかったでしょうか？」

沙知絵が笑った理由を、また声が大きくならないように注意して訊いた。

「いえ、あなたの声之急に小さくなったものですから、それが可笑しくて。笑ったりしてすいません」

沙知絵がペコリと頭を下げた。

「いえ」私は小さく首を横に振った。

「そういうところは、確かに主人とよく似ています」

「そういうところとはどういうところでしょうか？」

「わたしが、あなたに声のトーン落としてくださいと言った途端に、あなたはわたしにも聞こえないくらいの小さな声になったところです」

沙知絵は口に手を当て、笑うのを堪えているようにしていた。

「そ、そうですか」

「はい。主人は人の話を素直に聞く人で、心優しくて実直な人でした。そういう主人がすごく好きでした」

沙知絵の目が少し潤んでいるように見えた。

「ありがとうございます」声が震えてしまった。

それから沙知絵は頬に手を当てて何か思考している様子だった。私はじっと沙知絵の言葉を待った。

「もし、あなたの話が本当なら」

沙知絵が私の目をじっと見た。

「本当です」

私も沙知絵の目をじっと見た。

「でしたら、今から家族しか知らない質問をします。あなたはそれに答えられますよね」

「はい、大丈夫です。答えられます」私は胸を張った。

「じゃあ、質問しますね。いいですか」

沙知絵が腰を浮かして椅子に座りなおした。

「はい」私は背筋を伸ばした。

「わたしと主人との出会いについて教えてもらえますか？」

私は、「はい」とこたえてから一呼吸おいて話した。

「私とあなたは、スーパーシンヨウという食品スーパーで働いていました。あなたはレジを担当し、私は精肉を担当していました。私はあなたに一目惚れしましたが、美しくて仕事が優秀なあなたと出世街道から取り残され、背が低くて小太りな私とは不釣り合いだと思って話しかけることもできませんでした。でも、先週、ここで起こったことと同じような事件が起こり、お客さんがあなたに詰めよっていました。私はお客さんを止めようとしたのですが、そのお客さんに殴られぶっ倒れて鼻血をだしてしまいました。それがきっかけであなたと話せるようになりました」

私がそう言い終わった後、沙知絵はしばらく沈黙し、じっと私を見ていた。

「確かに当たっています。どこで調べたんですか」

沈黙のあと、冷たくそう言った。

「調べたんじゃありません。私は本当に大沢勝男なんです」

「そうですか」

沙知絵はまだ信用していない様子で、口を尖らせていた。そして次の質問をぶつけてきた。

「わたしたち家族の誕生日はわかりますか？」

「あなたの誕生日と柚菜さんの誕生日は同じ五月二日です。いつもいっしょに誕生日のお

祝いをしました。私、大沢勝男の誕生日は八月十日。そしてついでに言えば、結婚記念日は十一月二十二日、いい夫婦の日にしようと二人で決めました。それから私は幸せでした。柚菜が生まれてから一段と幸せになりました。三人でカキオコを食べに行った頃のことを思い出して、先日その店に行ってきました」

「それも確かに当たってますが……」

少し沙知絵の様子が変わってきた。椅子の背もたれに背中を預け、宙に視線をやっていた。しばらくして私の顔をじっと見た。

「本当に、あなたは勝男さんなの？」

少し前のめりになって訊いてきた。

「は、はい、本当です。私はあなたの夫で柚菜の父親の大沢勝男です。しかし、父親だと偉そうに言える資格はないのかもしれませんが。柚菜が苛めにあってることを、あなたや柚菜が私に相談してくれていたのに、私は無視してしまいました。柚菜のことは、あなたに任せっきりにしていました。今思えば、最近朝食がシリアルに変わったのは、柚菜が苛めにあって、食欲がなくなっていたからだったんですね。柚菜に朝食くらいは食べてほしいと思って、あなたを変えたんですよね。そんなことも気づかずに、朝食は米が食べたいのにと文句を言ってしまった自分が情けないです。本当にどうしようもない夫で父親です。死んでよかったのかもしれない。このまま小沢勝己として、あなたの前に姿を見せずに生きていけばよかったのかもしれない。しかし、私はあなたに謝りたかった。そして、ありがとうという気持ちだけは伝えたかった。本当に申し訳ありません。そして結婚してくれてありがとう。柚菜を生んでくれてありがとう。幸せな家庭をありがとう」

頭を下げた勢いで額がテーブルにぶつかった。涙が溢れてきた。テーブルにポタポタと涙がこぼれ落ちた。

「頭を上げて下さい」

沙知絵の声が後頭部から聞こえる。

しかし、頭を上げることができなかった。唇を噛みしめ、溢れる涙を堪えようとした。しかし、涙は止まらなかった。

「あなたの話を聞いて、あなたが私の主人の勝男さんかもしれないとは思いました」

沙知絵のその言葉を聞いて、涙でグシャグシャになった顔を上げた。

「本当ですか。信じてもらえますか」

「うーん」

沙知絵は唸るような声を出して口を尖らせた。

「でも違うんです。あなたと勝男さんは違います」

沙知絵は首を横に振った。

「そうですか。やっぱり信じてもらえませんか」

私は上げた首を折った。涙で濡れてしまったテーブルに視線を落とした。

「はい、今の段階ではまだ信じられません。何故だかわかりますか？」

「いえ」下を向いたまま首を横に振った。

「信じられない理由をお話ししますので、少し顔を上げて下さい。でないと話づらいです」

私は涙を拭ってからゆっくりと顔を上げた。

「泣いたりして、すみません」

「いえ、主人も涙脆かったので、慣れています」

そう言って沙知絵が笑みを見せた。

「信じてもらえませんか」

「あなたが今おっしゃったことは、確かに大沢家の人間しか知らないことばかりです。わたしと柚菜と亡くなった勝男さんしか知らないはずですよ」

「はい」

「ですから、わたしはあなたが本当に勝男さんなのかもしれないと思っています」

「そうです。私は大沢勝男です」

「でも、勝男さんとあなたには全く違うところが一つあるんです」

「全く違うところですか？ 外見は確かにこんな姿になってしまいましたが」

私は自分の体に視線を向けた。

「はい、外見については間違っ生きて返ってしまったのが本当なら仕方ありません。でも、それ以外に違うところがあります」

「外見以外に違うところ、ですか？」

「はい、全く違います。わかりますか？」

「いえ」

「教えてください」

「は、はい」

「それはですね、勝男さんは、いつもわたしを呼ぶ時、サチエと呼んでくれました。それも、とても優しく愛情を込めて呼んでくれました。でも、今のあなたからは一度もサチエとは呼ばれていません」

「あ、ああ、で、でも、それはですね」

私は前のめりになりながら言い訳しようとした。

「わかります。だから、もし本当にあなたが勝男さんなら、わたしのことを今サチエと呼んでみて下さい」

「えっ、呼んでいいんですか？」

「本当にあなたが勝男さんなら、呼んでほしいです。他人行儀な話し方もやめてほしいです」

「じゃ、じゃあ呼びます」

「はい、呼んでください」

私は胸に手を当て、深呼吸した。それからゆっくりと口を開いた。

「サ、サチエ驚かせて悪かったな。こんな姿になっちゃったよ」

少し戸惑ったが思いきって昔のように言ってみた。沙知絵はにっこりと笑みを浮かべてくれた。

「あなた、おかえりなさい。凄い姿になっちゃったわね」

沙知絵の顔は笑っていたが、目から涙がボロボロとこぼれていた。

その後、沙知絵は私が大沢勝男だと完全とは言えないが信じてくれた。そしてこれからどうするかを、少しだけ話してコーヒーショップを後にした。

二人で駐輪場まで肩を並べて歩いた。こうして歩くのはいつ以来だろう。

「あなた、じゃあね」

「サチエ、ありがとう。柚菜によろしくな」

「ええ。柚菜もびっくりするでしょうけど、きっと喜ぶと思うわ」

「そ、そうか。それならいいんだけど」

「うん。きっと喜ぶ」

沙知絵が自転車の鍵を開けた。カチャンという音が闇に消えていく。

「サチエ」

「なに？」

沙知絵が自転車の前カゴに荷物を入れてから振り向いた。

「また、会えるよな？」

「さっき、約束したじゃない。あなたが本当に勝男さんなら、これから柚菜と三人で決めることがいっぱいあるんだから」

「そ、そうだよな」

「連絡待ってるから」

沙知絵は自転車に跨がった。

「わかった。連絡する」

「じゃあ、行くね」

沙知絵は私に向けて手を振ってから自転車のペダルを踏んだ。自転車が走り出し、私は沙知絵の背中を見送った。

沙知絵の姿がドンドン小さくなる。そして角を曲がり見えなくなった。もっともっといっしょにいたかった。名残惜しい。しかし、大きく前に進んだ充実感はある。

腕時計に視線を落とすと、最終電車には間に合いそうだった。今日中に和歌山に帰ろう。私は駅へ急いだ。沙知絵と話ができて、私が大沢勝男だということを少しは信じてもらえたことが嬉しくて駅へと向かう足取りは軽かった。

完全には信じてもらえなかったが、簡単に信じられる話ではない。逆の立場なら私も信じないだろう。簡単に信じる方がどうかしている。

そういえば、この信じられない話を簡単に信じた人物がいた。そう、南さんだ。南さんはなぜ、この話をあんな簡単に信用してくれたのだろうか。それになぜ、私を助けてくれたのだろうか。そしてなぜ、連絡先を教えてくれないのだろうか。なぜ、私の前に、いや小沢勝己の前に急に姿を現したのだろうか。

南さんには感謝しているが、不思議な人で、少し不気味に感じてしまうことがある。彼は一体何者なのだろうか。

そんなことを考えながら歩いていると、あっという間に駅に到着した。そしてふと視線を上げ駅の看板を見た。

『南口、south gate』と書いてあった。

「こっちは南口か」と一人呟いた。

そして南口の文字の後ろに続く『south gate』の文字に視線が釘付けになった。

「サウスゲート」と、その文字を読み上げた。

そこで私の体は固まり、しばらく駅の看板を見上げていた。そしてあることを思い出



した。遠い昔のことのようだが、あれから、それほど日は経っていない。

もしかして、そういうことなのか。だから、なのか。彼の顔を思い出す。あいつと似ている気がする。すぐにでも確かめたい気持ちになり、私は電車で飛び乗った。

沙知絵に会ってから三日が過ぎた。そして夕方に南さんがいつものようにコンビニの袋をぶら下げてアパートの玄関に姿を見せた。やっと南さんが現れた。

「奥さんに本当のこと話せたのか」

南さんはそう言って、部屋に上がって腰を下ろし袋から缶ビールを取り出した。

「ええ。早く南さんに報告しないといけないと思っていました」

「そうかい、そりゃよかった」

南さんは缶ビールを私の前に置き、ピーナッツの袋の封を開けた。缶ビールで乾杯してから南さんに訊いておかなければならないことを頭のなかで整理した。

「南さん」ビールを一口飲んでから正座して背筋を伸ばした。

「なんだ」南さんはいつもとは違う私の様子に気づいたのか、いつもの笑みが消えた。

「南さんは一体何者なんですか。何故私の前に姿を現したんですか」

「いきなりどうした？」

南さんが睨むような目で私を見た。

「南さんは私に嘘をついてますよね。それも重大な嘘を」

「嘘？ なんのことだ。わけがわからん」

南さんは私と目を合わせようとせずタバコに火をつけた。

「南さんはなぜ、私に親切にしてくれるんですか」

「それは、最初はあるが小沢勝己だと思ってたからだよ。わしにとって、小沢勝己は一生忘れられない存在だったからな」

「小沢勝己とあなたとの関係については、最初に聞かせてもらった話で理解できます。でも、私は見た目は小沢勝己ですが中身は大沢勝男です。あなたとは、全く縁もゆかりもない男です。それがわかってからもあなたは変わらず親切にしてくれました。ここまで親切にしてくれる理由がわかりません。それに、私が小沢勝己ではなく大沢勝男だと告白した時も疑うことなくあっさり信用してくれたことも、今思えばすごく不思議です」

「ハハハ、なるほどな。そう思うか」

「はい。絶対、不思議です」

「お節介な年寄りで申し訳ないな」

「そんなことはありません。これまで良くしていただいたことには感謝しています。ありがとうございます」

私は南さんに頭を下げた。

「大したことはしてないけどな」

南さんは伏し目がちに言った。

「それより南さんはヘビースモーカーですよ。いつも鞆にいっぱいタバコを入れているんじゃないですか」

脇に置いてある南さんの鞆に視線を向けた。

「そうだな。長生きしたいから、そろそろ健康のためにもタバコは控えないとな」

「その必要はないんじゃないですか」

「なぜなんだ？」

「南さんは長生きするためにタバコを控える必要なんてないですよ。あなたはもうすでに死んでいるんですから」

目をそらさず南さんの顔をじっと見た。

「わしが死んでるってか。失礼な男だな。わしはこうしてピンピンしてるじゃねえか」

南さんは自分の胸をパンパンと叩いた。

「少し前に、私は南さんと同じように鞆の中にタバコをいっぱい入れている人に会いました。でも、その人はすでに死んでいる人でした」

南さんは私から目を逸らした。唇を尖らせて宙に視線を向けた。

私はしばらく南さんの様子を伺った。南さんから言葉が返ってこない。視線は宙をさまよいつきは閉ざしている。南さんの様子を見て、私の思っていることが当たっているのだと確信した。

「南さん」

長い沈黙が続いた後、私から声をかけた。やっと南さんが顔を上げた。

「もしかして、あんた、気づいてしまったのか」

南さんがボソリと言った。

「はい、たぶん、そうじゃないかなと思ってました。そして南さんの今の態度を見て、それが間違いないと確信しました」

「そうか、ついに気づかれてしまったか」

南さんはそう言ってから、目を閉じ唇を噛みしめた。そこから、またしばらく沈黙が続いた。南さんの呼吸する音と冷蔵庫のモーター音だけが聞こえていた。

「南さん、本当のことを話してもらえますか」

私が言うと、南さんはカッと目を見開いた。そして、眼鏡をとり、かつらをはずしてこたつの上にバーンと置いた。そして、こたつから出て正座をし、床に額をこすりつけた。

「本当に申し訳ない」南さんの声は震えていた。

「やっぱりそうだったんですね」

「あんたには、本当に迷惑をかけた」

「南蓮司さん、失礼を承知で、あなたについて、いろいろと調べさせていただきました」

そこまで言ってから南さんを見た。頭を下げたままだった。

「南さん、顔を上げて下さい。私に悪いと思うなら私の顔を見て下さい」

私が言うと、南さんは「ああ」と言ってゆっくりと顔を上げた。

「南さん、あなたのことを調べてわかりました。あなたは十年前に癌で亡くなっていました。あなたはもうこの世にいないはずなんです」

「短期間でよく調べたもんだな」

南さんは宙に視線をやった。

「私は最近あなたに似た人に出会ったことを思い出しました。それは人といっているのかわかりませんが、私の地獄行きの審判に立ち会った人です」

「……」

「確か、その人はサウスと名乗ってました」

「ああ」

「そのサウスが南さん、あなたですよ」

「そうだ」

「もしかして、あの時小沢勝己を天国に行かせるために、わざと私と小沢勝己を間違えたわけですか」

「本当に申し訳ない」

南さんは、また額を床にこすりつけた。

「やっぱり、そうだったんですか」

「あんたの言う通りだ。わしは十年前に死んでいる」

「なぜ、そんなことを」

右拳を握りしめこたつの天板をドンと叩いた。体の震えが止まらない。

「申し訳ない」

「どうしてですか、どうしてこんなことを。ちゃんと説明してください」

「わしは十年前に癌で命を落とした。そして天国に行って佐和さんに会った。佐和さんは小沢勝己のことをすごく心配していた。わしはどうしても小沢勝己と佐和さんを天国で会わせなかった」

「それで、あんなわけのわからない計画を立てたわけですか」

「最初は、閻魔様のところに行って、小沢勝己が死んでも地獄に落とさないでほしいとお願いに行った。閻魔様は約束は出来ないが、考慮はすると言ってくれた。閻魔様は恐ろしい方だが、情には厚い方だから、なんとかなると思った」

「それが、地獄行きの審判を閻魔様がやるのではなく、コンピューターがやることになってしまい、あなたは慌てたわけですね」

「そういうことだ。わしはコンピューターには情状酌量というものが期待できないと思った。これで殺人を犯している小沢勝己は地獄に落とされると失望した」

「コンピューターが審判したら、そうなるでしょうね」

「そんな時にある広告を見た。それは亡くなった人間の天国行きか地獄行きの審判のアシスタントのボランティアを募集する広告だった。これでなんとかなるかもしれない、わしはそう思い今回の作戦を思いついた」

「そのとぼっちりを私が食らったわけですね」

「あんたには、本当に申し訳ないことをした。ちょうどあんたが、いいタイミングで、同じ時間に小沢勝己と同じような事故で亡くなった。それも年齢まで同じで名前も似ている。住所までもワカヤマとオカヤマと似ている。天がわしの味方をしてくれた。呑気で不真面目なバレーなら簡単にごまかせると思った」

「いいタイミング……、私にとっては最悪のタイミングですよ」

南さんの勝手な言い分に怒りがわき上がった。

「本当に申し訳ない」

「で、どのタイミングで私と小沢勝己を入れ替えたんですか？」

「最初の仕分けが終わり、三途の川を渡る前に、わしとバレー二人で最後のチェックをすることになっていた。本来は二名体制でダブルチェックしなければならないが、バレー

に、わしが一人でやるから休憩してこいと言うと、あいつは喜んで休憩に行ってしまった。そして、そこであんたと小沢勝己のデータを入れ替えてしまった」

「なるほど、あの時ですね」

三途の川の手前で私ともうひとつの青い玉がなかなか動き出さなくなったことを思い出した。

「本当なら、その後、あんたを大沢勝男として生き返らせて終わる計画だった。それがあろうことか……」

そこで南さんは声を詰まらせ唇を噛みしめた。

「もしかして、あの時のバレーですか」

「そうだ。あの時だ。バレーが、蘇生受付にあんたと小沢勝己の資料を間違えて提出してしまった。肝心なところをあいつに任せたわしの誤算だ」

「そうですね。バレーのことをあなたは信用していなかったわけですから、そんな大切なことをバレーに任すべきではなかったです」

「悔やんでも悔やみきれない」

「それで、あなたは慌てて私の入院している病院に姿を現したわけですか」

「あんたが、小沢勝己として生き返ったと知って、わしは慌てた。頭が混乱した。何とかしなければいけない。あんたを大沢勝男に戻すことはできないかといろいろと考えた。しかし、どうすることもできなかった」

「どうすることもできないんですか」

私は南さんがあの時のサウスだと気づいてから、期待していたことがあった。サウスなら私を大沢勝男として生き返らせることが出来るんじゃないかと思っていた。しかし、今、南さんの話を聞く限り、それは無理だということだ。これで一縷の望みが絶たれた。

「ああ、どうすることもできない。それで、せめてあんたには、この先の小沢勝己としての人生を幸せに生きてもらおうと思った」

「幸せになれそうにありませんよ。それに隠さず最初に話してほしかったです」

私は吐き捨てるように言った。一縷の望みを絶たれて気分は最悪だった。

「……」

南さんは無言で項垂れていた。

私は南さんに言いたいことが山ほどある。なぜ、私がこんな目にあわなければいけないんだ、この先、どうなるんだ、責任とってくれ、そんな南さんを責める言葉が頭の中を渦巻いていた。だが、南さんの様子を見てると、なかなか言葉に出せなかった。

そして、やっと出た言葉は全く違うものだった。

「小沢勝己は天国で佐和さんと会えましたかね」

項垂れていた南さんが顔を上げて私を見た。少し驚いたように目を見開いていた。口元を震わせて私の顔をじっと見ていた。

「小沢勝己は佐和さんと会えたんですか」

言葉を発しない南さんにもう一度訊いた。

「あ、ああ、そのようだ」

そこで南さんの顔に少しでも笑みがのった。

「それは、よかったです」

「その代わり、わしはあんたの人生をめちゃくちゃにってしまった」

南さんがまた項垂れた。

「もう済んだことです。それに、どうせ死んで天国に行くだけでしたし、小沢勝己として生き返れてよかったのかもしれませんが。いろんなことに気づかされましたから」

「いろんなことに気づかされた？」

「ええ。私は小沢勝己の姿になって、はじめて家族の絆に気づいた気がします。だから、これからは、沙知絵と柚菜の二人を幸せにするために生きていきます。天国に行って父と母に会うのはその後でも十分です」

「ありがとうございます。あんたが、そう言ってくれるとわしは救われる。いつかあんたがあの世界に来た時には、絶対に天国に行けるようにするから。お父さんとお母さんに会えるようにするからな」

「お願いします。けど、ズルはいけませんよ。私もこれから先の人生、天国に行けるような生き方をしますから」

「じゃあ、わしは戻るな。バレーを長い時間一人にしておけないから」

「バレーに伝えておいて下さい。コーヒーは美味しかったです。けど、サボりすぎないようにと」

「わかった。たまに会いに来るから、困った時はなんでも言ってくれ」

南さんはそう言うと、足元から順に体が霞のように薄くなり、そして消えてしまった。テーブルの上の飲みかけの缶ビールと吸殻のたまった灰皿だけが残っていた。

真っ白なウェディングドレスに身を包む姿は、百合の花のように美しい。花嫁は最初のうちは緊張していたが、今は来賓者に手を振って笑みを浮かべる余裕ができています。たまに花婿と見つめあう表情は、これまで見た中でも一、二を争う幸せそうな表情だった。

花嫁姿を私は一人で一番遠く離れた席から眺めていた。席が一番離れているが、彼女への愛情は誰よりも強い自信がある。幸せそうな彼女を見ているだけで涙が勝手に頬を伝う。涙を拭うことも忘れ、彼女の花嫁姿を見続けた。この涙は嬉しいからなのか、寂しいからなのか、自分でもよくわからない。沙知絵はきっと、柚菜を新郎に奪われた悔し涙だと言うだろう。

私のテーブルにいっしょに座る人たちは、この場には似つかわしくない男が涙するのを見て、怪訝に思っているのかもしれない。式が始まってから、誰も私に話しかけてこなかった。それでもいい、こうして柚菜の花嫁姿を見ることができたのだから。

海パン姿の若かりし日の大沢勝男に抱かれる幼い柚菜のスライドが映し出された。柚菜をはじめて海水浴に連れて行った時の写真だ。次にスーツ姿の沙知絵と背丈が沙知絵の腰あたりまでしかない柚菜がスライドに映る。小学校の入学式の写真だ。入学式前日、興奮してなかなか寝つけない柚菜を沙知絵が必死で寝かしつけていたことを思い出した。勝手に涙が溢れてくる。

それからスライドは続いた。柚菜が中学生の時の部活の写真、ディズニーランドに家族三人で旅行した時の写真、次々と映し出されるスライドを見て、どれも昨日のこのように思い出す。

花嫁の父親の知り合いということで、今日はこの席に座っている。花嫁の父親の席には、大沢勝男の遺影が置いてあった。あの席に座り、柚葉が読み上げる両親への感謝の手紙をあの席で聞きたかった。

しかし、それは叶わなかった。花嫁の父親の大沢勝男は五年前に交通事故で亡くなっているのだ。

沙知絵に本当のことを告げてから、私は小沢勝己として、沙知絵と柚葉の住む岡山で暮らした。周りの目もあり、彼女たちと私との関係は亡くなった大沢勝男の知り合いということにした。なので、少し距離を置いた付き合いになった。それでも彼女たちが近くにいることだけで、私は十分に幸せだった。

大沢勝男として生きてきた記憶がドンドン消えていく現象は、岡山で暮らし、沙知絵や柚葉と頻繁に顔を合わせるようになってから止まってくれた。小沢勝己のどす黒い過去の記憶も顔を出さなくなった。

沙知絵と柚葉とは家族に戻れなかったが、三人でお茶をしたり、カキオコを食べにも行ったりして幸せな日々を過ごせた。

柚葉の結婚が決まった時は、嬉しいというより、嫉妬する気持ちの方が強かった。沙知絵から柚葉に恋人が出来たと聞いた時は、すごく不機嫌になってしまった。

その姿を見て沙知絵は笑いながら言った。

「やっぱり、あなたは柚葉の父親ね。外見は小沢勝己でも中身は大沢勝男に間違いないわ」

それを聞いて喜ぶべきだったろうが、私は無然としてしまった。

式の最後に柚葉が両親への感謝の手紙を読んだ。

「お母さんへ、お父さんが亡くなってから、お母さんも辛くて悲しくて大変だったのに、わたしを今まで育ててくれてありがとう。わたしが悩んでいる時はいつもわたしの味方になってくれて、自分のことよりわたしのことばかり考えてくれてました。なのに、わがままばかり言ってごめんなさい。これからはわたしのことより、お母さん自身の人生を楽しんでください」

柚葉は手紙に落としていた視線を上げて沙知絵にはにかむような笑みを向けた。沙知絵を見ると溢れる涙をハンカチでおさえていた。

柚葉はしばらくそんな沙知絵の姿をじっと見つめていた。そして、大きく深呼吸してから手紙に視線を落とし続けた。

「お父さんへ、わたしが高校一年の時、交通事故で死んでしまって、すごくショックで悲しかったです。お父さんに二度と会えないんだと思うと寂しかったです。でも、お父さんはいつもわたしとお母さんを近くで見守ってくれていたんだよね。それがわかってから、わたしはどんなに辛いことや苦しいことがあっても、お父さんが近くにいると思うと乗り越えることができました。これまで本当にありがとう。これからわたしは、知也さんと共に助け合いながら生きていきます。お父さん、だからこれからはお母さんのことをもっともっとよろしくお願いします」

私は一番後ろの席で涙が堪えきれなかった。厳つい大男が一人涙を流す姿を周りの人たちは怪訝な表情で見ている。そんな目を気にすることもなく、私は涙を流しながら、最

後に「ウォー」と声を上げた。

柚菜が大きく目を見開いて私を見た。沙知絵も私を見た。二人はウンウンと頷いた。私はまた「ウォー」と声を上げた。

柚菜の結婚式から数日後に沙知絵から連絡が入った。

「二十年前にあなたと買ったマイホームは、わたし一人だと広すぎるの。私たち、そろそろ次の人生にステップアップしない？」と沙知絵は電話口で言った。

---

天使の誤算

---

著 まつだつま

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---